文學士坂本健一講述

露西亞史

早稻田大學出版部藏版

露西亞史

目次

發端……一

第一編　古露西亞の興廢

第一章　古露西亞の創業統一……七

第二章　割據爭闘の世……四二

第三章　蒙古の臣隷……七三

第二編　復興の露西亞

第四章　イワン三世……一一六

第五章　ワシリ、イワン父子……一三五

第六章　莫斯科時代の社會、風俗、文物……一七八

第七章　內憂外患の並起……二〇〇

目次終

露西亞史

坂本健一述

發端

一、

今の邦人に向ひて露西亞は地球の何の方面に位し、四周は某の海、某の山、地域の廣狹いかばかりなるやを說くの要なからむ。西の方北歐に蟠崛して獨逸を壓し、佛蘭西に結び英吉利に抗するものは露西亞なり。歐人の所謂東方に於てバルカン半島を羈縛し、斡都蠻帝國の咽を扼し波斯の背を撞くものは露西亞なり。中央亞細亞を蹂躪して、大陸の脊梁に據り、南印度を脅かし、東西藏を圖るものも露亞亞なり。遙に東の方に於て黑龍江上に嘯屯して近く滿州を占領して老帝國を飜弄し鷄林を騷がしてわが日本近日の警を致しゝもまた實に露西亞なり。昔者嬴秦の西に興るや六國惴々としてみなその俎上の肉たらんを恐れき。晉も楚も動く

ものは皆秦による。今の露西亞は猶夫秦に類せずや。李唐の盛なるときは西の方波斯を羈紲し、蒙古の起るや馬蹄中央に及ぶ。しかも遂に今の露西亞の大に及ばず。羅馬帝國の大なるアルプスを牆とし地中海を池とし、ナポレオンの四方に號令するや列歐の君王首を俛れて仰ぐものなし。されどその地の廣き、その形勢の盛なるまた今の露西亞の比にあらじ。然り而して此強大の露西亞は實に嘗てわが北徼にして今や西隣の地たらんとするに似たり。邦人誰か露西亞を知らずと曰はんや。厮童走卒みな之を知れり。

然れども誰かまよによく露西亞を知るものぞ。英や之と西歐に抗し中亞に爭ひしもの、夙に露西亞を知るを願ふものなり。獨や、佛や、その南隣たり、對敵たり、同盟たりしもの、また露西亞を知るに力むる年あり。地は近く、關係は密に、年は久しきの未だ東方諸國の比にあらざるなり。而もなほ知る可くして知らず、知りて詳なるを得ざるものは露西亞なり。邦人みな露西亞を曰ふもよく露西亞を知るもの幾千ぞ。講者の如きまたその知らざるの一人なり。唯夫遂に知らずして已むを得ざるものはこれ露西亞にあらずや。敢て自寂聞を圖らず、諸君とともに露西

亞帝國の往史を覩はんと欲する所以なり。

二、

八百六十六萬餘方哩、一億三千萬口の土地人民を有し、北は大地の涯を限り、東は亞細亞の極東より西はバルチク海に至るもの、これ今の露西亞帝國にあらずや。禿納の流、黑龍の水ともにその滯渠たり。ニマラヤの脈、カウスの嶺みなその關門のみ。然れども頭を回へして一び歷史の端を顧れば、千年の昔渺たるノヴゴロドの寒邑匿にルリクの旌旗を認め得し日、誰かサルマチアの一角、東西世界を震撼するの名を成さんとは知る可き。

露西亞はわが祖先ヲロシャといへり。之に漢字を宛つるもの十數種。曰く、羅斯、俄羅斯、鄂羅斯、幹魯思、兀魯思、羅刹、羅車、葛勒斯、綳羅答、魯西亞等これなり。わが邦人亦嘗て魯西亞の字面を用ひしが、今改めて露西亞と爲せり。その名の起るところ詳ならず。上古スキタイ人のストンカンヂナギア種を指してルスといひしは戰士の義にして、よりて名くといひ、諸威にてルスは新人の義にて種名、國名の淵源を爲すと云ひ、さては苯人が瑞典人をさしてロスメン、ロスカルラ

ル則海士と稱せしより轉じて露西亞の地名と爲りきといふなる、何れかその是なるを知らず。古傳にはじめてノヴゴロドに基業を開きしルリクの名を傳へて邦國の稱と爲しぬといふが如きは、なほロムルス王の傳說を以て羅馬の發祥に附會するの類にて信ず可きにあらざるが如し。基督敎の聖典にロスの名散見するを以て露西亞の先に當つるが如きは最も牽強ならむ。

千年の歲月といへば短きにあらずと雖も、露西亞が稍國を固め地を拓き始めしは寧ろ晚く十七世紀に起り、その猛威を東西に用るは最近世紀のことに屬すれば、その發展は實に僅に三百年を出でず。一五五二年カザン(加匿)を奪ひてより近く滿州の占領に至るまでを通算するもなほ三世紀半に過ぎざるなり。斯る短日月の間に東歐の鄙國は天下の強と爲り、數部の狄種は一億三千萬の大帝國と化せるなり。さればその地勢の豐庾南北同じからず、山川沼澤の利東西自異なるのみならず、包括する國土の來歷と人種言語風俗また區々たらざるを得ず。近日露西亞を說くの書瀕出して其詳を析くものあれどこゝには暫に一端を擧げんか。其地を以て論ずれば露西亞は世界の大平原國なり。東人の露西亞を說くや秦漢に在り

ては渾庾屠耐、堅昆丁零諸部たり、唐に在りては黠戛斯、骨利幹等の國たりといひ、西人の之を錄する古くはスキタイ諸狄の地下りてノルマン以下諸北人の居として、ともに北塞外夷の地、索風漸漸、平野千里、また南方の美化に浴せず。上古以來未國せざるの地にして實に天下最廣大の大陸國なり、世界第一の大平野なり。或は黃砂千里、朔風獵衣を吹き、或は沼澤一帶瘴煙人を襲ひ、或は高原或は平野各樣を異にすと雖もみな連りて大平野を爲すものの。この東西に亙る大平野にして、ウラル、ヤイラス、カウカスの諸山、エルコシアンスキ、スタノヴイ、ヤブロニ諸嶺あるも、また論ずるに足らず。況んや其多くは國の邊境に偏在するをや。斯の如き地勢は最沼澤河川の水利に富めり。地圖を披く者は即見ん、西に黑海に注ぐドニエストル、ドニエプル、亞連に注ぐドナ、南に裏海に入るヴルガ、ウラルの兩河あり、北にオブ、トム、イルチシ、エニセイ、レナの北洋に走るあり、東に黑龍江のオコック海に朝するあるを。其民を以て見んか、露西亞は世界の雜種國なり。之を大別するもなほアルヤ種あり、カウカス種あり、ウラル・アルタイ種族あり、土耳其種、セム族また少からず。從つて言語風俗習慣を異にし、歷史を異にするをいふを待たざるなり。

天然人事かくの如く廣大なる露西亞帝國は僅に三四百年來にして前古未曾の地に興りて今や乾興の大勢を動かさんとせり。强か、弱か富か貧か。八百六十六萬の版圖、一億三千萬の人口。長蛇封豕實に天下の大國たらずや。人は露西亞の歷史を知らざる可からず。特にわが邦人は最此大帝國の過去を知るを要す。

第一編　古露西亞の興廢

第一章　古露西亞の創業、統一

一、露西亞の古史

『吾曹の過去は空しかりき、貧しかりき、而も狹かりき』とは露西亞人の歷史を回顧せる嘆聲にして、他も亦その古史の世界的に見る可きなきを視て『古來一の傳ふ可きなく、一の尊ぶ可きなし』と喝りぬ。されど空しかりしもの後大に顯はれ、貧しかりしものは富み、狹かりしものはやがて廣かる可きにあらずや。古の傳ふ可きなきを慨ぢんや、いまにして後に傳ふ可くんば訪なり。今の尊ぶ可きなきとも豈後に尊ばる可きなきを保せむ。

露西亞は實にや蒙古の羈に雌伏し、羅馬の文化に浴せず、典籍に光を留むるのみ。露西亞は『西方大國民の家族にも列せず、東方大國民の侶伴にも入らず、時代の外に生死し、人類の敎化に觸れずして幾星霜を經來りし』ものなり。然かも今や自ら北方の大國

民と爲りて天下を敵として南北の彊を競はんとす。吾曹は忍んで此東西世界に關係少き興味なき古露西亞八百年の歷史を讀みて、而る後三百年來の新興の潮勢に乘り東に溢るゝの壯觀に接するを得む。誰か舟を泯江に浮ぶるの快をとりて鵬を浮ぶる底源泉の貧しく狹きを閑却せん。滴々の水集りて大江日夜流れてやまざるを致せばなり。

東西世界を震撼して迅雷の如く、驟風の如く、馬蹄南露の草を蹴かせ舳艫東海の波を掩ひしものは蒙古族の侵略の蹟なり。これにあひて土崩瓦解、國破れて空しく山河を存せしは二百年金黨帳下に羅拜せし古露西亞の民なりき。猛然一擧敢て國を降服するの慨を發ひて被不征國の一に數へられ筑紫の海を出でゝ大陸の沿海を侵略し始めしはわが日本の祖先なりき。然るに時移り星換はり、東海の島國自鎖してのちは紅毛の外西洋諸國を排せし江戸幕府が寛政文化の交に及び北邊の警報を傳へしはて蒙古に屈辱をうけし露西亞の子孫なりき。對馬を占領せんとしたるも、樺太を交換せしめしも、遂東を還附せしめしもみな露西亞の子なりき。斯る露西亞の先を知らんには、空しく貧しく狹き歷史を忍ばざらんや。

洵に東西世界の史圈を逸したる古露西亞の歷史は興味淺からむ。然れども翻りて想ふに、何の興國か古史の富みて豐なるあらむ。古に豐富に今に貧弱なるは弊邦に非れば亡國なり。三百餘年來に天下諸國を驚倒しつゝある今の露西亞のごときその古史の貧しきは素そのところ耳。且空しと雖も、貧しと雖も、傳說なきにあらず、歷史なきにあらず、また東海の一群島に窟を創りて燈燭を爭ひ來りし祖先の子孫は南露一帶の野に跳梁爭奪して東西の大國民に伍せざりし古露西亞の史を嘲るの資格なからむ。われに押照るや灘波の宮の梅香しき時、青丹よし寧樂の櫻の匂ふかき世ありしとを誇らば、かれに光まばゆきウラジミルの御世を歌ひ、華奢繁榮なるキエフの昔語るものなからむや。且見る、古露西亞の史圈は當時の歐羅巴化外の一地局なりしが、今は乾輿の上に跳梁す。古も侵略し、今も侵略し、古も鬪ひ今も戰ふ、古も併呑統一を以て國を建て、今もまた然り。たゞその舞臺に廣狹の別あり、從つて天下の利害と地方の利害との別あるのみ。よく仔細に此間の消息を探らば古露西亞の史豈貧しく狹くして興味なしとせん。

人事もと戚然たる時期の別なし。たゞ便宜によりて期を立て目を設くるは史

家の常なり。いま古露西亞興廢の史を試に三期に分たん。建業及び統一はその第一期にして、建國の始より紀元一〇五四年に至りて、茲二百年に近し。此間史實の中心ははじめノブゴロド(諾弗哥羅)に在りて、のちキエフ(乞瓦)に移れり。その君王の統はルリク(祿利哥)家なり。請ふ古露西亞の歴史を語らむ。

二、ルリク父子と監國オレグ

古に溯りて今の露西亞の地を顧れば、希臘人の所謂スキタイの地、くだりて羅馬にサルマチアの地なり。たゞ夫の希臘人の海に浮び陸に據りて盛に殖民を開きし地を海外に招くや北の方ボスポロス峽を經て黒海に入り、ドン、禿河納畔に勇健なる狄種に會し、汎稱してスキタイといふ。さればスキタイの何の民種なるやは後世の論紛として歸適するところを知らず、其言語の零碎を査して印度歐羅巴種なりきと斷ずるあれば、その身材容貌の特象を捕捉して蒙古種なりきと說くあり。スキタイの種もと猶漢人の東夷北狄といひ、サラセン人のフランクと唱へ、邦人の紅毛といふが、如く、外人に對する汎稱なりとせば斯る疑問は遂に決すべきにあらじ。想ふに或は然らむ。然れども既に北方の雜種と爲すうへそのアデニ、ネウリ

二部の如きはスラブ種たりしといふ說は殆んど疑なきに似たり。

チェルニゴフの附近に一大土饅頭ありて稱してチェルナヤ・モギラ(黒塚)といへり。近きころ之を發掘せしサモクワソフ氏等は證して全然スキタイはスラフなりといふ。その說面にうけ難きも塚墓より發せし器皿に描ける人物の容貌風俗を撿すれば、今の露西亞人に酷似するところありて、少くもスキタイ種と稱せしうちには幾部のスラブ種ありしを首肯するに足る。ヘルツ氏がクル・オバの塚を發きし記事に曰く、『政府の命によりケルチに兵舍建築用の石材を輸せんとて、當時の風にて、土饅頭を發せしに、圖らざりき歴史的記念物を毀んとは。九月十九日、石を掘らんとて工夫は此古墳を發きたれば、その中に入り見にる、天蓋の下、床の上に木棺ありてうちに君王夫婦の遺骸横はる。王は頭に兩纓の冠を着け、頸に黄金襟を懸け、手に金環を貫き、傍に金柵、金の弓袋あり。妃も同樣の冠を着け、頸に金環、金牌を懸く。ともに金をちりばめたる衣を穿ち、金銀の器皿はスキタイ特種のものあり。また從僕と乘馬の遺骸を見たり』と。かのヘロドトスがスキチア諸王の葬儀を記するとと酷似すれば、想ふに此古冢の主は紀元前三、四百年の交、パンチ

カペオンの希臘人を威服せしスキチヤの一君王ならむ歟。羅馬時代に及びては復スキチアの名を說かず、此地方狄種の地をサルマチアと稱し、狄人をサルマチア人といへり。またアラビヤ人はスラブ種は九世紀のころドニエプル河畔に充つといふ。これスラブ種の記事ある當初ならむ。蓋し東北歐の地は古より諸狄輿亡の舞臺にして、或は東、亞細亞より西し、或は北方より南下せしと雖も、塔々兒種の西徙より推想するもカザルの侵入は、キエフ、ガルが以北に及ばず、北人（ノルマン）の南下はゴト王アマラ等の芬蘭ボリステネス間のスラブを席捲せしを除きて西南に出でたるを見る。故にオカ、上ドニエプルよりバルチク海に至る間、今の北、中露西亞の地に在りしスラブ芬種は北人東種の侵畧を免がれ徐に發展してノブゴロド以下の邑落を爲すに至りしが如し。『誰かあへて神とノブゴロドとに敵せんや』との俚諺はその地方に斬然頭角を拔きし此市邑の強盛を推想するに足る。されどその盛衰の記錄に見ゆ。この記錄によれば、ノブゴロドはイルメン湖畔のスラブ種の首邑ルリク兄弟の遷徙ははじめてキエフの僧ネストル（一〇五六年生、一一一四年寂）治亂はルリクの此地に入りてのち始めて傳はるを得るのみ。

にして、ノブゴロドとは新邑の義なり。北人（ノルマン）は別にホルムスガルドルといふ。一說には此市邑オルコフ河のイルメン湖より出づる島（ホルム）上にあるを以て此名ありといひ、他說にはホルムはイルメンと同語の轉訛なりといふなり。またネストルはノブゴロドはワランギ人の市邑なりといへば、當時その地スカンヂナボア種の多かりしを知る可し。ワランギ人はスカンヂナボア種にして、實にかの英吉利、佛蘭西を侵略し、遠く太平洋の烟波に棹さして夙に亞米利加大陸に航し、さては地中海上にサラセン人と角逐したる北人（ノルマン）の一派なりしなり。

八六二年ルリクは二弟シネウス、トルオルと與にノブゴロドに至り、ルリクはやがてオルコフ河のラドガ湖に注ぐところに住し、シネウスはビエロ・ヲゼロ（白湖）に、トルオルはペイプス湖上のイヅボルスクに居をトせしとは古露西亞の傳說なり。或は曰く、當時ノブゴロドは內、外の離局に際會せしを以て、市人ゴストミスルはルリク兄弟をスカンヂナボアより招けりと。然れど招聘に應ずとは古今侵略者の辭柄と爲すところ。ルリクの名は北人の語にフレツクルにてロデリクと同種、シネウスはシニウトル、トルヲルはトルヲルドルにて皆北人（ノルマン）なるの證左歷然たり。

かくて三兄弟はノブゴロドの死活を掌に握りしが、つぎて二弟逝きて後嗣なく、ルリク獨り權を專にして自らエリキ・クニアヅ(太公)と號し、古露西亞の史は此にその端緒を發せり。

ルリクにノブゴロトに從ひしワランギ人中アスコルド、ヂルといふ兄弟ありしが、久しからずして太公と合はず、地を南方にもとめて、ドニエプル河畔のキエフを取り、二年の後輕舸を黑海の波に浮べてコンスタンチノポリスを脅かせしも功なくしてかへり、はじめて基督敎に歸依すといふ。或はいふ、之より先、聖徒アンドレアス、キエフに來りて敎を布き十字架を樹つ、時は八五一年にありといへば、ルリクの遷徙より古きこと十一年。その說の眞僞如何は知らず、八六六年にフォチウスの記するところによれば、此時キエフの君公旣に基督敎を奉じてコンスタンチノポリスより一卑涉一僧侶を聘せりといへり。これ希臘正敎の露西亞に入るの權輿にして、その傳來の古く深きことを知るに足らむ。然るにルリクはノブゴロドに在ること十五年にして八七九年に歿し、歿するに臨み年甫めて四歲なる幼子イゴルを親酋オレグに托す。イゴルは北人の所謂イングヴル、オレグはヘルギなり。オレグ頗る詐略に富み孤托に報ゐ權勢を伸べんと志し、八八二年まづスモレンスクを降し、謀を設けてアスコルド、ヂル兄弟を斬りてキエフを奪ひき。或は曰く、こはノブゴロド、キエフの關係を說かんが爲に設けし一條の傳說に過ぎずと。そはとまれ、オレグはこれよりイゴルを奉じてキエフに移り、幼主の爲にフスコフの女オルガを納れ、輕舸を載せて陸を度り河を下り海に浮び、二千の舳艫相啣んでコンスタンチノポリスを脅かして希臘皇帝を屈し、重償を得てキエフにかへれり。衆其功をたゝへて神人と號す。相傳ふ、オレグのコンスタンチノポリスを辭するや戰捷を表して楯を都門に懸けしと。後世詩人プシキン採りて詩材と爲せり。のち數年オレグは更に使者を希臘帝に遣はして通商修好の約を訂す。條項載せてネストルの記錄に在り、頗る當時の情勢を見るに足るあり。曰く、希臘人、露西亞人相干すときは其事を糺しその人を執へて法を正す可し。曰く、基督敎徒、露西亞人を殺し、露西亞人、基督敎徒を殺さば、その犯處に於て死に處す可し。犯者若し遁亡せばその資財を分ちて死者の遺族と妻とに與ふ可し。曰く、人劍または武器を以て他を毆たば黃金三リトルを償ふ可く、若し償金なくば悉くその有を沒して着衣に及ぶ

可し。曰く、露西亞人と希臘人との間に盜を爲すあれば、盜を追ふて之を殺すも殺人の罪を問はず、若し盜を執へて法廷に到れば贓品を本主に還附したる上、三倍の價額を盜に課す可し。以て古法の半面を徵す可き歟。而して此約に參畫せし有司は悉くワランギ名にしてまた一人のスラブ名なきを見れば、スラブは悉くスカンヂナヴィア種に壓倒されしを知らむ。而して予輩は更に露西亞の南下が遠くその古建國以來の宿志なるを思へば、今にしてコンスタンチノープルのなほ土耳其の手に在るを何とか曰はむ。況んや當時夢にだも入らざりし極東の現狀に照らして、バルカン半島の經略また悠久なるを想はざらんや。

ルリクは創業の太祖なり。オレグは一攝政、一監國に過ぎずと雖も、先主の業を紹げる上より見ては太宗の勳ありともいふ可けれ。エストニア、ヂルコフより白湖に至りし地はルリクの威令に服せしが、オレグの權勢は更にスモレンスクよりスラヴニエストルに至り、なほカルパチア山に及ばんとすればなり。かゝる英資の人、その死また尋常ならずして古記錄は一場の異談を傳へたり。曰く、『オレグ甞て一馬を愛し人をして之を養はしめしに、相者已が此馬の爲に死せんとをいふを

忌み、馬を斥けてまた乘らず、また牽き至る勿らしむ。斯くて數年の後、一日オレグ老臣に馬を問ひ、その既に死せるを聞き、心竊に相者の言空しきを嘲り、騎して馬の死處に至り、遺骸埋めず白骨野に散ぜるを見て、爾なほよく其主に禍するやと放言し、馬頭を蹂躙す。頭骨中一蛇あり、出でゝオレグの脚を噛む。オレグよりて病を獲て遂に起たず。土民英主を失へるを哭し、之をスチゴポトサに葬る。今に至りてなほオレグ冢あり。治世すべて三十又三年。』事素より一閑話に過ぎずと雖もなほ記す可きの理あるは何ぞや。スカンヂナヴィアのオドが馬の爲に死す可しと相せられしが、馬死して沼澤の間に葬られしを見しに、馬頭より蝮蝪出でゝオルヴァル・オドを刺して死に至らしむるの傳說あり。以て露西亞と北歐との關係を推擦するに足る可ければなり。

九一三年詐略權謀に富みて神人とし僊ばれし監國オレグ歿してイゴル親らキエフに君臨するや年已に四旬に近し。オレグの易簀すと聞くや諸部頗る動搖し、加ふるに土耳古種のペチェネグ部の來侵してドニエプル河の東西に四州を蟠きてキエフに逼るあり。幸にしてキエフの備固きを見しペチェネグ部はベサラビア、モ

ルダギア方面に退きて露西亞、希臘帝國の間に障壁と爲りつゝ、キエフは干戈を動かさずして已みき。さればイゴルは故監國の志を繼紹して九一四年南下して希臘帝國を侵かす。記錄の所傳を信ずれば輕舸一萬、每舸四十兵、バフラゴニア、ボントス、ビチニア至るところ火を縱ち人を殺し剽略を逞うせざるなし。而して希臘の皇師來り伐つに及び、ファロス附近の海上に戰ひて大敗し小亞細亞の沿海を剽めてまた陸兵に逐はれ、夜に乘じてキエフに遁れかへるを得しもの三の一に過ぎず。皆舌を捲きて曰く、『希臘人は電火を用う、これ洵に吾軍の敗るゝ所以なり』と。その所謂疾電の如き火は當時秘法たりし火砲をいふなり。されどイゴルは此一敗を以て挫折せず、三年の後ペチェネグ部をかたらひて再擧南征し將に黑納河口に至らんとするや、希臘皇帝ロマヌスの使節至り、オレグに給せしと同額の金帛を約して和を求む。イゴル之を衆に謀るに皆嚮の海戰に懲りて戰はずして利を得るに加かずと爲して約を諾す。これ年は實に死せるオレグの餘光と謂はざるを得ず。而して此約に名を署する露西亞人五十の中、スラブは僅に三人にすぎず、その誓約はまた北人（ノルマン）のスラブを屈服せしを知る可し。九五〇年希臘皇帝コンスタンチヌス・ポルフィロゲニッスの御撰に成れる『帝國行政』（デ・アドミニストランド・イムペリオ）の中にドニエプル地方の名を擧ぐるにスラブ名と露西亞名とを並べ擧げたるは、またその一左券と爲す可し。さればイゴルは一子に名くるにスラブ語聖榮の義を採りてスヴアトスラフといへば、北人（ノルマン）、スラブの俗滿く相包和混淆し來るを伺ふに足る可し。

希臘皇帝の約を得し翌年イゴルはドレヴリ人を征して全軍頓り、イスコロステンに陣歿せしかば、夫人オルガは幼子スヴアトスラフを擁立して政を攝し、アスムルド傅と爲り、スエネルド衆を領して遺業をキエフに守りき。

三、オルガ、スヴアトスラフ母子

監國オレグは詐謀の人なりき。そが擢びてイゴルの配と爲しゝオルガも亦詐略に富みたりけむ。古記の傳ふるところは多く此女の詐略を說けり。イゴルを殺せしドレヴリ人は使を遣はして來りその君マレの爲にオルガを迎へて配と爲し、由てキエフを併はせんとす。オルガ陽諾し、一び欺きて使者を穴にし、二び欺きて使者を浴室中に塞死せしめ、三び欺きて敵を宴中に斬り終にイスコロステンを

圍み場雀の尾に火を附け縦ちて全市を焼き亡ぼし、以て亡夫イゴルの爲に怨を雪ぎたりといふ。蓋しラヤモンの詩にグルムンドがキレンケステルを取りしもまた此と同じく謀を用ひしといひ、バイムスクリングラにハロルド・ハルドラダがシチリア島にて行ひし謀亦これと同じといへば、斯る古傳説は諸國に存せしものならむ。されどオルガの傳ふ可きは斯る機智詐術にあらず。此時基督の教漸くキエフに行はるゝを見て、オルガ亦之に歸依せんと欲し、九五七年親らコンスタンチノポリスに之き皇帝コンスタンチヌス・ポリフィロゲニッスに謁し洗禮を受け名をヘレナと賜はりてかへり、死に先ちて古來の習俗たるトリッナ(葬宴)を禁じたり。露西亞の古史乃賞揚して曰く、『啓明の太陽の先驅たる若く、曉天の星の先驅たる若く、オルガは露西亞基督教の首唱たり。その異教の民族中に光輝を放つことさながら中夜の明月の如く、また砂中の明珠に似たり。女主は洗禮を受け、古アダムの罪の衣を脱せり』と。露亞西の帝王と希臘正教との關契古きこと此の如し。さばれ此時國人の基督の教に歸する者尚少く、その子スヰアトスラフすら改宗を肯んぜざりき。

スヰアトスラフは英雄の資あり。少にして宮殿を見ると牢獄の如く、軍陣を家とし、疎衣厲食を意とせず、馬匹を屠りて食ひ、鞍を枕にして露宿し、よく將士を帥ゐて四方に轉戰せり。されば九六四年ドン河畔のサルケルを陷れてより漸次亞速海東のコザル種を降だしまた希臘帝ニケフォルス・フォカスの請を容れて兵を悉納河邊に出だしブルガリア人を擊破して古メシアの地に號令し、都をキエフより南の方ペレイアスラエッに移さんとす。ヘてキエフの侵略を企てゝ中道にやみしペチェネヰ部はスヰアトスラフが遠く外に在るを機として急にキエフを襲ひ、キエフ殆んど陷らんとし僅に免がれ、スヰアトスラフまた變を聞きて急にかへり救ひて和を結び九七〇年再び南征してブルガリア人を伐つ。ときにジミコス希臘帝を弑して大寶を簒ひ深く前皇の失計を悔ひて露西亞を否み兵を出だして之を破る。テストルの記錄には露西亞未だ嘗て敗れずと説くも、利を失はざるスヰアトスラフが何ぞ士を失ふて歸らむ、如何ぞ容易く百戰流血の地を拋たむ。その嬌めたるや知るに難からず。またスヰアトスラフの兵僅に一萬に過ぎずと爲すはネストルにて、三十萬の多きに上りしと爲す

は希臘史家なり。想ふに露西亞の衆は甚多からざりしも、途上侵畧を志す蠻族狄種のゆく〳〵相從ひし者多かりしなる可く、希臘史家はまた大敵を破りしを誇らん爲に誇張の言を爲しゝに似たり。閑話休題スボアトスラフ志を得ずして歸るとブルガリア人より聞きしペチェネギ部は時機乘ず可しと爲し、途上ボリステネス河畔に要塞して之を斬り、その髑髏に金彩を施して酒杯と爲しきといふ。將軍スエネルド乃敗卒を收めてキエフに歸れり。スボアストラフにして死せずんばキエフは終に都城たらず、露西亞人或はコンスタンチノポリスの主たりしや知る可からず、古露西亞興らずしてルリクの後征戰の間にながく本據を失ひしや亦知る可からず。圖南の策を以てすればその死や惜しむ可きが如きも、國礎の確立を以て論ずればその中道に斃れしは寧ろ露西亞の幸なる哉。

四、ウラヂミル大公

スボアトスラフはキエフを棄てゝブルガリアに國せんとす、否更に進んではビザンチオンに據らんと欲す。さればその南征の途に就くや、長子ヤロポルクをキエフに、次子オレグをドレヴリ部に、庶子ウラヂミルをノブゴロドに留守せしむ。

これ實に後來古露西亞の衰因と爲りし封侯樹立の端緒を解きしものなれども、まなウラヂミルが盛代の發程なりき。ウラヂミルはオルガ夫人の侍女ムルシヤの出異母兄ヤロポルクがスエネルドの勸により、オレグと戰ひて之を斬り其地を併呑せしを見て、自安んぜず、一ぴ海を超えて難を祖先の地に避けしが、幾ならずして兵を起してかへり、まづボロックを攻めて其主ログヲロドを殺ろしヤロポルクの許婚たるその女ログネダを奪ひ、すゝみてキエフを攻む。キエフは天險にして兵よく服せしも、ヤロポルクは佞臣ブルデに欺かれ城を棄てゝ奔り、またかへりてウラヂミルに降る。ウラヂミル乃之を斬り、またその夫人を納れ、ブルデを誅して罪を赦し終に露西亞の主と爲る。ヤロポルクはキエフに主たること四年、露西亞に君臨すること三年にして亡びぬ。これ露西亞內鬨の第一たり。

ウラヂミルは勇武攻伐を事とし、嘗てオレグが征服しのちヤロポルクの時また波蘭に陷りしガリキア(赤露西亞)を恢復し、波蘭、リトワニアの間に居るヤトヴイアグ部及びバルチク海邊に居る數種の地リヂニアを取り、東ブルガリアを屈しケルソンを攻む。四隣爲に動搖しみな各其奉ずる宗教に歸依せしめて暴威をなだめん

と欲し、東ブルガリアはイスラム教を勧めしが、その天堂快樂の說はウラヂミルの心を動かせしも禁酒を以て納れられず。ゲルマニ諸人のすゝめし加特力教は地上の神と崇むる法王あるを悪みて又採られず。猶太教はその民流氓して國土なきを賤しまれしがひとり希臘基督教はオルガ以來の關係あるによりてウラヂミルの意を引けり。蓋し古スラブの何如の神を拜せしやは詳ならずたゞチストルの記錄、さてはバルチク沿海のスラブが事を記せる中世の史家によりて多少の推測を爲し得るに過ぎず。その神像は粗笨なる木偶にて儀典寒朴、たゞ雷神ペルンや等のやゝ崇められゝある耳。ウラヂミル乃使節を諸方に派遣して附近の諸教國を視察せしめ、希臘教の最莊嚴なるを知りしかば、ケルソンを征して勢威を示めし、希臘の公主アンナを娶り、基督教の洗禮を享けてキエフにかへり、丘上のペルンの像を碎し馬尾に繋ぎて路上を牽かしめボリステネス河に投じ、國中に令して基督教に歸依せしむ。北方の一狄國、その民深く宗教を重んぜず、皆唯々として君王の命にこれ從ふのみ、また禁令に觸れて刑に當りし者を聞かず。後世カール大帝の一朝サクセンの民に令して宗教を改めしめ、ヤグロ王の日を期してリトワニアを

畀げて基督教に歸せしめしを想はゞウラヂミルの此改宗令は難くもあらぬかも。たゞ夫舊慣古習は一朝にして根底を動き難し。十二世紀に及びても露西亞の民はなほ古代の神祇を奉信し、魔法卜占觀相の徒を待つと基督教の僧に過ぎたり。さもあらばあれ斯の如きは古今東西の實際なれば、以てウラヂミルの改宗成らずといふの價なし。而してウラヂミルの改宗令のよく幾何か國民の信仰を動かしゝは暫く措くも、なほ之によりて得し他の利あり。稍もすれば殘暴なりし露西亞の君王の施政これより一變し、二人の殉道者が殺されし地に就きてネキアチン寺を建て南方の彫刻家を徵して希臘式彫刻を施し、また學校を開きてスラブ語に譯せし聖書を兒童に授けしめ、愚民は書字を以て魔術の恐る可きものと爲して涙を垂れし當時に在りて教育の端緒を開き、寺院に田園を寄進し、貧困を恤救す、また殖民を立てゝ荒地を拓き、市邑を置き、當時のキエフは大小四百寺、八大市場を有し、第二のコンスタンチノポリスと稱せられ、太公は使徒を以て目せるらゝに至る。見る可し、北狄の彊強變じて一明君と爲りしを。これ豈露西亞に寄するウラヂミルの改宗の善果にあらずや。若し更に大局より論ずれば、更に大利害の此改宗に繫る

あり。ウラヂミル一ひ希臘正教を奉じてのち、君王起り君王仆れて幾星霜、北方の強國はながく此教を樂てずしてイスラム教徒と對抗し、宗教上にはながく東歐西亞に於ける基、麻兩教の消長を爲し、政治上には露西亞南下の託言と爲りて、歐人豈所謂東方問題を惹起したりき。希臘帝國亡びて後、露西亞が其後を以て居るもの、此宗教の關係を根底とせざらむ。されば過ぎし年ウラヂミル改宗の九百年祭行はるゝや、全露西亞は朴舞祝意を表し、中にもキエフの聖ソフィア寺に盛大の儀式を擧げ、太公埋骨の伽藍は大修繕を加へられき。

ウラヂミルの世、ペチェヂキ復スラ河を渡りて來り犯す。此時兩敵兵を損ぜんとを憂ひ、勇士を撰びて決鬪しその勝敗を以て事を決せしに、露西亞の一少年力よく牛を割くあり、鬪ひて敵の撰手を殪ししかば、ペチェヂキ兵を撤して退けり。今のペレイアスラヴル(勝利城)は其地なりとはチストルの記錄に殘りて世に傳ふる話說なり。されど三年の後ペチェヂキ部また來り、ウラヂミルがスツグナに築きしワシレフを圍みしにぞ、ウラヂミル之を救ひて軍敗れ、身傷き、橋下に匿れて僅に免かれ、翌(九九七)年ノヴゴロドにゆきて兵を募りしかば、ペチェヂキ部は其虛に乘じてまたビエルゴロドを圍みしが、城中奇策を爲す者ありて緩に圍を解きたり。蓋し上世の歌謠ウラヂミルの事蹟を傳ふる多く奇蹟を說き、太公を稱揚してキエフの『麗日』と爲せるは、適以てウラヂミルが勳績の深く國民に欣慕されしを證す可し。

然りと雖もキエフの『麗日』よく幾時か光を放つ可き『光輝あるウラヂミルの御宇』日西天に傾きて恠雲多し。ウラヂミルは晩年子ノブゴロド侯ヤロスラフが命を奉ぜざるを討ちて、骨肉刃を開むの憂に耐えず、一〇一五年征途に逝く。在位四十五年。假令連枝を切りて正嫡を奪ひし應報を說かずとも、亦憐む可き末路と謂ふ可し。

五、ヤロスラフ

古來支那の學者は封建、郡縣の利弊を論ぜしもの多かりしが、封建の制、郡縣の治何れか當時の必勢ならざる可き。ウラヂミル太公の殂するに當り露西亞の版圖頗る大なりしかば諸將を邊陲に封し、諸子を列侯と爲す。攻伐爭奪を以て四方の盤狄と相拒ぐ當時に在りては地方の重鎭なきを得ず、市邑に據りて奉貢を得る上世は宗室皆領邑なき能はざれはなり。ウラヂミルの殂するに當り、其十子の中ヤロ

スラフはノヴゴロドに封ぜられ、コクネダの出イシアスラフはポロツクに、ボリスはロストフに、グレブはムロムに、スポアトスラフはドレブリアに、ヴセヲロドはヲリーニアのウラヂミルに、ムスチスラフはトムートラカン則希臘人の所謂タマタルキアに封ぜられ、ウラヂミルの異母兄ヤロポルクの遺子スポアトポルクはツーロフに君たり。さればウラヂミル殂後の情勢は恰もクロポス殂後のフランク國に比す可く、碟血伏屍の禍終に免れ難し。中に就きてボリスは最故太公に鍾愛せられてしが、太公の殂するとき兵五萬に將としてペチエネギ征討の陣中にありしかば、勢に乘じて歸り爭はゞ諸兄弟を排して位を得る難からざりしならんに、讒譖兼言を退けて衆心を失ひ、スヰアトポルクの爲に殺され、グレブ、スポアトスラフも亦相尋で殺され、キエフはスポアトポルクの手に落ちたり。これ豈フランクのクロドミルが諸子の末路に似たらずや。然るにノブゴロドのヤロスラフは諸弟の死を聞きて自安んぜず、報復の師を興して、一たびスポアトポルクを逐ひしも、スポアトポルク走りて勇波蘭王ボレズラスの兵を導きて露西亞に入るに及び、ヤロスラフはボグに大敗し海を渡りて遁れんとす。ノブゴロドの衆舟楫を徹して之を誅め裔つて軍に加はり再擧して遂にスポアトポルクを斬り、ヤロスラフを立てゝキエフに君臨せしむ。然れとも、なほトムートラカンのムスチスラフはカザルを破りチュルケスの主レーデヂアを斬り勇名を博し一〇二六年ヤロスラフの位を爭ひしが中道にして薨じ、ヤロスラフは遂に露西亞の君王と爲れり。

ヤロスラフは既に志を得て後、波蘭を征して怨を報じ、ペチエネギ部をキエフ城下に破り、狄、リトワニアの諸部と戰ひ、ペイプス(ドルパト)附近のエムバハにユリエフを搬め、土ヲルガにヤロスラフルを建置せしが、此等の諸役は多く諸將に任じて自ら起たず。その晩年に及び通商の爭議より希臘帝國と爭ひ、子ウラヂミル軍に將として ボスフォルスに戰ひ敗れ、八千の殘軍歸途に要撃せられ、捕囚と爲りてコンスタンチノポリスに送られ眼を扶られしもの八百、南征の志水泡に歸せり。しかも希臘帝國は此北狄の勇武を畏れ、後來帝國の大患は露西亞に在り、コンスタンチノポリスを陷るゝ者はこれなりと爲しゝが、安ぞ知らむ、キエフ衰へて禍は東土耳古の手に出でんとは。また誰か知らむ、コンスタンチノポリスに據りし土耳古のの

ち露西亞に窘迫されんとは。

斯くヤロスラフは外征に赫々の蹟なかりしも、なほキェフ太公として露西亞の史上に特筆さる可き功勳はその内治に在り。基督教の經典をスラブ語に譯し、學校を起し、希臘の僧侶を招聘し異端を寛容し、領内の寺院に自由を許可し、コンスタンチノポリスの本山動搖するを見て、露西亞単渉を任じ、本山撰舉會議を起さんと決したるはヤロスラフなり。ウラヂミル、ヤロスラフ相つぎて宗教を納れ智學を入れしが、こゝに於てまた婚を當時の歐羅巴諸強に通じ、援きて以て國威を重くす。見よ、ヤロスラフの妹は波蘭王カシミルの妃にして、其三女は諸威王ハロルド、佛蘭西王アンリ一世、匈牙利王アンドレ一世の妃、長子ウラヂミルは英吉利王ハロルドの女ギターを娶り、イシアユスラは波蘭王ミスチスラス二世の公主を、ヴセスラフは希臘帝コンスタンチヌス・モノマルクスの皇女を娶り、ボアチェスラフ、イゴルはともに獨逸諸侯の女を納れて夫人と爲せり。ヤロスラフはまた諸威の廢王聖オラフ父子、クニュト大王に國を逐はれし英吉利のエドモンドの二王子エドキン、エドワルドを納れて厚遇せり。通婚交誼の繁きよりいはゞ當時の露西亞は數百年後の露西亞よりも更に多く歐羅巴の一列國たるに慚ぢずといはん歟。

ウラヂミル太公既に基督教を布きしを以て露西亞史上に不朽の名を存す。ヤロスラフ豈之に比す可きの業なからむや。あり。法典の編纂これなり。抑も露西亞の未だ國を爲さゞる、各地の習慣、各部の古例なきにあらざりけむ。イゴル、オレグの希臘皇帝と約する當世法制の實存を證するに足るあるは上既に述べしが如し。たゞ當時の諸酋將軍馬上天下に馳驅し、唯武これ用ふ。舊慣破れて新令行はるゝに暇なき惟しむに足らず。然るに一〇一八年ヤロスラフは新法典ルスカイア・プラヴダ(露西亞法)を布く。その年處恰もノブゴロドに特許を與へし年紀と吻合するを以て、ノブゴロドの衆がはじめヤロスラフの誅殺を憤りながら此時死を決して之を助けキェフに擁立せしは此特許法典を布くの約を得しに由ると爲す者あり。その間の消息果して眞なりや否は敢て深く問ふの要なし。はじめて露西亞人の爲に法典を興へしはヤロスラフたるを知れば、以て其文蹟を稱するに足らむ。此法典は後しばゝ刊行されしが、其内容を檢すれば、未だ蒙古の風尚感化を蒙らざりし純古露西亞の社會情象を知るに足る。今少しく之を記さむ。此

法によれば私人の讎を復するを得ざる時のみ公に犯人を罰し得可く、則強者は自衛し、弱者は國法之を保護す。而も被害者の血族にあらざれば怨を報ず可からず。また報復者なき時は國家、犯者に罰償（ヰラ）を課す。其額被害者の地位によりて差等あり。ボエル、若しくはチウンを殺す者は八十グリヴナス、平民を殺す者は四十グリヴナス、女を殺すものは男を殺す者の半額、奴隷を殺す者はその價格を主人に償ふのみ。拳を奮ひ、刀劍の鞘欄を以て人を毆つ者、齒を折き鬚を引く者は十二グリヴナス、棒を以て人を打つ者は三グリヴナスを償ふ可し。當時露西亞は未貨泉なく、皮革を以て幣と爲し、名けてユニといふ。一グリヴナスはユニの一括重さ銀半磅に相當するをいふとぞ。若し地方、犯人其妻子を捕ふる能はざれば、自公安を保するの責あり。また警官の法ありて、正否眞僞を探湯鐵火に訟ふ。社會の階級は貴族、平民、奴隷の三階に別れ、地主は小作人より毎週若しくば毎日の最大收入を規定するの條項あれども、租稅に關しては一定の法ありしを知らず。君王はたゞ貢賦、若しくば罰償に衣食せしが如く、主權は軍役の義務を課するに於て證し得しに過ぎざりけむ。司直の法は巡回裁判の十二判官ありしと、猶スカンヂナギア、若

ば、嚢馬の上世に似たれども法典中刑罪の條項を見ず、牢獄すらありやなしや明ならず。或はこの中、イシアスラフ所定の法ありと爲せども、要するに以上はヤロスラフがルスカイア・プラヴダの大概なり。

外は歐羅巴諸國の帝王侯伯と通婚し、内は法を立て智學を勵まし、文治隆々たりしヤロスラフの世はまさに『露西亞都邑の母』たるキエフの最盛時なりき。想ふに西南諸國の文化に羨望せしヤロスラフは都城キエフを以てコンスタンチノポリスに匹敵せしめんとやしけむ。伽藍あり、黄金門あり。今なほ遺址を存する聖ィレネ寺、聖イウリの寺、聖徒テオドシウス、アントニウスが殉道の名を留めし墓域皆ヤロスラフの起しゝところ、デキアチヲの寺はその修覆を加へしところ。ドニエプルの流に枕むキエフの城門、大道直ちに遠くビザンチウムを指し、荷蘭、何牙利、日耳曼、スカンヂナギア諸國の商賈城中に群居し、四方の貨舶河中に滿つ。中にもキエフの誇と爲すは聖ソフィアの伽藍にして、ヤロスラフ當時の嵌工なほ存し、聖母の大像畫最後の聖餐、基督が再現して六弟子に肉を與へ、血を與ふる圖、聖徒、學者、天使の像、不壞の壁、旅客をして轉た感嘆の聲を發せしめ、保存し修覆したる幾多の壁畫

鋪金の柱楹、圓天井、希臘風の巧緻なる彫刻漫ろに行人の足を留む。ヤロスラフは、また發祥の地を忘れずしてノブゴロドにも聖ソフィア寺を建て、はじめて泉貨を鑄て一面にスラブ語にて己の名を彫し、一面に基督名イウリ(ゼオルジ)を印し、コンスタンチノポリスより伶人を招きて露西亞の僧に聖頌の歌を學ばしめ、死せる諸叔の遺骨に洗禮を享けしむ。

されど一〇五四年ヤロスラフ殂して、石棺徒に長く聖ソフィアの寺寶と爲り、カール大帝殂して盛運忽去りし國都アンヘンの運命は、こゝにドニエプルの流に臨むキエフの上に見るに至りき。あはれヤロスラフの生前、殷盛を誇りしキエフは、ヤロスラフの殂後弔訪の地となれるなり。回顧すればルリクの建業以來年は二百年に近く、五代主を代へてヤロスラフの烈落に至れり。建業の勳、統一の功、古露西亞の盛はこゝに至りて達す。希臘にヘロドトスあるが如く、スラブ種に此人あるチストルの記錄こゝに及びて、上世の傳奇を諷詠に托して、ヴラヂミルが宮廷の榮華、征伐の盛を歌ひしビリニ(古曲)も亦此に一局を結びぬ。盛極まり衰來る、古露西亞はこれより分崩潰裂の史に入らんとす。請ふ少しく統一盛時の社會相を傳へむ。

六、古露西亞の社會、基督教流布の影響

古露西亞の社會組織の幹根は君主とそのヴルージナ(家隷)より成る。ヴルージナは實に君主の親衛と爲り、公私の顧問と爲り忠誠を以て奉仕し、君王はヴルージナを以て司直の判官とし、諸城の守將(ヂイエジデ)に拜し、大都の留守(ポサドニク)に任ず。その狀なほガリアを取りしフランク君臣の關係にも似たり。メロヴィンジャン王家の直隷は必ずしも皆フランク人にあらず。露西亞のヴルージナも亦悉くスラブ種にあらずして、スラブも亦用ひられ、兵農の別また未だ全くわかれず、ヴラヂミル太公は革匠の子を用ひ、奴隷の姪を娶れり。且君臣の關係の密なる君王も亦ヴルージナの首領たるに過ぎず、卓を同うして食ひ席を共にして醫者の歌謠を聞き、物を分ちて用ひ厚遇を以て忠誠の志に酬う。傳へいふ、嘗てウラヂミルのヴルージナ木椀を用ふるを悲み訴へしに、ウラヂミル之に銀椀を與へて曰く、『ヴルージナ一人は金銀を以て買ひ難し、一人のヴルージナあれば金銀は得るに難からず』と。されば君王の事を理する必ずヴルージナに諮らざる莫し。かのスキアトスラフは母オルガの改宗を勸むるを肯ぜずして曰へり、『見改宗せばヴルージナの嘲

笑を奈何せん』と。 洵に露西亞の國家的組織の基礎はこの君臣の關係より來りしに似たり。

また當時露西亞の施政極めて簡朴なりしは亞剌比亞のイブン・ドストの記するところに徴して知り得可し。曰く『露西亞の民爭ふあれば、兩造ともに司直の官に至り訟へ、その裁決を得。もし兩造、司直の處決に甘んぜざれば、劍を取つて戰ひ、重傷を蒙りし者敗訴と爲る。兩造決鬪の時はその血族武裝して來り圍み視、勝者をして其欲するところに任せしむ』と。租法も亦定則なく、主として貢賦により、徴品亦君主の意による。ネストルがイゴルの殁を記するところ、最善く當時の政治的慣習を描きて眼前目睹の感あり。曰く。『九四五年イゴルのヴルージナ、イゴルに謂ふやう、スヴェルドの家隷は武器備はり衣服足り、わが輩は赤裸々たり、公、請ふ、貢賦を集められよ、公もわが輩もともに富みなん。イゴル之を聽き、衆を率ゐてドレヴリ部に至りて貢賦を徴し、刼掠を逞うし、所要の貨財を奪ひてかへりしが、途上また想ふところあり、ヴルージナに向ひて、汝等は此貢賦を以てかへれ、われは再び歸りてなほ多くを徴發し來らんと。乃少衆を從へてまた至りしに、ドレヴリの衆之を知り其酋マルに告けて曰く、狼羊群に入るとき牧者狼を殺さざれば狼悉く羊群を屠らむ。今わが輩とイゴルとは斯の如し。イゴルを殺さずんばわが輩悉く失はれなむと。使を遣はしてイゴルに問ふ、汝何の爲に復至るや、既に悉く貢賦を徴して去りしにあらずやと。イゴルきかず。ドレヴリ部其衆少きを見、コロステン城を出で襲ひてイゴルを殺したり。』

また遺墟の重鎭には城邑にヴルージナを配して防守せしむるは、かのルリクがヴルージナにボロツク、ロストフ、ビエロチェルスクを與へ守らしめしが如し。また所領采邑を分つ君主あれども、采邑はたゞ一時のものにすぎず、遺墟には新城を置き兵を配して之を守らしむ。

かくて九世紀乃至十二世紀の露西亞にては君主のヴルージナは一種の貴族となりその中にグリヂ(衞士)、ムージェ(臣隷)、ボヤルドの別あり。自由の民はリヅジといひ、商賈はゴスチといふ。農民はスメルデ若しくはムジクといひ、農民の下にはラビ若しくはコーロピといふ奴隷あり。奴隷は戰爭の捕囚よりなり、また市場に賣らる。イブン・ドストも露西亞の俘掠するところ悪く男子を斬り、悪く婦幼を奴婢と

すといひ、スキアトスラフも、露西亞より革皮、蠟、蜜、奴隷を齎らす可し』といへるにて奴隷の多かりしを知る可し。

基督教の古露西亞に入りしは史上の重事たるとは畧ウラジミルが改宗の條下に言說せしが、なほ少しくその社會、政治、文學、技術の上に及ぼし、影響を論ぜむ。羅馬帝國の衰へて蠻狄並び起るや、波蘭、日耳曼諸部の基督教に皈依して思潮の變化、文明の涵養を受けし者數ふるに遑あらずと雖も、そは皆羅馬教にして希臘正教を傳へしものは、獨露西亞あるのみ。羅甸希臘の兩教派均しくこれ基督教なりと雖も、また獨り宗儀教旨の上に差異あるのみならず、外政治文物との關係相違せり。露西亞の史家ベスツーエフ・リウミネ說を爲して曰く、『わが國の基督教ビザンチウムより傳來せしは誠に等閑視すべき事にあらず。希臘教會は國家統治の托請なきを以てその教を傳へしわが國は政教兩界ともに外國との葛藤を生せず。羅馬教會が獨逸の宣教師を用ひて教をスラブの國に宣傳せしが、假令物質上其地を奴視せざるもなほ其民をして外國の利害を保持する爲に外國の風に向はしめ、羅甸語を語り書き得る高等社會と其國語を用ひて文學見る可きなき下等社會との間を懸隔して少くとも智力上其民を奴視せり。故にわれ等は宗教上羅馬日耳曼派に屈せざりしの寧ろ利多くして失少きを想はずんばあらず』と。露西亞にて宗教上の用語がその國語に混じ上下社會を通じて行はれ、毫も外國の支配を受けざる純粹なる自國の教會を有し、國家が全く獨立の發展を爲し得たるは、實にその基督教の羅馬の流を汲まずしてビザンチウムの派を受けしに因れり。

然れども一利の存するところは一害の伏するところなり。露西亞は毫も羅馬の關係を有せざればその制肘を受けずと雖も、また其後援を望み得ざりき。西班牙のムーア人と抗爭せし時、日耳曼の十字軍を起してスラフ、某種を討ちし際、匈牙利が土耳其を防ぎし日に得しが如き後援を危急の秋に臨める露西亞は得る能はざりき。猶希臘が信教を異にせる西歐諸國の援なくして土耳古侵略の前に屈せしが如く、露西亞も亦西方の後援なくして蒙古の爲に蹂躙し去られき。フランスのロベールは法王の禁制を受け獨逸のハインリヒ四世は法王の足下に哀訴せしが露西亞の君王は斯る屈辱なかりき。されど西歐の諸王は報復の日ありて、バルバロッサは法王アレッサンドロ三世を放ち、フィリプ麗王は法王ボニファチオを拘禁せしが、

露西亞が蒙古奇ト察克の帳下に屈せし辱は長く且苛なりき。露西亞が祖先を同うし國語を同うせる北歐諸國と睽離し、ながく波蘭と爭ひスラブを統一し難かりしは、また希臘正教を奉じて信條を異にせし結果なり。宗教を異にせし露西亞は文藝復興より起りし文明の恩惠を享くること遲かりしも、かの恐る可き宗教改革の大擾亂を見るに及ばざりき。

以上は露西亞が羅甸正教を奉じたる利害の一斑なり。

次に希臘正教の北流が此國の社會に及ぼし影響を見るに多妻を非認して、嫡庶子の分限に差等を立て、博愛同情を教へて人心を安け、君王も終に寺院の和平を愛するに至りき。之を政治上より見れは露西亞の君王は素羈中の客、ヅルージナ一除の巨酋にして土着の君王に非ざるを以て、君民の關係疎に統治の根蒂堅からず。然るにコンスタンチノポリスの僧來るに及び、その帝政の理想を齎し來れり。希臘帝政の理想とは何ぞや。コンスタンチノポリスの皇帝はアウグスツスの正嫡、コンスタンチヌス大帝の後嗣、地上に於ける天神の代理、至上全權を有し、帝獨法を立て、法は則帝、帝は市邑に列封せるヅルージナの主盟にあらず、兵衆の元帥にして

その國を統ぶる民心に出て、天命に山り、その身至尊の位に備はるのみならず、その冕冠紫衣と雖も神聖犯す可からざるもの、これ東羅馬皇帝の尊なり。斯の如き想はスラブ、ヴランヤ部の諸酋が夢にだも入らざるところなりしに、今や基督教の北流とともに、縉徒この帝治の理想を傳へたり。舊慣古俗乘り難く、露西亞の君主はなほ長く地と兵衆とを諸子に分ちしが、この傳來の想は低びず、キエフの諸主はまた理想を實現するに暇なかりしも、モスクワ都と爲りて漸く理想は實現されき。法度の上にも亦基督教の影響を認む可し。盜賊殺人は私犯にあらず神の名によりて人間の正義に訴へて罰せらる可き罪科なりとして、贖罰に代ふるに禁獄、笞杖、拷問、死罪を用う可きは希臘帝國の法なり。されど露西亞のかたはら贖は府庫の收入に屬すれば、新法を參してなほ舊法を棄てず、ユスチニアヌス、バシリウスの法典はヤロスラフの法規と並び行はれて、後のイワン大王のウロジェニエ、イワン恐王のスデブニク新法の世に及びき。

基督教の露西亞に入るやビザンチウムの文學亦繼流の手を經て此北方不文の地に入りき。聖經妙典は暫く措く。聖バシリウス、聖ヨハンクリソストム等の靈

筆を呵するありて、聖徒の異蹟、新詩の淵源、記錄、哲學、科學の諸書、さては『バルラアムとヨサファト』『サロモンとキトヴラス』等の傳奇をさへ傳へき。その新國民の心性を涵養し公私の德性に影響せしや知る可し。また音樂を傳へ、建築を傳へ、露西亞文化の因と爲り源を開きしものは、何れもこの希臘基督敎宣傳の賚ならざるはなし。

以上は基督敎の宣傳が露西亞に及ぼせる感化影響の一班なり。吾人は更に章を改めて、一統せる露西亞が紛糾せられ亂離の世と化するを敘せむ。

第二章　割據爭鬪の世

一、分封と割據

習俗未蠻狄を脫せず、國家統御の治方未固からず、四境の民なほ文化に浴せず、統一の業僅になりしも希臘の宗敎人心を融和するはキエフ城中に止まり、希臘の開化野俗を改むるところはなほ君主の都門を出でず。諸子に權を分ち、諸將に甘心せしめ、邊境を守り要鎭を扼せんには、勢列封を免れずと雖も、英主一び去りて後崩

裂の禍は實にこの列封に胚胎せずんばあらず。封侯割據して統一の業地に墜ち爭鬪擾攘、外敵の乘ずるところと爲るに至りて、古露西亞の漸く緖を解き得し文明の光はまた失せぬ。一〇五四年キエフの太公ヤロスラフ殂して後、ビザンチウム傳來の統一政治の思想は地を狹種爭奪の欲に讓り、濛古西侵の日に至るまで百八十餘年の間、無慮六十四國の興亡を見、キエフ以下の主權を爭ふ侯伯君主二百九十三、戰鬪の數八十三回、外狄の侵畧四十六回に上れりといふ。紛々の狀、擾々の態、以て推想するに難からず。然れどもその一起一倒の細を描寫するは露西亞史上の要事にあらず。所謂鬪中の盲鬪、鳥烏の喧噪と見て可なり。故にこゝにはその若干の勢成ありて盲鬪の主體、君侯の小覇たりしもの若干を畧敘して、爭亂の趨向、歸趣を知るにとゞめむ。

キエフの太公ヤロスラフ逝くやその長子イジアスラフ位を嗣ぎしが、スラフの德慣は長子相續にあらずして長者繼承なれば、宗室之に服せず。弟スヰアトスラフ兵を舉げてキエフを襲ひ、一〇七三年イジアスラフは奔りて日耳曼のハインリヒ四世に投じ、ハインリヒは爲に使を遣はしてスヰアトスラフに諭せしも功なく、

三年を經てスヰアトスラフは僅に國に歸るを得たり。キエフの形勢斯の如くなれば市邑の分封を受けし宗室諸公子、兵を邊要に擁する諸將如何ぞキエフ太公の下に服せむ。あの〳〵割據自立の謀を爲し、また兄弟子孫を分封樹立して爭端年とともに紛糾せり。たゞそれ古露西亞一統の後と異なるところは前にはスラフの諸部對抗し、後には君公爭奪し、前には種部あり、後には侯國を見る。ポロチャ部の名はポロックに殘り、セヱリ部の目はノブゴロド・セヱルスキに遺り、さてはクリヰチ、ドレヴリ諸部の名亡びてスモレンスク、ヅリーニア諸公を見るに至れり。然れども所謂前後六十餘國の中、根底稍堅く宗祚稍長きものを摘舉せば下の數者あるの耳。

基布星羅せる大小諸國の中ドニエプルの流に枕み、南ステップの蠻民を控制せるキエフが形勝に據り遺業を守りて優に覇柄を握りしは言ふを待たず。全露西亞中の眞の緒西亞は此地なり。ペレヤスラヴル國はキエフに屬隷し、ポケヅロド、ビエルゴロド、トリポリ、トルケスク等また多くはキエフ宗室の君公を奉戴してその藩屏たりしが一二〇〇年以後キエフ始めて衰へたり。ドニエプル河はヅルガ、ドヰナの二大河と共に源を古の所謂オコフの森林に發す。スモレンスク(斯摩稜斯科)の地は實に此森林の地にして市邑多くこの諸流に沿ひ、舟楫の利を占めて通商の要區、天下の樞府たれば、商業殷富にして古來四爭の地たり。其ミスチスラフ・クーラブリイ(武公)、ミスチスラフ・ウダロイ(勇公)等を出だして地方の諸市にトロベツ、ポアスマ、モヤイスクあり。若しまた夫れドニエプルの流を左にして其枝流ソヤ、デスナ、セイメの諸水の地にはチェルニゴフ(者爾尼痕弗)ノブゴロド・セヱルスキの二强國あり。チェルニゴフはスタロツブ、ルーベチュ等を威服して上オカに至ればヅルガの河谷を侵し、その主ヨルゴヰチュ家は雄をキエフに爭ふ。セヱルスキに至りては常に南隣ポロブチ部と相攻防して世にイゴル征伐譚(スラヲ・オ・ポルク・イゴレヰ)を殘せり。チェルニゴフの領土はオカの上流に及びしが、オカの河流に沿ふてはリアザン(海阿堅)ムーロム、ペレイアスラヴル・リアザンスキあり、オカのモスカワ河に會するところにコロムナあり、プロナ河にプロンスクありてリアザン、ムーロム國を建つ。則西はドン河の上流を限り、ムーロム、メッチェラク、莽種の中心に當り、民俗勇武にして疎野、常に遊牧の狄種と攻爭してやまず。またムーロム、メリア、エス、チェ

レミス諸部の中央、北方森林の地にヂルカ、オカ河の流域を占めて、スズダル、ロストフ、イウリエフ・ボルスキ、ウラヂミル、ヤロスラヴル、ペレイアスラヴル・ツァリエスキ等の諸邑ありてスズダル國を建つ。スズダルの民勇健リアザンの士と伯仲し、僻陬に起りて漸くノヴゴロド地方を威迫せんとす。蓋しキエフ、ノヴゴロド・セヱルキ等の民は土耳其種等遊牧の蠻部と戰ひて、漸くその血統相混じ、スヅダル、リアザンの士は農耘を主とする芬種に混じ、ドニエプルの流域、ヂルガの谷、風尙漸く轉變して相容れず、大露西亞、小露西亞の別こゝに源委を托せしが如し。

以上キエフ、チェルニゴフ、ノヴゴロド・セヱルスキ、リアザン、ムーロム、スズダルは實に西南露西亞の界州(マルク)にして之に對して西北リトワニアに面してはドヰナ河谷のポロツク、イルメン、ペイプス湖畔のノヴゴロド(諾弗哥羅)、プスコフ(北斯哥弗)共和國あり。殊にポロツクはドニエプル河上のミンスクを領して屢は兵をキエフの太公と交へ、ノヴゴロドはトルヨク、ヂロク・ラムスキ、イズボルスク、ヱリキ・ルキ等の諸小國を併呑して漸く西北の雄鎭とは爲りプスコフは始ノヴゴロド領たりしも一一三七年に自立したり。

更に首を轉じて東南を顧ればヂリニアはプリペト河の會滙せるところ、ヂリニアのウラヂミル、ルツク、ツロフ、ブレスト、ルブリン等ヲ領し、ガリキア本部(赤露西亞)はサン、ドニエステル、プリペト河の流谷に位し、一一四四年ウラヂミルコの建剏せしガリチ、ペレミスル、テレボヴル、チェニゴロド等その主要なる市邑なり。古謌謳に有名なる英雄ステパノヰチュ公は此國に出づと爲し、かの『スロヂ・オ・ポルク・イゴレヰエ』にも亦曰く、『ガリキアのヤロスラフ、オスモミスル、殿下黃金の玉座に蹲踞し、精兵鐵騎を以てカルパチアを助け、禿納の門を閉ざし、匈牙利の王を防ぎ、キエフの門を開き、遙に其箭を射んのみ』と。以て如何に上世その富强を傳へられしかを覽るに足らむ。

蔑爾たる彈丸黑子の地に據りて封侯を射んとする者、起仆數ふるに遑なきも、稍記するに足るは此等數國に過ぎず。況んや此等の邦國諸領、皆河に沿ひ流に臨みて羅布し、形勝の固關地境を劃絕するものなく、キエフがペレイアスラヴルと僅に一地區を限るを除けば、他の犬牙錯綜、皆水に浮び流に棹して通交自在にして、假令崩裂すと雖も他日統一の地を爲すに難からず。また露西亞の四境はたゞ西南の

一方を除くの外、リトワニア、チュード、栞、土耳其、馬札兒等の異種に圍繞せらるゝを以て、一時幾邦國幾公領に分裂せしも、人種言語の統一を失はず。之を宗教上より見る、壁狹若し異端に非されば隣邦殆んど羅馬基督教を奉ぜる間に、露西亞は獨り希臘正教を奉じて羅甸語を禁じ、之れを從來の歷史に徵するに、露西亞はワランヤ部の征服の下に、ビザンチオン文明を傳へ、南征外戰みな志を一にす。假令諸公四方に割據し、兄弟子孫地を分ち邑を分つも、諸家の起倒諸領の盛衰甚激にして、また一領の特象を具し、一地方の發達を見るに遑あらず。特に況んや、その諸領の主、諸家の君公は何れも皆ルリク一家の後裔ならざるは莫く、キエフ太公の支庶たらずんばあらず。紛々たる六十餘國の鬪爭、終にこれ一國の內亂に過ぎず。南隣北鄙地隔て、東公西主干戈相見るも皆血肉の姻親のみ。これ亂離二百年に近く、加ふるに外種の蹂躙を經て、露西亞がなほ眞に國を擧げてながく分崩裂潰して俶びざりし所以なり。

二、ウラヂミル・モノマコスと其子孫

一び國を逐はれて外に奔りしイシアスラフは一〇七六年スヰアトスラフ死して後はしめてキエフに歸るを得しが、在位僅に二年にして薨ず。子スヰアトポルク直ちに父の後を嗣ぐを得ず。イシアスラフの弟ヴセヴロド位に在ると十五年にして、姪スヰアトポルク・イシアスラヂチに讓れり。ヴセヴロド公主ありて獨逸皇帝ハインリヒ四世(或はいふハインリヒ五世)に嫁し、公子ウラヂミル・モノマルコスありて軍政に參劃し、智勇を以て著はる。一〇九三年ヴセヴロドの逝くや衆位をウラヂミルに讓めしに、ウラヂミルは『スヰアトポルクの父はわが父の兄なり。まづスヰアトポルクを位に即けて內訌を絕たむ』といひて、辭して受けず。スヰアトポルク既に位に即きて幾ならずして內亂起る。はじめスヰアトスラフはチェルニゴフを領邑とし、兼ねてタウリドのト・ムトラカン、ムーロム、リアザンを領せしが、イシアスラフ、ヴセヴロドの世に及びチェルニコフの富邑を收めて、スヰアトスラフの後に與ふるにたりトムトラカン、栞部の地を以てしたり。スヰアトスラフ家の諸公之を憤り、中にも當世に名を得し長子オレグは奮起してポロヴヂ部と連和して兵を擧く。ウラヂミル・モノマルコスはチェルニコフを領せしが騷亂起りしを見て外寇の乘ぜんを憂ひ、書を裁してオレグに說き、一〇九七年諸公侯をドニエプル

河上のルーベチに會して和を約し、チェルニコフをオレグに復し、十字架に接吻して、相與にキエフ太公を輔佐してポロヴチ部を防がんことを誓ふ。然るに此時オレグの弟にヂリーニア侯ダヰドといふもの地を從兄弟ヴシルコ・ヂロダルと爭ひて之をキエフ太公を讒す。太公スヰアトポルク之を信じヴシルコを捕へてダヰドに賜ひしかば、ダヰドその眼の抉揚せり。當時希臘帝國に在りては多く此慘刑ありしも、露西亞人は然らず、之を見聞せしヤロスラフの子孫は皆ダヰドを憤りて、ワレルコの爲に怨を報せんとし、ウラヂミル・モノマルコスもオレグとともに兵を太公スヰアトポルクに加へんとせしかば、キエフの緇流士民は太公を說きてダヰドと斷たしむ。ダヰド乃波蘭、匈牙利の衆を招きて自衛りしが、一一〇〇年諸侯ドニエプル河岸のヰチチェヲに會してタヰドの罪を論じ、悉くタヰドの領土を收めたゞ四小邑と四百グリヴナスの財を與ふ。事乃平ぐを得たり。

ウラヂミル・モノマルコスは父ヴセヴロド、從兄スヰアトポルクの二朝に仕へて政治征伐に參與して功多く、太公を輔翼すること三十餘年、大に民心を得しかば、一一一三年スヰアトポルクの逝くや民衆之を擁せんとせしも辭して受けず、キエフに猶太人の亂あるに及びて初めて太公の位に即く。乃外はポロヴチ、バチナク、トルケー諸狄を攘ひ、內は猶太人を放ち、カザールの遺民を保護し良治を以てこの離亂の世に著はるゝこと十餘年。或はモノマルコスは南征してトラキアを侵し、エフェソスの卑涉を執へ、希臘帝室の冕冠玉座を奪ひてかへり、卑涉は太公に戴冠せしめて露西亞君王の位に即かしめたり、現にモスクワの博物館に藏するモノマルコスの冠此時のものなりといふ。想ふに、これ必ず太公の子孫がその祖宗を尙ぶの餘に出でし傳奇に過ぎざらんも、以てモノマルコスの德を損するに足らず、以てその盛世を想ふに足らむ。さればキエフ太公の聲威復諸侯に加はり、ミンスク侯は亂を圖りて廢せられてキエフに幽せられ、ノヴゴロドは質を納れ、ヂリーニアのウラヂミル侯は事を以て地を奪はれき。スズダルにスラブ種の根底を固めしもウラヂミルの功にして、クリアズ河にウラヂミル府を創めしも亦この太公なり。

こゝに世に遺りし太公の諸子を訓ふるの言あり。以てその人と爲りを視るに足れり。請ふその言を聽け。『諸子。神を敬ひ人を愛せよ。人の後代に垂る可きは齋戒にあらず、閑居にあらず、誓宣にあらず、たゞ慈善善行に在り。孤兒を視ると

父の如く、寡婦を憐れみて自其獄を裁せよ。天下一も基督教徒の身神より尊きはなし。矚みて有罪無辜ともに其生を奪ふ勿れ。よく爾曹の爲に神に禱る者は緇徒なれば、常に之を遠くる勿れ。十字架に對して爲しゝ誓盟をな破りそ。人は必用うるところあるを記せよ。細心家事を整へ、必ず酒に荒み色に耽る勿れ。よく妾妻を愛して、且牝鷄をして晨せしむる勿れ。若し用う可きの事を見ば能く之を記して忘れず、居常心して智識を求めてなほ且五國の語を善くせしは天下四隣の談驚するところたりき。戰場に臨みては勇なれ、臣隷從士の摸範たれ、守衛を置かずして退き憩ひ、敵に近くして兵器を離し、馬に乘るに晩くして襲撃に遭ふと勿れ。若し領地を巡視せば、臣隷をして秋毫も犯さゞらしめ、自費を辨じて旅舍の主を賑はせ。孤はつねに爲し得る所は自力め、晝夜寒暑を問はず自働き、萬事悉く自視自處し、決して貧困鰥寡を强横の手に委せず、禮禮參賓より政令狩獵に至る迄義務として爲ざる莫し。一世の戰闘八十三回ボロヴチと約を訂する十九回、其一百酋を執へてまた之を縱ち、其二百酋を殺しぬ。孤は又天下無比の健脚にして、晨にチェルニゴフを出でゝ夕にキエフに達す。また

た年少にして馬より墜ち手足を挫き頭を傷けしも神助を得て癒るを得たり。またしばゝ林中に獵して手から野馬を捕獲し、或は水牛に觸けられ、或は鹿に傷けられ、或は野猪に劍を奪はれ、馬蹶れ鞍碎けしとありしも、なほ神冥の祐助ありて今に至れり。噫、諸子。決して死を畏るゝ勿れ、野獸を恐るゝ勿れ。たゞ神を信ぜよ』。何ぞ其言の洵々として長者の風ある。

然りと雖もウラヂミル太公の訓言はたゞ自家の徳を後昆に示すにとゞまりて、復長く紛爭の根を斷つ能はず、太公一一二五年に殂してキエフ漸く衰へたり。太公は三び娶りて其逝くや五子を遺せり。長子ムスラフは前英吉利王ハロルドの公主ギダの出、父太公の後を繼ぎてキエフに君臨せしが、在位僅に六年にして逝き、後主庸暗にして威令行はれず、オレグの子孫起ちて太公を爭ふ。爾後三十八年に十一君を代へしにて爭闘の繁きを推知し得可し。ムスチスラフの弟イゴル・ドルゴルキはスズダル・モスクワ家の祖たりしが、モノマルコス、オレグの子孫太公を爭ひてキエフ爭亂の渦中に在をる見、自取つて代るの意あり。オレグの後にまたイゴルといふものあり、太公の爲に廢られてキエンに幽せられしかば、其弟スボアト

スラフはイゴル・ドルゴルキと相呼應してキエフに叛く。時にムスチスラフの子シアスラフ、キエフの太公たりしが之と大にペレイアスラヴルに戰ひて敗績し、キエフに據りて固守せんとす。キエフの士民はもとオレグの黨を敵視するも、モノマルコスの本旨を輕重せずして、以爲くオレグの子孫を防ぐには辭せずと雖、豈戈を逆にしてモノマルコスの公子にして太公の叔父たる人に加ふ可けむと。敗てイゴルを防がんといふ者莫し。太公乃キエフを棄てゝダリーニアのウラヂミルに走り、救を義兄匈牙利王、波蘭、ベーメンの諸王に請ひ、宗室の長者位を繼承す可きの國習を重んじ、これも亦モノマルコスの子たるプーロアの老侯ボアチェスラフを擁し、還りてキエフを爭ひてイゴルに勝ち、非チェスラフは書をイゴルに贈りて自家を認めしめんとす。イゴル聽かず、ガリキアに走りてガリチ侯ウラヂミルコと合せんとす。太公其意を知り急に追擊して之にドニエプル河上のルートの堺に及び、戰ひて傷を蒙りしも殆んど敵を粉碎してかへる。時に一一五一年なり。しかも後僅に三年にして太公イシアスラフ薨じ、老ボアチェラフも死せしにぞ、キエフは復爭戰の街と爲り、一一五五年イゴルはキエフに入りて太公と號せしも亦僅に二年にして世を辭したり。恰も此際士民黨を爲してイゴルを逐はんとせしが、訃音を得て、碟血の禍なくして敵を亡ぼしえしを賀し、徒黨府に入り、或は僧に太公と號し、或は拉に封地を分つ。抑も諸侯伯の地方に割據して以來太公の稱は空名に過ぎず。たゞその露西亞發祥の中都、宗教文化の淵源、宗室の廟地としてキエフの名諸侯の間に重かりしのみ。然るに事玆に及びては太公の空威全く地に墜ち、都城の實既に亡びたりと謂つ可し。

主權地に墜ちて群雄都城を爭ふは衰世の常相、古今東西轍を同うす。キエフの爭奪またしかく、繁瀕にして詳叙し難し。ひとり衆と群を異にし跼然として輕くキエフを爭はざるは獨りイゴル・ドルゴルキの子スズダル公アンドラス・ボゴリウブスキあるのみ。以爲く、わが國土風寒朴、庶民治に服し、臣隷忠誠を抽んず、キエフは匈牙利、波蘭に近くポロヴチ部に隣接し、掠奪、殺戮、內亂外戰相踵ぐ、加かず群侯をして相搏噬せしめ、自內を養はんにはと。乃ウラヂミルを修め、モスクワを盛にし、孚りに市邑を置き、亂を避けて來投する南露西亞の民を招きて中部露西亞を經營したりしかば、露西亞の實權は終にドニエプル河畔を去りて漸くヴルガ河上に

移れり。一一六九年アンドラスは事を以てキエフの太公に含み、時至れりと爲し、十一侯を進ねて起ち、子ムスチスラフ、臣ボリスを將とし、ロストフ、ウラヂミル、スズダル等の大衆を率ゐてキエフを討たしむ。キエフ圍まるゝと三日にして降り、スズダルの軍府中を刼掠し、聖ソフィア、ヂメの諸寺を荒し、神像聖器典籍を收めてかへる。世一び亂れてよりキエフしば〳〵他人の手に落ちしも、兵力を以て拔きしは實に之を初とす。而してこの陷落の後なほ此地に據る者ありと雖も、また全露西亞の都城たらず。スモレンスク、チェルニゴフ、ガリチ皆擅に太公の號を稱し、スズダルは之より一時諸侯の覇柄を握りたり。始めて法典を完成し統一の業を完うしたるヤロスラフ太公の薨後此に至りて實に一百十五年、古露西亞發祥の故都終に亡びたり。

三、ノヴゴロドとスズダル

キエフの陷落は古露西亞衰亂時代の一轉期を劃せり。暫く大小廣狹の差と社稷長短の別とを沒して、古露西亞を以て周室に比せんか。ヤロスラフの後此時に至るまでは春秋時代にして、衰餘のキエフ太公はなほ諸侯の仰ぎて宗嫡の君と爲すところたりしも、キエフ陷りて後、諸强擅に太公と號し、政爭の中心なくして割據の名實俱に成り隤々たるその狀戰國に比す可きなり。この戰國の雄は何ぞと問はゞスズダル、ガリチの二强、さてはノヴゴロド、プスコフの共和國なり。吾人は直に前節をうけてスズダルの羈業を述ぶるの前、少しく溯りて夙にキエフと並稱せられしノヴゴロドの來由を說く可し。

キエフの未大に起らざるに當り、夙くも西亞露西亞に政治的中心と爲りしはノヴゴロドなるが、之を擱置せしイルメン湖上のスラブの來由は明ならず。或は以て南種スラブとし、或は以てバルト海スラブと爲し、また或はスモレンスクのスラブと同種なりとして諸家の說紛々たり。そのワランギ人の來往の衝に當り、キエフの太公を助けて位を得せしめしは上に述べしが如し。イルメン湖を出でゝラドガに入るヂルコーフの流、府中を貫き、その右岸は府城(クレムリン)の地にして、かのヤロスラフ太公が建てし聖ソフィア寺、大卑涉、君公の官皆此に在り、その左岸は商賈住居の地にして、ヤロスラフの政廳あり。十五世紀の始此地を橫ぎりし古記に曰く、『ノヴゴロドは大深林の中なる美地に在る大府城にして、地低く水浸し沼澤多く、堡籃壘

壁を繞らし石造の市街なり』と。曩壁今尚幾分を存して當時の盛を偲ぶ可く、十二世紀の壁畫、金地に聖徒を描きし四柱、基督の像、聖母の旗、明君名將の像、古を弔するに足る。ノヴゴロドの本領はラドガ、オネガ湖南の地をこめて五部に分れ、漸く檢非違使區（ヨロスト）を加へて北露西亞を併せて悉皇利に及び、更にイングリア、カレリア及びリヴニア、エストニアの一部を掩有せり。その民十萬、奴隷三十萬、ワランギ諸公の制御に甘服せず。傳へいふ、英士ヴヂムといふ者ありて古公ルリクに對して反旗を翻しゝとありと。かのプルガリアを征して圖南の威を誇りしスボアトスラフが此地に代官を置かんとするや、ノヴゴロドの民は『自ら來り治めずんば、臣等別に策あり』とて一公子を乞ひ、ヤロスラフ太公を助けてキエフに入らしむるや特許を請求し得たり。假令府に君公なきにあらざるも、實權は府會の手に在り、自號して『ゴスポヂネ・ゾリキイ・ノヴゴロド』と曰ひ、府民は自誇りて『誰か能く神とノヴゴロドの敵たり得可き』と諸へり。蓋し其地西北に偏在して、キエフを中心とせる露西亞の爭奪戰亂の外に立ちてその禍を蒙らず。自欲するところを迎擁して君を拜し、意に滿たざれば之を逐ひ、之を幽して更に新主を迎立す。されば君公も亦政權半は他人に屬するを見て自ら棄てゝ他に去るあり。曩てキエフの太公スヰアトポルクが其子を以てノヴゴロドの主たらしめんとするや、府民傲然として答ふらく、『公子若し別に頭あらば來れ』と。曩て（一一三二年）ヴセヴロドがブリエルのノヴゴロドの君公を抛ちて去りしも、意を得ずして復歸らんとを求むるや、府民斷乎として拒みて曰く、『卿は吾民と生死を偕にす可き譽を破りぬ。請ふ好むところに去れ』と。かくてノヴゴロドに君公たらんものは、たゞ其ヅルージナを恃み、他の有力なる君公の後援を恃むのみならず、また府中の黨派と善からざるを得ず。ノヴゴロド府中夙に朋黨の起るあり。府民の中、ヲルガ方面と東方とに通商する者は自らスズダルに依賴し、ドニエプル方面より希臘帝國に來往する者は南方の强たるキエフ若しくはチェルニゴフを援きて、互に對抗して各その所緣を迎擁せんとして相競ふ。されば諸公一たび志をノヴゴロドに失へば出自の諸侯の兵を借り來りて此地を爭ふに至る。キエフ陷落の前後に及びてノヴゴロド共和國の爲に最提る可きは、新興の勢强大なるその東隣スズダルなり。請ふスズダルのアンドラスが事蹟を說かむ。

スズダル家の祖はキエフ太公ウラヂミル・モノマルコスの子イゴルドルゴルキなりと雖も、イゴルは此地に據りてキエフを爭ひて死したれば、寧ろ始めて此領國を經營して自立しキエフを陷れし、その子アンドラス・ボゴリウプスキを以て始主と爲す可し。從來キエフ以下の諸君公、多くは輕佻にして深く利害を打量せず、輒く干戈を動かし、否らされば無安日を銷せしが、アンドラスに至りては之と異り、覇氣滿腔、政戰を以て念とし、毫も屈撓せず。諸公稍もすれば其下に制せられしも、獨りアンドラスは君權を振ひて下を駕御し、自殖民を設け市區を建設して集權に力む。則夙にウラヂミルに據きてボゴリウボヂ區を置き、父の殂後はキエフを取りしも之に入らんとせず蓄積を收めて、かへり、更にノヴゴロドに向へり。然れどもキエフの守るはその諸公の名の爲にし、ノヴゴロドの自防ぐは宗祖の法度を擁護せんがためにす。所信決志遙に相異なり。故にスズダルのムスチスラフがスモレンスク、リアサン、ムーロム、ポロツクの衆を合せて來り攻むるやノヴゴロドの士衆はキエフの覆轍を以て相戒め、聖ソフィアの爲に死を決し、大卑渉ノワンは聖母の像を飾りて軍氣を鼓舞し、猶鬪してスズダル軍を擊退し、その和を講ずるや、スズダル公の任ずる君公を奉戴せんと誓ひしも、毫も共和の古制を讓らず。たゞ夫キエフが古く政治的都城たりしが如くノヴゴロドは實に商業的中心たりしに、キエフがスズダルに陷りて幾ならず、ノヴゴロドも亦スズダル公を仰ぐに至りしは、スズダルの興業成れるを見る可し。

然りと雖も君侯割據は當代の潮勢にして、アンドラスの隻手よく幾君侯を制する能はず。スモレンスクの君ダボド、ルリク、ムスチスラフ武公等皆叛き、アンドラスの命を用ひずしてキエフを取り、就中ムスチスラフ武公の如きは使者を辱しめその來討の師を破る。アンドラスはロストフ若しくはスズダルに居るを欲せず、コンスタンチノポリスより獲しといふ聖母の像を奉じてウラヂミルに入りてボゴリウボヂの故宮に居り、ヂルガ附近のブルガリア部を破り、コンスタンチノポリスの師父の許可を得て勝捷記念祝日を定め黃金門を建てヂメ寺を置き、キエフの教權を奪はんとす。蓋しアンドラスは宗室分封の制を停めんためには兄弟諸姪を逐ひ、臣僚厚遇の古風を廢しては君主專權の治を爲し、國家を一統して專制政治を布き、細徒と結びてオカ河谷の地を露西亞の宗教的中心と爲さんと欲せしが、時

運未到らず、嚢略また志にそはず、外はノヴゴロドも、ムスチスラフも、南方の諸侯も皆之を疾視し、内は貴族臣僚その下に耐えず。一一七四年アンドラスは其名を負はしゝボゴリウボヅの宮中に刺され覇圖遂に空し。假令英明の主相嗣ぎて出づるも、此時勢に處して統一君治を大成するは至難の業なり。況や繼嗣の庸暗なるに於てや。

四、スズダル、ノヴゴロド及びガリチ

はじめアンドラスのスズダルを棄てゝウラヂミルの新邑に遷るや、古府の民皆悦ばず。公薨じて嚮に希臘に奔りたりし二弟ミカエル、ヴセヴロド歸りてウラヂミルに據るやロストフの民はわが奴婢なり、其城地を夷げてわが治を受けしめん」と謂ひ、古都スズダルを助け故公の諸姪を奉じて嗣を爭ひて敗る。ミカエル乃公位を嗣ぎしが一一七六年ヴセヴロド大巣公その後を受くるに及び、二府また爭ひしも志遂げず。ヴセヴロドは依然ウラヂミルに都し、リヤザン、チェルニゴフ諸侯を破り、キエフ、スモレンスクと連和し、ガリチを風靡し、ノヴゴロドを屈して其子コンスタンチンを以て君公とし、リアザンの命を用ひざるや討ちて一炬に附し其民をスズダルに移す。既にしてヴセヴロドはコンスタンチンをロストフに移し、次子イゴル二世を後嗣とし三子ヤロスラフをノヴゴロドに君たらしむ。ヤロスラフ、ノヴゴロドの士民と爭ひ、去りてトルヨクに據り通商の要路を扼して糧道を絶つ。ノヴゴロド大に苦しむ。スモレンスクのムスチスラフ武公の子勇公之を見て奮起し、自ノヴゴロド公と爲り、ロストフ公コンスタンチンと連りてヤロスラフを討ち、ラウヂミルの太公イゴル二世はヤロスラフを助け、一二一六年大にペレスアスラヴルザリエスキ附近のリペックに戰ふ。イゴル破れ服を變じて奔り、コンスタンチンはウラヂミルに入りて太公と爲り、イゴルをスズダルの主としヤロスラフをしてノヴゴロドを擲たしむ。しかも一二一七年コンスタンチン公逝きて後、イゴル復ウラヂミルに君臨し、ヲルガ、モルダヰアのブルグンド部を征し、一二二〇年ニヅシ・ノヴゴロドを建置せり。

スズダルの覇業は專制君主を目的とし、ノヴゴロドは自由通商を性命とし共和制を棄てず。この間にガリチは純然たるスラブ種の古風を存して選擧君公を奉戴せり。ガリチの民は夙く波闍、匈牙利の政治思想を傳來して富庶相議して政を

乗り、君公ヤロスラフ・オスモミスルが嫡妻を輕んじて側室を寵するや、市民蜂起して側室を殺し庶公子を放ち嫡子ウラヂミルを立つ。然るにウラヂミル亦不德にして酒色に耽り國人と容れずして宗族を率る重器を抱きて匈牙利に奔る。士民之を廢し、一一八八年ヂリーニア公ロマノフを迎へて主とす。匈牙利王ベラ乃ウラヂミルの爲に兵を出しゝが、忽意變じ自ガリチを奪ひてその子アンドレアスに與へしかば、士民憤りて之を擊退し、またウラヂミルを迎へたり。既にしてウラヂミル逝きしかば、ヂリーニアのロマノフは波蘭王カシミルの兵を借りてガリチの君公と爲る。スラブ特殊の國風茲に於て平空し。

ロマノフは當世の毀譽相半す。波蘭の卑涉カドルーベクはガリチの寡頭政治に同情を表して、ロマノフがその敵を遇するの苛虐なるを難じ、露西亞の史家は太くロマノフが勇偉の英雄なるを賞揚して勳業モノマルコスに亞ぐと爲せり。ロマノフはリトワニア、ポロヴチ諸部を破りしこと一再ならず、支族の一をキエフに封じ、羅馬法王インノチェンテ三世が使を遣はして來り、加特力派に歸依せば聖彼得の神劍を以て大王に封ぜんことを說かしむるや、ロマノフは劍を拔きて使者に示し、

傲然として『法王豈また此の如き劍ありや』と云ひて之を拒めり。さればヂリーニアの史にはロマノフを大公と稱し、また全露西亞の王（ツァトゥガト）として傳へぬ。實にロマノフはスズダルのアンドラスと對比す可き亂世の一英傑なりけらし。

一二〇五年ロマノフは波蘭と戰ひ深く敵地に入りて敗死し二子尙幼なり。夫人長子ダニエルを立てゝガリチ公と爲しゝも、國內治まらず、朋黨櫛を爭ひて寡婦幼兒を翻弄す。時にスモレンスクのムスチスラフ勇公はノヴゴロドの爲にスズダルを防ぎて功を立てしが、ガリチの亂れしを見て、ノヴゴロト人の抑留に應ぜずして此地に來り、匈牙利人の侵寇を討攘して自ガリチ公と稱し、女を以てダニエルに嫁はす。一二二八年ムスチスラフ逝きてダニエルはじめて親ら政を執り、以て蒙古の侵寇に至れり。

ノヴゴロドにてはムスチスラフ去りて後其姪スヰアトスラフを迎へしが、スヰアトスラフは國人と相容れず、府長チェルデスラフ等騷亂を起して事破れしも、府會の爲に庇護せられて罰せられず。スヰアトスラフ乃外に奔り、弟ヴセヲロド立ちしも、亦二年にして放たる。時にスズダル黨勢を得、さきにリペックに敗績せしス

ズダルのヤロスラフを迎へ更にスモレンスクのヴセヲロドを迎へしも皆相容れずして去る。斯くてノヴゴロドは七年の間に五び主を代へしが紛擾已まず。偶ま一年饑饉の厄に遭ひ大火の災に罹りて備さに困頓を窮めしかば、さしも傲岸なるノヴゴロドの民も勢挫け、復ヤロスラフを奉じて君公と爲し、一二三六年ヤロスラフ國にかへりてスズダルの太公と爲るや、府民は其子アレキサンデル・ネヴスキを立てゝ君と爲したりき。

ノヴゴロドの盛なるや、プスコフ、ラドガ、イズボルスク、エリキ・ルキ、スタライア・ルサ(古露西亞)、トルヨク、ビエギチ以下の諸市邑みな其下風に立ちて、共和政の治を仰ぐ。中に就きてプスコフ、ギアトカの事稍見る可し。八若しプスコヴ、エリカイア二川の合する處に一荒村を訪はゝ殘壘廢樓幾百星霜の雨露に毀れし一座の古城を見ん。これ聖オルガの生地として商業殷盛の共和府として自誇りしプスコフの地なり。ヴセヲロド・ガブリエルがノヴゴロドを逐はるゝや、はじめて此地に據りて自立し、一二一四年には此地日耳曼人と同盟してノヴゴロドに對峙せしが、根據尚堅からず。幾多の變遷と盛衰とを經て百三十年の後はじめてノヴゴロドより自立を認められき。ギアトカのことは更に之に異なり。一一七四年の頃、ノヴゴロドの志士カマ川より半アトカ川に至りて今のニクリチネ村に一殖民地を設け、またコルカロフ則現時のコテルニチを建てしが、二地の衆相合して進み、ギアトカの右岸に一座の古城あるを見て、之に據りてクリノフ市を建設す。これぞ則ギアトカの起源なりき。

總にヤロスラフ太公の法典を說きて聊かノヴゴロドの特典に及びしが、今復その制度、商業等に就きて數言を費さむ。古露西亞の諸國諸市は皆世襲の君公あり、臣隷あるも、ノヴゴロドは獨り之なきを以てよく自由府市の面目を保持せり。假令諸府市亦多少制法の討ぬ可きありとするも遂に此府の原始の制度を完うせるには加かず。ノヴゴロドにては府權は君權より強く、此に君臨せんと欲する者はヤロスラフ太公が制定せし府の法律制度の遵奉を誓はざるを得ず。君公の廢立幽囚、大辜涉の廢置、宣戰媾和、國事犯の裁決等は皆府會(ヴエチエ)に決し、君公府長貴族庶民の別無く苟くも府中の士民は此會議に參與するを得。府の吏員は一に府長(ポサドニク)ありて、府中の權門より選ばれ、府民の特權を保護し、君公と裁判賦課の權

を分ち、府政を執り府兵を指揮し、二にチサッス(將軍)ありて兵馬の權を掌り兼ねて士民を保護し、三に各區の長(スタロスト)あり。府の法律の記錄にはスドナイア・ガラモタ(司直籍)ありて、その內容はヤロスラフ太公のルスカイア・プラヴダと殆んど異なるなし。

ノヴゴロドは地味痩せて沼澤多く、農耕の利なくして疾病饑饉の害多し。故に其勢通商に利を射、殖民して地を拓かざるを得ず。十世紀以來、其民スモレンスク、ルーベチュ、チェルニゴフ、ポチチェヴに出で、ドニエプルの瀑を過ぎて希臘帝國の沿海に來往し、鐵武器を以てイウグリアの貴金屬と交易し、またバルト海のスラブと通商しゴトランド島のヰスビに向ふ。十二世紀の頃ノヴゴロドにゴトの商庫、ウランギの敎會あれば、ゴトランドにもノヴゴロド敎會ありき。既にして日耳曼人のバルト海の商權を爭ふに至りてまたノヴゴロドと通商し、のちハンサ同盟起りては日耳曼の商賈はプスコフ、ラドガに入りて特典を受るに至りき。また宗敎上より見るもノヴゴロドは他の露西亞諸國と同じからず。府會は別にノヴゴロド大卓洗を選擧して希臘若しくばキエフと相關らず。大卓洗は府中の高位にして、公署の文書には劈頭に記名し、その府中の出たるを以て權勢外來の君公に過ぐ。その敎會亦國家的敎會にして政敎二面の事に參畫せり。斯くてノヴゴロド府は宗敎政治の利害を一にし、その殖民地の拓植は基督正敎の傳派と相伴ひ、宗敎上の光彩は政治的盛衰と相消長す。ノヴゴロドはキエフと相亞ぐ古府なれば、その古謳また別に一派の所傳を謳ひ、その謳歌するところは英傑ワシリ・ブースラエヴチ、さては冒險の快豪サドコが事蹟なり。サドコの船風波の難に遭ふや、衆犧牲を海神に供して災を禳ふに決す。サドコ乃自進みて水に入りて衆を救ひしかば、水府に聘せられて厚遇を受け、海若の女を娶り寶貨を載せて歸れり。これその　ふところにして、北方またキエフ諸公の傳奇に及ばざるなり。

以上略ぼノヴゴロドが連鷄の勢爭鬪を事とする當時の露西亞諸國の中に在りて超然一別面目を有するを見る可し。

五、リヂニア武士、バルト諸州

十二三世紀の間に露西亞は三方面にて三人種と撞着したり。曰く、西北方面の日耳曼人、西方のリトワニア人、及び東南方面より侵寇せし蒙古種族これなり。西

北露西亞の君公はバルト沿海のチゥード部に以て臣從と目し附庸と爲したりき。嘘馬のクニュート大王がエストニアに勝つや、露西亞のヤロスラフ太公はエムバハ沿岸のイウリフ(ドルパト)を擄盜し、其地またペイプスに陷りて嘘馬露西亞領を分てり。後ウラヂミル・モノマルコスの子にムスチスラフはチゥード部のオデンペー(芬語熊頭の義)を得、ポロツクの諸公はドヰナ河上のグルシク、コケンハウゼンを略取して、河に沿ふて威令をトゥレイダ、アスケラデンに及ぼしたり。日耳曼商賈とともにバルト海上に伴ひしは、西歐羅巴を風靡せし羅甸敎會の宣敎師にて、敎をリヂニアに宣べて、此地與渉の祖と爲りしはプレメン大卑涉より派遣せられし僧マインハルドなり。一一八七年マインハルドはツエクスキュルに寺を建て、寺外に壘を築きぬ。この宣傳は實は敎法の衣を着けて北歐の諸狄を懷柔し其獨立を滅ぼして臣從たらしむるものなりき。されば其意を看取せしリヂニア人は宣敎に反抗し、一一九八年にはリヂニア第二世の卑涉を殺し一ぴうけし洗禮をドヰナに淨祓して國神崇拜を復す。法王インノチェンテ三世十字軍を起し、ブクセウデンのアルベルト水師二十三隻を以てドヰナ河畔に來り、一二〇〇年リガ市を創め、翌年基

督軍團を置き、法王より廟士の號を得、白衣を着け赤十字を徽章とし、エストファーレン、ザクセンの壯丁を募りて之に宛てリガを攻めて大敗し、諸豪また之を圍みしも、日耳曼水師の至るや圍を解きて退きぬ。蓋しポロツクの諸豪は强大ならざるに、ノヴゴロドと抗爭し、內諸豪一致せず、武器兵略は敎門武士の精銳に及ばず、堡壘の堅牢また相敵せず。されば敎門武士のリヂニアを伐ち、ドヰナ河のセミガリを征し、北はチュード東南はレット部を攘ふや、刀火並び用ひ城を築き戍を置きて進むによく敵する鮮し。リガを始めとしドヰナ河上のキルヒホルム、ウエクスキュル、レンネワルデン、アスケラデン、クロイツブルグ、ペイプス河畔のノイハウゼン、アア河谷なるヨルマル、エンデン、セゲヂルト、クレモン、北チュードなるフェリン、ワイセンスタイン等は皆斯くして建設せられ、ポロツク領なるコケンハウセン、グルシケ、ノヴゴロド領なるオデンペー、ドルパト、さてはプスコフも威逼するところと爲り、コリヴンは嘘馬王の手より買收せられき。コリヴンは羽闘神話中の英雄コリヴン埋骨の地なりとて此稱あり。今のレエル是なり。斯くて侵畧せし地は采邑領土に分ちて、一

部は武士團に屬し、一部は大卑渉に隷し、新設の諸市はリューベク、ベレーメン、ハムブルグ等と同じく商業市政の制を布きしが、就中リガ最盛に、其大卑渉は權を武士團長と爭ふに到れり。

之よりさき約一百年、東方に十字軍起りて、エルサレムにテウトニ武士團興りしが、十字軍の衰ふるや、その一部日耳曼に移る。是に於て一二二五年普魯西リトワニア人中にテウトニ武士團成り、トールン、マリエンベルグ、エルビング、ケーニヒスベルグ等を置き、黒十字を以て表章と爲す。十餘年の後、この黒十字とかの赤十字と相同合し、テウトニ團長ヘルマン・ド・バルクはリヴニア團長と爲り、益す威力を奮ひてレッ、リヴニア、某人に臨みしかば、さしも勇健なりし北狄諸部も漸く土着の農民と化し去りぬ。プスコフの『臣隷の時代』の謠は『聲も悲しき涙の歌、世に痛ましき臣隷の運命』を歌ひ、キースランドの『過ぎし世』の句には『十字の爺は吾曹の富を盜み、隱したる寶を奪ひ、聖き木を斫り、聖き水を用ひき』とかなしめり。假令チュード・エストニア人の國歌たる『カレボ・ホエグ』が神武恠勇を說くも、英魂一び逝きて復回へらず、終に克復の日莫かりき。

然れどもバルト海上に此變局を見るの時、古露西亞の民はカスピ海方面より怒濤狂瀾の捲き來るに遭へり。何ぞや。蒙古族の侵畧これなり。

第三章　蒙古の臣隷

一、蒙古來

基督の後一千年、末法の世滅びて天哉の日當に到る可しとは基督敎民の所信なりき。遙にエルサレムの情を聞きて老幼男女捨身の征途に上るを辭せず、前後一百七十四年、二百餘萬の精靈を不祀の鬼と爲しゝものは、當世民心の動亂奈何に甚しかりしかを證す可し。露西亞尙野なりと雖も亦基督敎の宣傳を受く。一朝前代未聞の强族疾風の襲ふが如くにして至れば、內訌爭鬪に勞れし露西亞の枯林、落葉舞ひ枝條飛ぶ、また恠むに足らず。『頭しもあれ、吾民の罪障なれや、未聞の民境に顯はれぬ。その何れに起り、何れより來り、何如の敎を奉ずるや知れる者なし、唯神こそ知らめ』といへる古史の言は實情なりけらし。泰西の史家、古露西亞を以て西歐に比し、南方より羅馬の文明と基督敎とを傳へしばガリアに似、北方より北種

の制度を傳へしは日耳曼に似たり、ヤロスラフの統一幾ならずして瓦解せしは、之をカール大帝沒後の分裂潰決に比す可し、たゞ夫その進歩西歐に後れしものは一に地味氣候の不利に由ると雖もまた蒙古侵略の結果たらずんばあらずといふもの詢に當れり。しかも現下露西亞の東侵は七百年前蒙古の西侵に似たらずや。稍もすれば亞歐の別を歴史人文發達の間に挿む者、終に露西亞の運命を解し難けむ。今の勢を以て蒙古西侵の露西亞を觀くまた多少の感慨なくんばあらず。

蒙古の勃興侵略に就きては自別に蒙古史のあるありて、茲に説くを須ひず。たゞ蒙古の勃興は青吉斯汗の英武に出て、青吉斯汗は宛も古露西亞にてキエフ衰亂の日に當りて、一一六二年東亞細亞の迭里溫孛勒峇黒山に生れ、一二〇六年斡難河上に九脚白旗を樹てゝ尊號を稱せしを記す可し。此即位は劍を秣きて法王の使節を屈せしガリチのロマノフが列落の翌年なりき。誰か想はむ、十七年前に東の方蒙古に汗位を稱せし者、十七年の後西天の涯に露西亞の地を蹂躙せむとは。一二一八年(宋嘉定一一、金興定二)の末西征の議を決せし蒙古の青吉斯汗は一二二〇年不花剌を破り薩末鞬を陷れ、花剌子模の機里丹を寛何吉思海中の孤島に竄死せしめて勢西亞細亞を振撼し、二將蘇布特、者別は打耳班に入り烏嶺を超えて奇卜察克に逼る。奇卜察克は則露西亞の歴史に所謂ポロヴチにして、土耳古種の一部たりしかば、蒙古の爲に説かれ之に應援して阿闌部を破りしが、阿闌破れて奇卜察克亦蒙古の災を免れず。奇卜察克の諸會乃多く露西亞に奔りしも、蒙古の追騎に斬られしが、一酋コチアクは奔りて女婿たるガリチ太公ムスチスラフに説くに、唇破れて齒寒く、奇卜察克亡びて露西亞亦危きを以てす。ムスチスラフ其言を聽き、南露西亞の諸豪に移檄せしかば、姪ヂリーニア公ダニエル、キエフの太公ムスチスラフ・ロマノヰチ、クールスクのオレグ、チェルニゴフのムスチスラフ・スヰアトスラヰチ、スモレンスクのヴラヂミル、先のノヴゴロドの主ヴセヴロド等來り會し、ポロヴチ(奇卜察克汗バスチをして希臘教に歸依せしめて、之を援け、露軍ドニエプル河に沿ふて下る。途に蒙古の使者來りて曰く、『吾軍は不庭の奇卜察克を伐つのみ、素より貴地を侵さず、聞く貴鄉は歴世奇卜察克と相拒ぐと、加かず吾に應じて之を挟撃して利を分たんには』と。露軍以て蒙古の詐謀と爲して使者を斬りしかば、蒙古の使復來り會し戰を宣して去る。既にして兩軍アゾフ海に注ぐカルカ川に會す。

ムスチスラフは勇にして、ダニエルは壯に、オレグ亦戰を好みしかば、後陣なるキエフ、チェルニゴフ等の兵を待たず、功を貪りて突進勇戰し稍や敵を退けしも、雌雄未決せずしてボロブチの怯なる先づ崩潰して露軍に入りしかば、露軍亦亂れ奔り、六將七十士鋒鏑に斃れ、兵衆還る者十の一に過ぎず。キエフ太公は衆一萬を失ひしも、附近の城砦を固守して蒙古軍に圍まれ、その僞計を信じて降り、二義子と與に壓殺せらる。時に一二二三年五月の末にして、ネストルの記錄に所謂前古未曾有の敗挫是なり。

然もカルカ一戰の後蒙古の二將は轉じてブルガルを侵し、キルギスの野を横りて不花剌に退き青吉斯汗に會せしかば、唯是飈風の天外より捲き來り捲き去りしが如く、敗挫に驚きし露西亞の諸豪は復杳として敵の消息を聞かず。久しく內鬩を是事として盲鬪を以て事とせし露西亞の豪右は一端不虞の外警に驚かされて連盟の師を發せしも、外寇一び退くや復鬩爭に還る。況んや東北諸侯の南方の利害を視る胡越の如く、スズダルの如きは寧ろキエフ、ガリチの敗辱を賀せんとす。此の如くにして蒙古の寇は忘却せられ、離亂の態年に衰弊に陷ると十三葛裘。內を顧れば民は兵革を以て諸侯の臣衛に任じて省みず、緇徒蒼奴徒に多くして良民減じ、一一〇〇年頃には太公の臣衛すら僅に八百に過ぎずといふに至りては、よくボロヅチにだも敵し難きを、いかで强大馬蹄に亞歐二洲の野を蹂躪する蒙古に對抗し得可き。加ふるに此際比年凶旱饑饉あり、一二三〇年には地震ひ疾菁起り、疲弊未癒えずして、復蒙古の侵寇に遭ふに於ておや。

一二二七年(宋、寶慶三、金、正大四)蒙古の青吉斯汗(元の太祖)殂落し諤格德依(元の太宗)嗣ぎて蒙古の大汗と爲りて、金を征し、一二三四年(宋、端平元、金、天興三)蘇布特、汴京を陷れて金を滅して元朝の基を開くとともに、皇姪巴圖等の西征興れり。巴圖は青吉斯汗の長子卓齊特の子にして、宗室の長を以て西征總督と爲り、同胞昔斑、斡兒朶以下諸王を從へ、蘇布特、太宗諤格德依に代りて監軍たり。まづ其鋒を受けしサクシン遊牧の民は警をキルギスに傳へ、キルギスはヂルガ河口ブルガリアの地に奔りて之を告ぐ。果して一二三七年蒙古の巴圖はブルガルの大都を火きてヂルガの茂林に入り、一巫二使を發してリアザン(赫阿匽、也烈贊、額里齊)に遣はして『若し平和を欲せば財物の十の一を納れよ』と曰はしむ。時にリアザンにプロンス

ク、コロムナ、莫斯科及ルームの三侯ありしが、驕然として對ふらく、『孤等死するを待ちて爾曹、能く悉く財物を得ん』と。斯くてリアザンはチェルニゴフ、さてはヴラヂミル太公の援助を待たず、蒙古と戰ひて敗れ諸將陣頭に死し、リアザン陷る。時に十二月下旬なり。蒙古乃進みてウラヂミルに向ひ、太公の一子をオカに破り、莫斯科を火き、クリアズマ川のヴラヂミルを圍む。時に太公イゴル二世は出でゝ援を北方に求めて在らず、二子城を守りて、上下男女悉く皆難に殉す。實に一二三八年二月にして、スズダル亦陷り、ロストフ、ヤロスラヴル以下太公領の十四邑悉く蒙古の兵燹に亡びたり。太公イゴルはノヴゴロド境なるシト川邊に陣し山河敵手に落ち宗室難に死すと聞き、三月七日蒙古軍を邀へ奮戰して屍を曝らし姪ワシルコは虜と爲りしも、巴圖に仕ふるを肯んぜずして刺し殺さる。蒙古既に太公領を降し、大軍トヱルを屠りトルヨクを取るに、向ふところ敵莫く、露人の頭劍光に從つて落つる恰ら野草の利鎌に斐らるゝに似たりと稱せられ、ノヴゴロド亦震駭せり。然も蒙古は沼澤欝林地利の便なきを以てノヴゴロドを衝かず、路を轉じて東南に向ひ、途上コゼルスクの小城を圍むこと四旬にして始めて陷れ、悉く男女老幼を屠りて南露西亞に出でたり。爲に大共和府は幸に兵火の慘を免るゝを得たりき。

然れども古都キエフは終に免れざりき。蒙古の南するや、ペレイアスラフを火き、チェルニゴフを陷れてキエフに逼る。キエフ太公ミハイル蒙古來と聞きて恐れ府城を捨て匈牙利に奔り、斯くと聞きしガリチのダニエロは代りてキエフを取らんと欲せしも亦蒙古の威を恐れて動かず。蒙古の莽賚扣(のち元の憲宗)は圖類の長子にして、巴圖の從弟なり、馬をドニエプル河岸に立てゝ水を隔てゝビザンチウム文明を以て飾りたるキエフの盛觀を望み、まづ使を遣はして降を勸む。般鑑遠からず、リアザン、ウラヂミルに在りと雖も、キエフは敢て降らず。巴圖乃之を圍む。城中ガリチのボヤルドにドミトリといふ者衆を指揮して防戰に力めしも、終に力屈して城陷り、『露西亞都邑の母』と稱へられし古都は蒙古の馬蹄に蹂躪せられ、堂塔殿宇燹火に亡び、空しく乞瓦綿客兒綿(キエフ大都)の名を蒙古の青史に留めき。(蒙古の露西亞侵畧の一條はカラムジンの史によりて河野氏の蒙古史に詳なれば、參照す可し。)

斯くて蒙古は波蘭、匈牙利に入りしかば歐洲諸國震駭し老弱男女擔架して遁れ、法王は基督教國に檄し、皇帝は列國に說き、波蘭の軍はリグニッツに頓り、チェヒのヤ

ロスラフはオルミュツに苦戰す。偶まー二四一年(宋淳祐元)冬太宗謂格德依殂落あ
りしかば、歐羅巴を侵掠せし蒙古の寇は東に退きしが、露西亞にてはヲリーニア、ガ
リチ諸より蒙古の敵ならず、ノヴゴロド以下西北地方を除くの外は悉く蒙古人の
風靡するところとなりき。故に歐羅巴に於ける蒙古征服の効は獨り露西亞に於
て見る可く、露西亞が獨り他の歐羅巴列國と發達を異にしたるは蒙古來寇の結果
一因を爲せりと謂ふ可し。而して露西亞が容易く蒙古の爲に屈せられしは二者
の情勢の懸隔太しきに在り。蒙古は素遊牧の行國にして行旅遷徙を意とせず、平
時と雖も征途に在るに異ならず、鐵騎を以て過る所を蹂躙す、千里驅軍毫も勞とせ
ず。況んや青吉斯汗不出世の雄あり一族の英武を以て其衆を動かす精妙、手足の
如く智勇並び用ひざるなく、新興の氣鋭く中央、西亞細亞の列國に捷つの餘威を以
てす。強盛の國民と雖も當り難し。飜りて露西亞を見れば割據爭鬪十百年、衰殘
の勢弱まりて、上に英明の主なく、下に同盟の民なく、加ふるに農民多く兵勇少く、歩
多く騎少きを以て、壯丁皆兵勇皆騎なる蒙古の來寇に對す。寡を以て衆に當り、弊
を以て鋭を拒がんとし、一俟破れ一伯降り、風を望んで潰ゆるに於て、豈馬蹄の塵た

らざらむや。屈辱二百年もとそのところ、また惟しむに價せざるなり。

二、蒙古の治法と影響

青吉斯汗の天下に馳騁して蒙古大帝國を起して逝くや、諸子を分封せしかば、帝
國は分れて蒙古本領、則後の元朝と、謂格德依汗國、察合台汗國、伊兒汗國、奇卜察克汗
國の五大地方と爲る。就中東南露西亞を羈繫せるは奇卜察克汗國にして、國祖卓
齊特より巴圖に傳へて一大國を爲し、東南露西亞の平定するや、ヂルガ河の下流に
薩萊を置きて寬何吉思海北一帶の地に號令す。薩萊は城廓の義にして、シルオル
ダ(金帳)國これなり。但しシル・オルダの民は獨り蒙古種のみならず、バチナク、ポロ
ヴチ、アトラスカン人の先たる土耳兒種、莽種等みな北配下に在り。素より此等の
諸汗國も始は蒙古の大汗、則元の正統の號令を奉ぜしが、太宗の後定宗庫裕克を經
て、憲宗莽哥扣一二五九年(宋開慶元)に殂落し、世祖呼必賚、阿里克布克と大汗の繼承
を爭ふに及び地方瓦解し奇卜察克汗國は大汗より自立したり。而も之よりさき
五年汗國創成の英主巴圖殂落して嗣主弱く、露西亞侯伯の克復の因兆早く此間に
萌したりき。

抑も蒙古の露西亞を降すや、其城池を夷げ、其男女を屠りて之をして慴服せしめしも、毫も新に施制するところなく、法令行政一に地方土着侯伯の舊に據るに任じて改更する所なし。則、スズダルにはアンドリウ・ボゴリウブスキ家、ガリチ、ヂリーニアにはダニエロ・ロマノヰチ家の君臨せるあり、チェルニゴフのオルゴヰチ家、ポロツクのログヴロド系また依稀として變ぜず。北はノヴゴロドの民君王を廢立する蒙古來寇前と異ならず、南は諸豪のキエフ太公の位を爭ふとまた已まず。蒙古諸汗はたゞ此地に主たるといふの外、毫も内政を改新せざりしと、なほ後世土耳其帝國のバルカン半島に於けるに似たるなり。今此征服者と被征服者が如何に關係して所謂金帳國をなしゝやに就きて少しく述ぶるところあらむ。

蒙古大汗の盛時に當りて東西亞歐の列國殆んど之に朝貢せざる莫く、縛達の哈利發、羅馬の法王、さては佛蘭西王の使節に至るまで帳下に朝し、憲宗莽賀扣の如きは聖路易王をして己を認めて世界一統の主と目せしめんと威喝せしかば、露西亞の諸豪侯伯は獨り金帳に朝するのみならず、また遠く亞細亞の廣野を横りて大汗の帳に朝貢したり。その路や千里荒涼、行者多くはかへらず。羅馬法王の使節プラヌス・カルピヌスはキルキスの野に渇死せしヤロスラフ臣下の骨を見たりといふ。カルピヌスはまた薩萊なる巴圖金帳の盛を說きて曰く、『此朝や衆多く觀壯なり。士衆六十萬中蒙古の衆十五萬、外兵四十五萬。金曜日に予は兩火列の間を導かれて帳に詣りしが幾多の拜を爲し門口に觸るゝなくして帳に入らしめらる。蓋し其俗火を以て諸汚を淨むと爲し、危難をも除くと爲せばなり。時に巴圖は一妃と玉座に在り、子弟宿將榻に憑り、餘衆悉く地上に座して男子は右に、女子は左に在り。伶人樂を奏して管絃洋々たる間、汗は諸將と金銀の杯を傾けて時を銷す。巴圖は容貌明快にして、下を遇する厚きも、なほ衆の畏服するところと爲る』と。以て金帳當時の盛を想見するに足る。況んや大汗の帳の更に壯偉盛大なるに於てをや。

カルピヌスは其地に定宗庫裕克の金工クームといふ者を見、ルブルキスは波斯金工キラウメといふ者に遇へり。大汗の帳にも、金帳にも幾多の泉貨を要し、蒙古の諸將寵臣、さては汗の母妃嬪妾に贈遺を爲さゞる可からず。從つて露西亞の侯伯等は互に競ひて擠排し讒誣して、苟くも迎合に力めしかば、其毒に中るものは無辜に死する勘からず。一二四六年薩萊の帳下に刺されたるチェル

ニゴフのミハイル、一三一九年に殺されしトヹルのミハイルの如き、皆此非命に斃れし者なり。この朝貢實に露西亞が蒙古に臣從を表するの第一たりき。

次に汗庭は民に口稅を課し、金錢又は毛皮を以て納めしめ、不納者は籍沒して奴婢と爲す。基督の商賈等此徵稅を請合ひ、汗の代理吏バスカクの保護を受けて重斂苛課を逞うせしかば、爲に民怨を買ひ亂禍を惹起せしとあり。一二六二年スヹダルの變、一二八四年クールスクの亂、一三一八年コロムナの蜂起、一三二七年トヹルの騷動等是なり。されば侯伯にして自領地方の徵稅を請合ひ、富を積み力を養ふ者生じき。莫斯科の起りしは實に此に由れり。露西亞はまた汗の爲に兵役を負擔し、一朝事あれば募に應じて起つ。一二七六年憲宗葬費扣がカウカス山の叛を討つ、やロストフ、ビエロチェルスク、ヤロスラヴル等の諸豪が軍に從ひしは其一例なり。更に甚しきは蒙古人を助けて諸豪相鬩ぐに至る。否、侯伯の相爭ふや汗の兵威を借りて敵を屠するに至る。一二八一年アレクサンドル・テヴスキの二子相鬩ぎし時、一二八四年クールスクのオルゴヴチ家の內訌の如き、以て例證と爲す可し。露西亞の侯伯蒙古の敍任を得、汗のヤルリクー(許可狀)なければ位を繼承する能はず。さればノヴゴロドのミハエルの如きはヤルリクーなきを以て民の拒むところと爲れり。露西亞の侯伯は汗の許可を經ざれば戎馬を動かす可からず。蒙古の使節、君王の詔書を奉じて至れば、露西亞の侯伯は徒步して之を迎へ、之に伏拜し、匹を布きて之を請じ貲金を以て之に贈遺し、跽きてヤルクリーを敬聽するを法と爲す。是蒙古に羈束せらるゝ露西亞の政治的繫縛なり。

更に顧りて社會的に蒙古、露西亞の關係を見んか。蒙古は夙く露人の饒勇を認めしかば、之を降すに及びて婚姻を通ずるあり。ビエロチェルスクの君が汗家に娶り、リャザンの主がノガイ汗の公主に尙して、薩萊に宮邸を賜ひたる、十四世紀のはじめ、イゴル太公が月即別汗の妹を妃としたる等は其適例なり。爾つて年處を經るまゝに蒙古種亦原の素朴なる野人にあらず、罪て自壞喪せし城市の迹に新邑を築き、漸く奢侈に流れ壯麗を飾り、騷人を保護するに至りて蘖日の氣風一變せり。故に或は蒙古の征略が露西亞發達の上に及ぼせる影響を疑ひて、天然の影響と比對す可くもあらずと爲し、或は露西亞人文の西歐の發展と異なるは主として蒙古の征略に因せず、寧ろビザンチオン文明の特象變化せざるに由ると爲すあり。蓋

し蒙古露西亞の貴種將門の通婚は一般人種の混同を來すに至らず、希臘文明の繼承は自ら東風の模型を造りしならむも、之を以て蒙古の征服の影響を輕忽に附すべからず。予は寧ろカラムジンが『今日と雖もわが國情にはなほ蒙古の餘影を脫する能はず』といふに同せむと欲す。波蘭、匈牙利人の眼を驚かしゝガリチェのダニエロが騎衆の東方粧は假令一時のものたりとも、なほ蒙古の勢力が一時東南露西亞の風を化せしは疑を容れず。また假令一年ビザンチオン文明とスラヴ本來相との露西亞の根幹を爲すあるも莫斯科の太公が專制政治の基を開きしは蒙古諸汗の餘風に出で、宗教教會の興隆は蒙古がネストル教、麻訶米教等の保護に倣ひしと爲さゞらんや。元の世宗呼必賚も基督教の寺刹を置き更生祭の式を擧げ、一二六一年薩萊の金帳にては教會を設け、正教の卑渉領を置き、一三一三年月即別汗は教會の特權を保證す可しと宣せり。既に此等の事實あり。專制君主政の原を遠く希臘帝國に托せずとも、近く例を黃金帳殿に採り得可く、寬袖長裙の俗は希臘の故樣を傳へずとも、直に蒙古の風を移し得可く、宗教に對するも亦然りとせば、何ぞ蒙古征服の影響を排するの要あらむ。蒙古の威を保つ久しからず、後露西亞文明の皮想は西歐に接せしと雖も、而も今にして尙其實相距る遠きを想はゞ、スラヴは遂に純乎たる歐羅巴の一員にあらず。予は遂に蒙古の征服を影響なしとする一派史家の論には贊する能はざるなり。

三、アレキサンデル・ネヴスキ

蒙古の兵を歐羅巴に用うる前後十八年、波蘭、匈牙利を蹂躙し、露西亞を征服したりしが、巴圖の殁して後黃金帳殿は大汗より自立し、露西亞の侯伯はまた遠く亞細亞の野を橫りて朔北に朝するを用ひず、薩萊汗庭の勢また漸く傾きて侯伯自立の運を促がし、一二六二年ノガイの叛旗を樹つるに及びて形勢既に動けり。此際に方りて露西亞侯伯中の人物としてはアレキサンデル・ネヴスキーを擧ぐ可し。

アレクサンデル・ネヴスキは故イゴル太公の姪にして、ヤロスラフの子なり。一二三八年太公の蒙古と戰ひて敗死するや、弟ヤロスラフはスズダルに入り、殘黽を修め遺衆を招ぎ、薩萊に朝して巴圖の殊遇を受け太公の號を繼ぎ、親ら東の方元の太宗謁格德依に朝せしが、歸途に斃じ、子アンドラスはスズダルを繼ぎ、アレキサンデルはノヴゴロドに治す。時に一二四六年なり。之よりさきノヴゴロドはスカ

ンヂナギア人と子ヴ河、芬蘭灣の地を爭ひ、土人を助けて羅甸派基督教に抗敵せしかば、羅馬法王グレゴリオ九世は十字軍を發し瑞典王子之に將としてノヴゴロドに向ふ。時にアレクサンデルは既にノヴゴロドに君たりしが、スズダルの援軍至るを待たず、敵を子ヴ河の一支流イジョラに擊破し、勇闘の蹟は傳說に遺り、身は子ヴスキの尊稱を得たり。實に一二四〇年の事に屬す。しかもノヴゴロド府民の容るゝ所とならず、一たび外に退きしが、日耳曼の教門武士がプスコフを取り、コポリエに城きノヴゴロドの商賈を掠略するに及び、アレキサンデルは兵勇を募りて之と戰ひ、一二四二年大に之をペイプス湖の氷上に擊破し、その四百人を斬る。之を氷上の戰と曰ふ。是に至り父の薨去に遭ひてノヴゴロドに主たりしが、羅馬法王は公の父ヤロスラフ死に臨みて聖彼得の王位に服せんことを願ひしとの訛傳を信じ、使を發し來りてアレキサンデルに特宣を賜ひたりき。

然りと雖も、アレキサンデルの偉功は西北の外敵を攘ひて邊患を除きしにあらず、寧ろ東南の汗庭に屈して社稷を完うせし苦衷に在りて存す。武强善闘は亂世の難しとせざるところなるも、衆憤を抑へて身を屈するは識者に非れば能はず。

スズダルのアンドラスは徒に蒙古の怒を惹きて出奔せしも、アレキサンデルは汗の招に應じて薩萊に朝して其殊遇を受け、命によりてアンドラスと與に大汗庫裕克(元の定宗)の廷に詣り謁し、甲はウラヂミルを乙はノヴゴロドの領土を安堵し、一二五七年國に還るを得たり。然るに一二六〇年に至りて一難事は起りぬ。ベルカイ汗より露西亞の治政を托せられしウーラヂチはノヴゴロドの口籍を査し貢賦を課せんとせしかば、領內の民蜂起してボサドニクを殺し、公子ワシリも父公の卑屈を憤りてプスコフに奔る。アレキサンデル乃慰撫し虛喝し百方手を盡くして動亂を鎭めて調査を行はしめしが、二年を經てウラヂミル、スズダル、ロストフ等の民蒙古の徵租に憤起し擾亂百出せんとす。ベルカイ汗乃悉く侯伯諸豪を薩萊に召し虛に乘じて亂を伐たんとせしかば、アレキサンデルは以て露西亞の危機と爲し身を挺して汗に至り說き、留まること一年にして始めて釋るさる。是によりて社稷民人は蒙古の鋒鏑を免れしも、太公は歸りてウラヂミルに達せずして薨ぜしかば、時人悲みて『露西亞の日落ちたり』と絕叫せりとぞ。太公父子みな蒙古よりの歸途に逝きしかば或は恐くは其毒に中りしならむと爲す者あり。然も二人

者の苦心焦慮と征旅風土の變とに由り健康を損して途上に殪れたりとの穏當なる説あり。その何れに出づるやは深く究むるに足らず。要するにアレキサンデルの如きは智勇を兼ね、將略と治才と並び長ぜし一傑と爲す可く、その行蹟は以て當世露西亞侯伯の地歩如何を明にする的例と爲す可し。

四、莫斯科の興起

露西亞侯伯の太公を爭ふや既に久し。しかも蒙古の征服を蒙りて後、繼承相續は汗の許可に由らざる可からず、抗爭の勝敗また汗の兵力に左右せらるゝを以て、鬪爭漸く迹を收めて擠排小術策行はれ、アレキサンデル・ネヴスキの後五十年間殆んど見る可きの人物と事蹟と無し。而して莫斯科は此間に發祥し形勝に據りてトヴエルと衡を爭ひ、恰も西露西亞に勃興せるヰルナを中心とせるリトワニアと東西對峙の基を開きたり。

莫斯科はアレキサンデル・ネヴスキの弟ミハイルを祖としトヴエル家は其弟ヤロスラフに始まりぬ。莫斯科の始めて史乘に見はれたるは一二四七年なり。口碑傳へいふ、ウラヂミル・モノマルコスの子太公イゴル・ドルゴルキの時モスクワ川の采邑を領せしステファノ・クッコは太公の怒に觸れ采地を沒せられ此地に斬られしが、太公其邑を愛し川畔に一市城を置きて莫斯科といふ、今の、クレムリンの建てる高臺は則其遺址なりと。しかも寒村僻邑史に載らず、蒙古侵略の日此邑亦甚に罹りしとアレキサンデル・ネヴスキの弟リトワニア人と戰ひて此地に敗死せしを傳ふる耳。アレキサンデルの子ダニエロ此寒邑の主と爲り、ペレイアスラウル・リエスキとコロムナを併せ領せしが、一三〇三年に死し、弟イゴル・ダニエロヰチ、イワン・カリタ相つぎて立ち、四十年間トヴエルと爭衡するに及び、莫斯科の史始めて稍見る可し。

一三〇四年莫斯科の主ダニエロの長兄スズダル公アンドラス逝くや、從弟トヴエル公ミハイルは宗室の長者を以て繼承を要求し、ウラヂミル、ノヴゴロト認めて太公に推し、薩萊の托克托汗亦その相續を許可せしに、故アンドラスの季弟(或は姪と爲す)たる莫斯科のイゴル起ちて相續を爭ふ。ミハイルよりして兵を發して莫斯科を圍むもの二度、イゴル屈し勞略定まる。然るに托克托汗殂落し、月即別汗立ちしを見て、イゴルは新汗の意を迎へ汗の妹ロンヂカを妻と爲し、太公たる許可と、蒙

古兵とを得てかへりてトエルの地を使す。太公ミハイル大に怒り撃て之を破り、イゴルの夫人ロンチァカ、弟ボリス、汗の將カヴガデ等を虜にす。幾ならずしてロンチャカはトエルに逝く。イゴル乃金帳に朝し、ロンチャカの死はミハイルの非殺に出でたりと讒し、汗をしてミハイルを徴し幽せしめ、更に厚く汗の左右に賄ひカヴガデと謀りて遂にミハイルを殺す。相傳ふミハイルの屍腐らざる聖徒の如く、後銀棺に收めてトエルの伽藍に納め聖公の號を贈ると。時に一三一九年にしてイゴルは莫斯科スヅダル、ノヴゴロドに君臨して太公の位を纂ひしも、昌榮久しからず、報復忽至り、一三二五年汗の貢獻を抑留せしを以て金帳に徴され、故ミハイルの遺子ドミトリと對決して爲に刺殺され、公の興黨は直ちにドミトリを誅して僅に怨を報じたり。

ドミトリの誅せらるゝや、其弟アレキサンデルはウラヂミルに據りて父兄の後を興さんとせしも、才略志に伴はず、汗のバスカクを襲ひて火を放ちしかば、月即別汗之を怒り、莫斯科のイゴルの弟イワン・カリタは汗に請ひ、蒙古兵五萬を借りて來り攻む。アレキサンデル之を聞きて諸弟と與にプスコフに出奔し、トエル以下諸邑敢手に落ち、リアサンの君亦月即別に殺されしかば、一三二八年イワン太公と爲りて兄の後を繼ぎて金帳に朝し、アレキサンデルの少弟コンスタンチンを立てトエルの祀を存せしむ。月即別汗乃太公をしてアレキサンデルを徴さしめしも、プスコフの民死を以て之を拒み、太公兵力を以て之を嚇せしも寸毫も屈せず。アレキサンデル之を憂ひて一三二九年リトワニアに奔りてゲヂミンに投ぜしも安んぜず、また歸りて金帳に朝して罪を請ひて赦さる。此間に太公は女を以てコンスタンチンに嫁しトエルの內政を左右せしがアレキサンデル歸りしを見て畏れ之を汗に譖す。汗乃アレキサンデル父子を徴して之を殺す。是に於てトエルのコンスタンチン君臣は太く太公を畏れ、リアザン、スヅダルまた旗下に屈しノヴゴロドは好を太公に通ずると共に、リトワニアに連りて後援と爲す。太公はまたウーグリチ、ガリチ、ピエロチェルスク及びコストロマ、ウラヂミル、ロストフ附近の地を買收して領土を拓き、莫斯科を以て露西亞の都城と爲してウラヂミルに代へんが爲に宗教的中心を此に遷し、本山を創め、クレムリンに壯麗なる伽藍を建つ。ペチェルスキの伽藍を以て有名なりし古露西亞の首都キエフは斯る擾亂の間にリトワニ

アに陷り政治上太公の都城たりしウラヂミルは今や莫斯科の爲に其實を奪はれぬ。イワンは實に莫斯科二百七十年の基を開き、莫斯科はイワンに至りて始めて地歩を露西亞史上に占むと謂つ可し。蓋し莫斯科の地たるワラヂミル、トヱルの間を扼するを以て、トヱルと角逐するに於て最利あり。加ふるにイワンはカリタ(嚢)の稱を得しまでに、能く財寶を以て金帳の内外を動かし、その威武を借りて侯伯に臨みしかば終に功を奏せり。而もこれ露西亞統一の萠芽を發するものにして、莫斯科の興隆は輕々看過す可からず。

一三四一年莫斯科のイワン・カリタ薨ずるや、莫斯科家に平ならざる諸豪、或はトヱルのコンスタンチンを、或はスズダルのコンスタンを擁してイワンの子シメオンと太公の繼嗣を爭ひ裁を金帳汗に請ふ。シメオン蒙古に賂ひて敵黨を排し、ウラヂミルの伽藍に太公の位に即き、惴々焉として蒙古の前に屈從し傲然として、露西亞侯伯の上に誇り、始めて『全露太公』と稱せしも、リトワニアの爲に自領モサイスクを圍まれ、世人の爲に傲公(ゴルヂイ)の誹を受けぬ。然も傲公の世にクレムリンの昇天寺、聖ミハイル寺、化身寺、は新しく粧飾せられ、紙は始めて用ひられぬ。然るに此頃黑死病天下に蔓延して露西亞に入り、シメオン傲公、その夫人一族を始とし、本山主長テオグノステス、ノヴゴロド大卑渉バシリ等貴族高僧皆免れず。國中騷然魔巫を招き符咒を用ひて病を攘ひ災を拂ふに力めき。一三五三年シメオン子なきを以て弟イワン二世立ちしも優柔にして治道擧らず、内憂外患交も至り、六年の在位寧日なかりき。之に反して强盛莫斯科を厭し殆んど之に代らんとせしはリトワニアなり。請ふ少しく西露西亞の狀を叙して波蘭との關係に及ばむ。

五、西露西亞と波蘭

莫斯科の僻邑興りてウラヂミルに代り東露西亞に統一の傾向を生ずるや、西露西の諸部は漸くキルナを中心として一國を爲して之と相對するに至る。事態主として波蘭史に關するも、一面また露西亞に關知するを以て、その要點を略叙せむ。

西はリトワニアの諸狄、テウトニ、リヂニア武士の攻略を蒙り、東は露西亞の侯伯蒙古に征服せらるゝ時、ニエメンの沼澤、茂林深きところに、聖火(ヅニチ)を焚きて雷神ペルクンを祀り、ヴイデロトの上にクリヰト、クリヰトの上にクリヰ・クリヱイトの僧官僧都を戴きて自立せるヅムード、リトワニア本部の幾部落衆あり。露西亞コルシ、

セミガリ、レッツ諸狄の教門武士に迫服せらるゝや、餘衆奔りて此地に投じ、衆多く勢漸く大なるに及び、一酋ミンドヲグといふ者兄弟子姪を剪除して獨自此地の君と爲り、適ま蒙古の征略に勞れたる露西亞侯伯の領土を侵してグロドノ、ノヲグロデクを奪ふ。しかもアレグサンデル・子ヴスキ、ヲリーニアのダニエロ寺あるを以て、ミンドヲク梟肆を逞うする能はず、遙に羅馬法王に通じてその使節を迎へ洗禮を享けてリトワニア王と稱す。時に一二五二年なり。而も幾ならずして洗禮を淨めて國教に復し、四方を剽略して志を肆にせしが、一二六三年刺客の手に殪れて後リトワニアは紛亂の衢となるもの五十年。十四世紀のはじめゲヂミン出づるに及びて此地復興れり。

南露西亞はアレキサンデル・ネヴスキの後人物の見る可きなく、蒙古金帳の配下に屏息し分崩して十三世紀を終りて十四世紀に入り莫斯科トヱルの骨肉相戕ひ報復交も踵ぐ。リトワニアのゲヂミンは其虚に乘じてチェルニゴフを奪ひ、一三二一年にはウラヂミル城下に露蒙連合軍を破りて、全ヲリーニアを併せ、またキエフを陷れたり。洵にキエフは露西亞の古都、太公の本治たりしに、四方騷擾の間リトワニア人の手に落ちて、而も其年をだも詳にせざるに至りては、當時の露西亞が如何に衰亂の狀に在りしかを知るに足らむ。而して爾後四百年キエフは露西亞に復せざりき。想ふに打續く內亂に苦み蒙古の重歛に惱みし露西亞の諸邑は、ゲヂミンが寬容、制規を尊重し正教を擁護するを見て、風を望み門を開きて之に降りしならむ。トヱルのアレキサンデルは莫斯科に迫まられて來投し、ノヴゴロドまた莫斯科の威逼を畏れゲヂミンの子ナリモンドを迎へて主とし、イングリア、カレリアを與へ、ゲヂミシも亦征略の名を正うせんとてウラヂミル家と連り、諸子をして正教を奉ぜしめ、都城ヰルナ及びノヲグロデクに希臘教會を建置し、北は普魯西、リヲニアの教兵を拒ぎながら、一面には羅馬法王の使を通じて好を修め、日耳曼の工匠を招聘し、リガ、ハンサ同盟市の特權を許可し、茲にリトワニアの國礎を定めたり。

一三四〇年ゲヂミン殂してのち、諸子地方に割據して一時爭鬩の相ありしも、一子オルゲルトは弟ケツートと與に諸弟を屈してまた領土を一統し、恰も莫斯科のイソン裘公(カリタ)逝きて其子シメオン傲公の繼承せると時を同うして、東西に對峙す。よりてまづ弟ナリモンドを奉ぜるノヴゴロドを伐ち、地を東南に拓きては殆んど

ドニエプル河谷を略して黒海の濱に及び、子アンドラスをプスコフの主と爲して其地方を掠め、一三四一年にはシメオン傀公の直領モザイクを圍み、莫斯科の對敵たるトヹルの公主ユリアナを娶りて莫斯科と角逐し、東露西亞を併呑せんとす。一三五三年シメオン傀公黒死病に遘れ、弟イワン二世(溫公)、札尼別汗の封をうけて太公となりしも優柔にして父兄の器器なく、リアザンのオレグは太公の地を荒らし將を辱しめノヴゴロドの民は太公と斷ちてスズダルのコンスタンチンに歸すれども、禁ずる能はず。オルゲルト亦此に乘じてルエフを奪ひ、アンドラスはプスコフを威嚇す。斯くて莫斯科太公の威令地に墜つること六年。一三五九年に至りイワン溫公薨ずるや父兄二世が經營最つとめたる事功一朝にして空しく、スズダルのドミトリ金帳汗の許可を得てウラヂミルに入りて太公と爲る。而もオルゲルトは此虚に乘ずる能はず、莫斯科のドミトリ・ドンスコイが英武の資を以て東露西亞に號令するに及び、義兄弟トヹル侯ミハイルを助けて三び(一三六八、一三七一、一三七二)莫斯科を攻めクレムリンに及びまた金帳汗の勢威傾くを見て一三六八年その兵を下ドニエプルに破りしも春秋既に高く、職を愼みて危を避けしかば

安進せず。想ふにオルゲルトをして尙年壯ならしめば東露西亞の形勢一轉せしや疑を容れじ。而も事此に至らず。加ふるに其後を嗣ひでヂリーニアを爭ひ希臘正教を壓して羅甸教會の勢力扶植に力むる波蘭と教門武士とはオルゲルトが東隣經營を制肘せしや多大ならむ。莫遽オルゲルト能く父の業を墜さず、其志を紹ぎたりと謂ふ可し。不幸にして父の失策をもつぎ、地を子弟に分封せしかば、その孤するや內訌起り子ヤゲイロは叔父ケスツートを殺し諸弟を逐ひて始めて位を得たり。實に一三七七年なり。

此に至るまでなりトワニアの盛衰はなほ露西亞古史の一部たり。然るに今や時局の一轉は西露西亞を轉じて波蘭史上のものたらしめんとす。始め希臘正教は露西亞方面より、加特力教派は波蘭方面より流布弘通してリトワニアに入らんとするや、リトワニア人は端なく教門武士と撞爭し、オルゲルトの世國都キルナの民蜂起してフランチェスコ教徒を害し、加ふるにリトワニアの征服地は多く露西亞地たりしため、宗教、用語並に、露西亞の感化を受け、白露語は官話と爲り、希臘正教は特に國教たらんとせり。さばれ事態の轉局は不測の點より起る。波蘭王ルイ殂

して男子無く公主ヘドヰガを遺すや、國内の貴族は邊境の兵禍を巳めん爲に、加特力教の細徒はリトワニアを羅甸教會の領下に置せん爲に、與に公主にリトワニア王と婚せんとを勸め、議遂に成る。一三八六年ヤゲイロは波蘭國都クラカウに幸し、洗禮を享け王位に即き國中に改宗を令し、雷神ペルクンの像を碎し、ヰルナ城内の聖火を消し、聖蛇を殺し、靈木を斫りしは、恰もウラヂミル太公が改宗當時の狀に似たり。然れども國中の民なほ古來の神敎を墨守する者尠からず、希臘正敎の徒と合して羅甸敎派に反抗せんと欲し、故ケスツートの遺子ボトヴトを奉じて將としヰルナに波蘭の守兵を圍むと二度。ヤゲイロ王職に倦み、一三九二年ボトウドを封じてリトワニア太公と爲して局を結びぬ。

六、莫斯科リトワニアの雄主

リトワニア公并トウド即位の年三十年、莫斯科に英主ドミトリ・ドンスコイ出でゝ大に莫斯科の爲に武を宣ぶ。ドミトリはイワン溫公の子にして、父の逝くや尚幼、聖アレキシスの補佐を受けて人と爲り、十二歲にしてウラジミル公たるスズダルのドミトリを敵とし、金帳汗に訟ふ。此時巴圖狙して以來既に百餘年を經、黃金帳の光また曩日の如くならず、內訌相尋で起り威令行はれず。嚮にナウルズ汗は太公をスズダルに許可せしが、此に至りムラト汗はママイの爲に苦しめられしも、なほ薩萊に在りてドミトリ・イワノヰチに許すに太公の號を以てす。時に一三六三年なり。之を見しスズダルのドミトリは直に金帳に至りムラト汗に逼りて前令を翻へさしめしも、一び薩萊に之きて其內情を知りしドミトリ・イワノヰチは復汗を恐れず、兵力を以てウラヂミルを爭ひ、スズダルのドミトリを以てニヅニ・ノヴゴロドの主と爲し其女エヴドキシアを納れて妃と爲して和　誹じ、またスタロッーブ・ガリチの地を收め、リトワニア王オルゲルトの駙馬たる從弟ウラヂミルと和し、トヹルのミハイルと戰ひてはオルゲルト王の侵略を蒙むるに至れり。此時リトワニアの兵莫斯科に迫りしもドミトリ避けて決戰せず。幾もなくしてオルゲルトの殂するやドミトリはトヹルを圍みてミハイルを降して約束を奉ずるを誓はしむ。次でドミトリはリアザンのオレグを屈す。もしリトワニアにしてなほトヹルを援けなば、リアザン恐くば蒙古汗の後援を得たらむに、莫斯科太公破竹の勢を以て四隣を擊破するに及びて諸豪皆之に向ひ、復傾倒の運に際せる金帳汗室

を憚らず。リアザンのオレグはムールザ・トガイを蔑にし、スズダルのドミトリはブラト・チムルを殺し、ドミトリ太公は喀山を征して蒙古の二君を服し、一三七八年ママイの將をヲジァ川に破りて、揚言して曰く、『渠等の世は去れり。神は吾曹の上に在り』と。五十年前には汗の命を蔑にせしトヱル家は忽にして其太公を奪はれしが、今や實に時世は一轉せり。汗廷の弱きを認めし露西亞の諸豪は機を見、將を得て起たんとす。ドミトリ此時に出で諸豪を連ねて蒙古を攘はんとす、洵に時と人とを得たりといふ可し。

侯伯の跳梁を見しママイ汗は赫怒して、まづリアザンを伐ちてオレグを奔らし蒙古、土耳古、ポロプチ(奇卜察克)、チェルケス、カウカスの猶太、さては黑海の濱に移植せるゼノワ人まで悉く領内の衆を募りて征討の備を修むると二年、オレグ畏れて新恨を捨て陽に太公に連りながら、尙陰に蒙古のママイ、リトワニアのヤグイロに通ず。若し二强並び起たば太公は累卵の危境に陷らむ。而も天太公をすてず、四方の侯伯募に應じ兵を率てクレムリンに會する者陸續絶えず、衆十餘萬に上るといふ。乃進んでドン河を渡り舟を毀ちて死を決し、ツラの南方ネプリアドヴ川畔のクーリコヲ・ポレ(山鵜野)にて大に蒙古軍と戰ひ、太公の軍殆んど破れしも辛うじて捷つ。戰已みて太公見えず、之を索めて染血の破甲を貫きて悶絶せるを發見せりと。以て戰鬪の甚激なりしを推想す可く、此一戰によりてドミトリはドンスコイの稱を博し得たり。時に一三八〇年なり。當時緇流の筆を載せて此戰を詠ぜしもの三一は通篇事實の差謬に滿たされ、一は全部諷詠の詩、唯『ドミトリ・イワノヰチ公とママイの軍物語』と題する一詩ありて當時の戰況を摸索するを得と雖も、奇古の一詩素より悉く信ず可からざるなり。

山鵜野(クーリコヲポレ)の決戰は侯伯を連ねて金帳汗の威を挫けり。露西亞の爲に賀す可きが如きも、しかもドンスコイの捷利の武はネヴスキの屈從の智に及ばず。よく幾時も蒙古を攘ひ得ずして、忽に其報復を受けざるを得ざりき。太公侯伯は夢にだも知らじ、是より先青吉斯汗の英武を得て其偉圖を再びせんとする特穆爾の中央亞細亞に崛起して、蒲華、伊闌、小亞細亞を風靡し、蹂躪して南露西亞の門外また蒙古の鐵騎至れるを。特穆爾一方の將トクタミシュオグラン汗は金帳のママイ汗を殺し、檄を飛ばして露西亞の諸侯伯を招きしも、ドミトリ拒みて應ぜず。一三八二年ト

クタミシュ汗大衆を發して來り莫斯科を陷れ、火を放ちて之を焚き二萬四千人を屠りて去る。ドミトリは策の出づる所を知らず、出でゝコストロマに兵を募りしが、かへりて殘壘伏屍を見て、蒙古を破りし勳空しく祖先の屈從にだも及ばざるを哭せしとかや。是より後太公はオレグを伐ち、トエルを征し、またリトワニアと通ぜるノヴゴロドを屈し、領土は東北露西亞諸豪中の第一に位し、覇を侯伯の間に稱せしが、一三八九年に薨じ、子ワシリ父につぎて莫斯科ヴラヂミル太公とはなりぬ。

今や莫斯科とウラヂミルとはともに太公の主都と爲り、前者の實は後者の名に代はらんとす。若し夫れノヴゴロドに至りては昔ヤロスラフ太公の下せし特權を持して自主を擅ぶの權ありと爲し、トエルのアレキサンデル敗れて後は定主なきも尚リトワニアに賴りて莫斯科太公の羈束を脫せんとす。ワシリ父の後を承くるや、一三九二年薩萊に朝しトクタミシュ汗に貢獻してムールム、ニヅニ・ノヴゴロド、スズダル三地の領有許可狀を贖ひ、汗の使者を伴ひてニヅニに至り、其主ボリスを廢めてニヅニ、スズダルを收め、翌年ノヴゴロドの民蜂起するや兵を發して遂に之を降したり。然るに薩萊のトクタミシュ汗は特穆爾の恩に叛きて薩末鞬を侵し

しかば、特穆爾赫怒し、北征して札牙黑河を渡り、一三九四年大にトクタミシュ汗をテルク河に破る。トクタミシュ乃リトワニアに奔りて太公ヴトトに投ず。特穆爾進みてドン河上のエレッを屠り、莫斯科を震駭せしめ、薩萊、アストラカンを燒き、トクタミシュの從弟コリジャイクを立てゝ奇ト察克汗と爲して師を班へす。此一征の結果久しく動搖せし金帳汗の地は殆んど瓦解せんとするを見て、猛然として起ちて其地を爭ふ者あり。是をリトワニア太公ヴトトと爲す。

一三九二年リトワニアのヤゲイロが波闌王と爲り、從弟ヴトトをリトワニア太公に封ぜしとは上既に述しが如し。ヴトトは實に莫斯科太公ワシリの舅にして勇略あり。即位の五年スモレンスクのスヴアトスラフを斬りて其地を奪ひ、境をリアザン、スズダルに接せしかば、若し勢に乘じて進まば莫斯科擧く可く、東露西亞風を臨みて解けしやも知る可からず。しかも其志此に在らず、薩萊を逐はれしトクタミシュ汗を納れ金帳汗の領土を爭はんとするに在り。乃大に兵を領内に召し援を波闌王ヤゲイロに求め、露西亞の士、トクタミシュの蒙古兵、テウトニ武士の鐵騎等を會し特穆爾の將エヂゲルと大にドニエプル河の支流デルスクラに戰ひ

しが、雄圖空しく軍潰え敗る。時に一三九九年なり。莫斯科太公ヴシリはリトワニアを畏るゝと蒙古より太しく、蒙古若し來るも貢賦を納るれば足れり、リトワニア至れば露西亞存亡の秋なりと爲しゝかば、是に至り一は破れ一は勞れしを見て稍意を安んじ、且蒙古の諸汗爭鬪して正圍を別たざるを以て貢賦を納れず。エヂゲルは既にボトヴトを破りしかば、進んでリトワニアを伐つと揚言して兵を會し、急に莫斯科を擊つ。ヴシリ太公乃父の轍を踏み、自コストロマに退き、ウラヂミルをして留守せしむ。エヂゲル府城を圍み火を縱ちて市邑を焚きしも、その主ブーラトが敵の爲に製はれんを畏れ、太公を虐喝して、三千留の償金を收めて圍を解きてかへる。これ一四〇八年の變なり。而も蒙古退きしも更に莫斯科の患たるはボトヴト太公にして、公はノヴゴロドを煽搖し、プスコフに太公の號を冒し、スモレンスクを併せ、トヴエルのミハイルを助けて莫斯科に抗せしめ、遂に莫斯科を侵すと三度に及びき。だゞリトワニア、莫斯科ともに外敵の邊を窺ふを恐るれば、雌雄を一擧に決するに至らず。此年和を約してウーグラ河を以て兩公國の境界と定め、スモレンスクはリトワニアに、コゼルスクは莫斯科に屬せしめき。蒙古に破れしも莫斯科を嚇し得しボトヴト太公は、更に轉じてテウトニ武士團と戰ひ、一四一〇年大に之をタンネシベルグに擊破し、團長以下教門武士六百、士衆四千を斬り、ジュムード地方を併す。西露西亞の諸豪多く戰に與り就中スモンスク兵殊功を建てたりと雖も、事主として波蘭史に關するを以て茲に詳說せず。後三年ボトヴト太公は波蘭王ヤゲイロとホロドロに會して、領内の加特力敎徒をして波蘭人と同權を得て與に國會に參するの權を享けしめまた領内の正敎徒が莫斯科敎長の下に屬するを憂ひて、分離をコンスタンチノプルの敎主に求め、議納れられざるや恐にキエフ敎長を置きて莫斯科と對立せしむ。此間にヴシリ太公は地をドキナ河上に拓き、弟をボアトカに封じ、リアザン公を屈して父子の禮を乘らしめオカ河を以て境と定め、トヴエル公イワンと約を訂し女を希臘皇室に納れて國礎を鞏む。一四二五年ヴシリ太公殂し子ヴシリ盲公立つ　實にボトヴト太公の外孫なり。時にボトヴト齡已に八旬に近く、在位三十餘年の間にリトワニアの威名をして九鼎の重を加へしめ、一四二九年獨逸皇帝シギスモンドと會見してリトワニア王に封ぜらるゝの約を得しかば、孫ヴシリ太公は莫斯科敎長フォチウス、トヴエル、リアザン兩公と至

り會し、波蘭王ヤゲイロ、哥里米汗、普魯西太公、リヂニア君、さては希臘皇室の使節も亦至りトロキ、ヰルナに盛燕を張り、日に牛七百、羊千四百を屠りて即位を祝せしに、圖らざりき、波蘭人は密に羅馬法王と謀りて封冊を妨げ、王笏冕冠を齎らさんとせしシギスモンドの大使は抑留の命を蒙りぬ。八旬の老雄志望を一簣に缺き、怏々病を獲て一四三〇年幽界の客と爲りぬ。

老雄ギトヴト逝きてリトワニアの盛亦回へらず、七十年を經て國土を擧げて波蘭王の手に歸せしが、莫斯科も亦ドンスコイ家二十年の內訌一時太公國の發展を障へき。ヴシリ盲公の父の後を承くるや、叔父イゴル之を爭ひて決せず、一四三一年に至りて金帳汗ツールー・ムハメッドに訟ふ。莫新科の臣にヴセヲロツキといふ者、巧言を以て汗の意を迎合し、爲に勝は盲公に歸せしかば、公は其功を嘉し、其女を納るゝを約す。然るに公の母ソフィア(ギトヴト太公の女)之を拒み、公をしてウラヂミルの女を娶るを約せしめしにぞ、ヴセヲロツキは去りてイゴルを煽搖す。偶ま太公の大婚儀に列せしイゴルの二子はソフィアの爲に辱められ、歸りて父に訴へしかば、イゴル意を決し兵を擧げ、一四三三年太公を虜にして自之に代り、進んでノヴゴロドを攻めて暴に薨ず。二子父の志をつぎてまたヴシリと爭ひ、兄ヴシリは兩眼を抉せられ、弟ケミアカはヴシリ太公と爭ふこと十年にして一四四六年その莫斯科太公の位を簒ひその眼を抉りて兄の怨を報ず。公室の爭鬩十餘年に亘り、國內亂れて麻の如く外寇邊を侵し蒙古隊を編みて州縣を橫行し、火を縱ち城を屠り公威毫も行はれず。然も莫斯科の民は公室を思ふこと厚く、ケミアカの外敵を征するや、忽蜂起してヴシリを迎へ、ケミアカは敗れて一四五〇年ノヴゴロドに奔り、後三年にして其地に死せり。

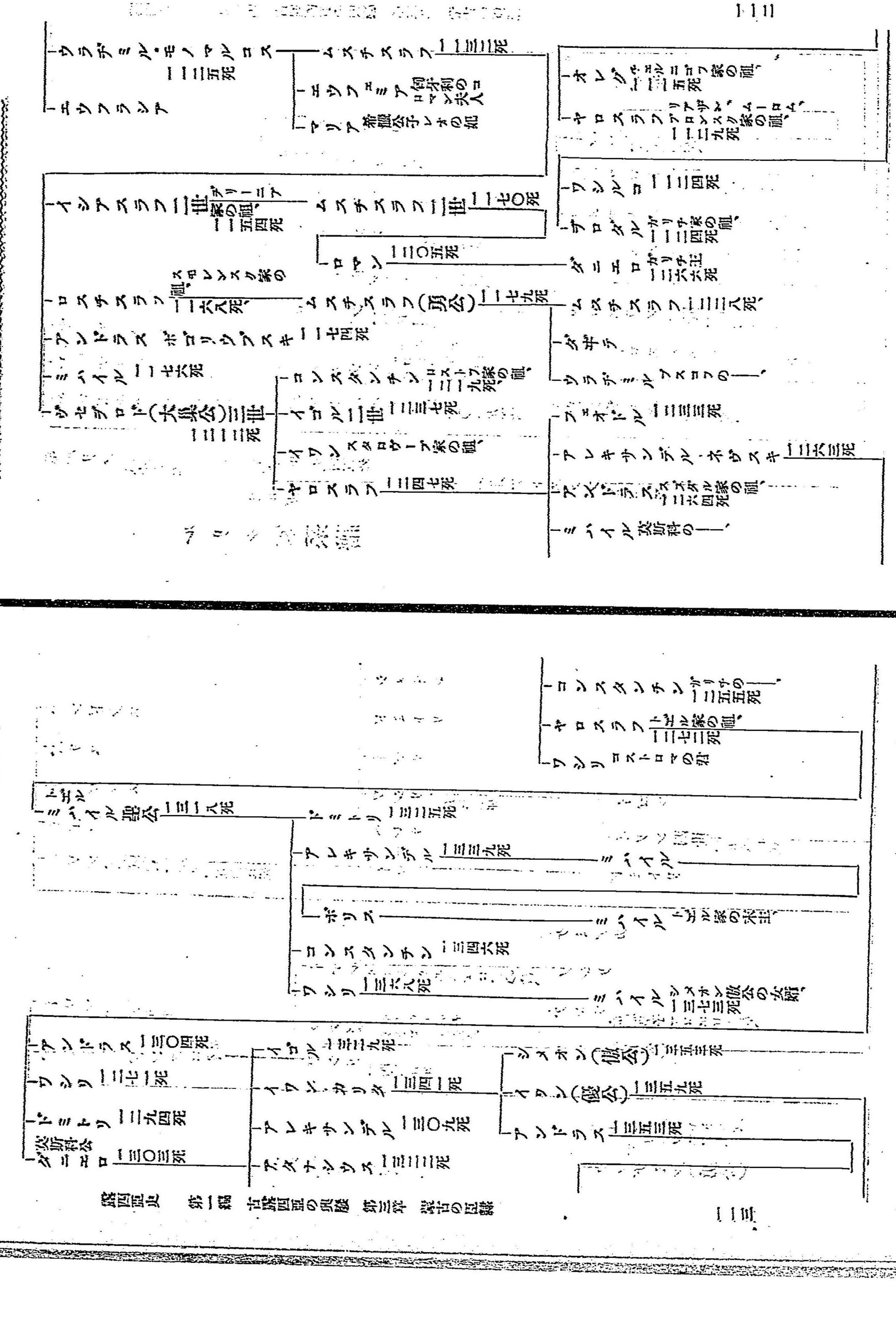
斯くの如く公家の內亂二十年、ヴシリは盲公の號を得て東露西亞爲に動搖せしも、禍亂一び去るや太公は銳意父祖の業を成すに力めき。則ノヴゴロドを威逼しては其特權を削り重償を課して太公の約束を奉ぜしめ、公子を以てプスコフの主と爲し、ヰアトカ共和國をして兵賦を納れしめ、リアザンの主逝くや其幼子を莫斯科に招き別に將吏を派して國政を視せしめ、忠誠無二なりしウラヂミル勇侯の嗣子を幽し其地を公收して公室の權を張れり。たゞ夫れ四子を分封して崩裂の兆また免れ難かりしも、夙に長子イワンをして政に參與せしめ、以て爭繼の禍を避け

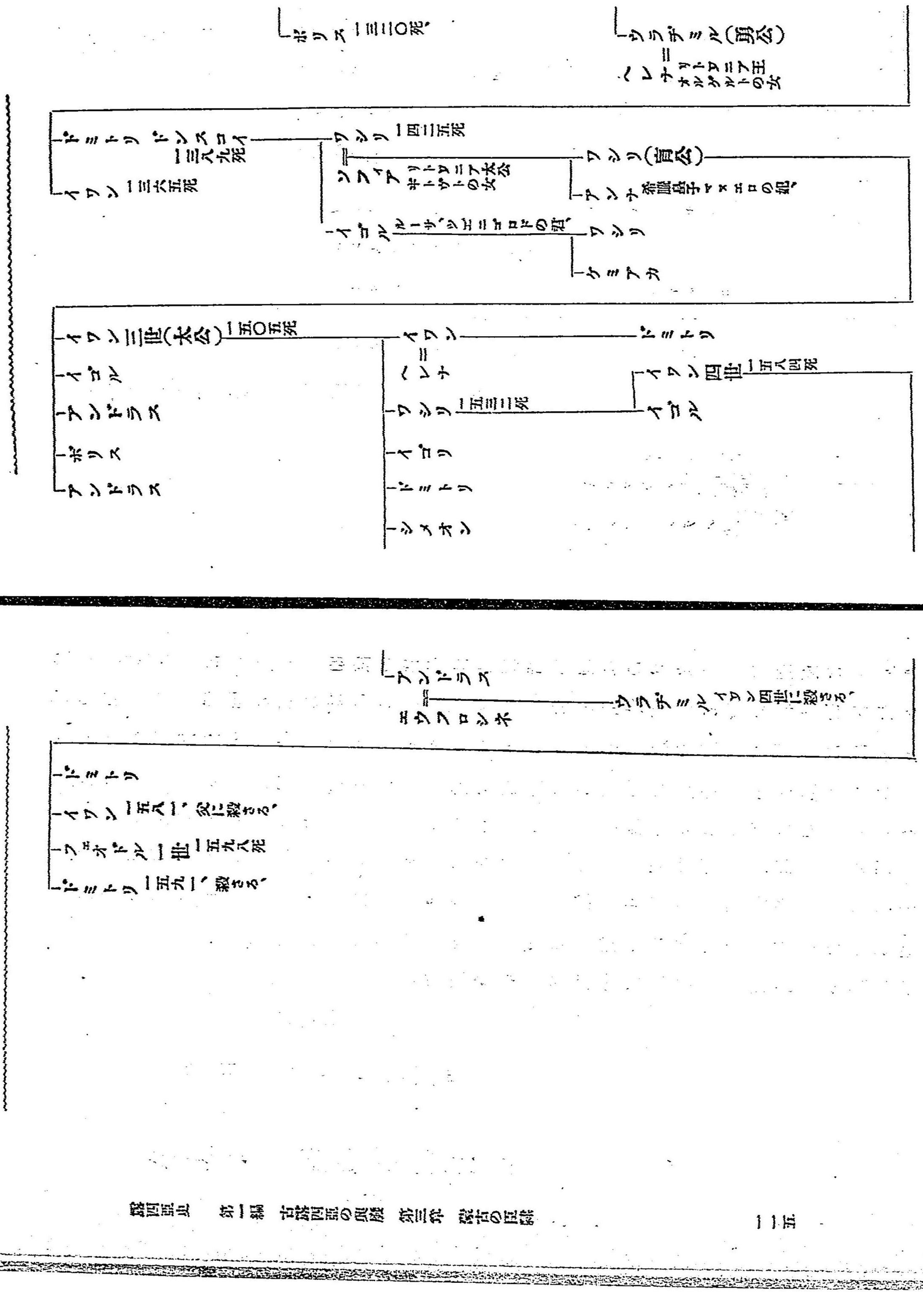
しは寧ろ盲公の明と謂つ可し。イヴン大王が露西亞統一の基礎は此に萠すを見る。而して莫斯科の爲に記憶す可きは、從來太公の即位はヴラヂミルにて行ひしに、ヴシリ盲公始めて位に莫斯科に即き、首都の實全く移りしとともに、二十年の爭奪に莫斯科府民は常に公家を忘れざりしと是なり。また此に一條の最著しき事變あり。一四三九年羅馬法王エウジェニオ四世の下に、羅馬加特力、希臘正教の東西兩教會合一の約成りしため、キエフ、莫斯科亦羅甸十字架を拜せり。然るにエフェソスの老卑涉の抗議に合一忽ち破れ、合一によりて西方の後援を得んとせし希臘帝國は土耳古の滅すところと爲り、一四五三年ムハメッド二世、コンスタンチノプルに入りて此地復基督教なく、莫斯科は代りて希臘正教の首府と爲りき。露西亞と正教との關係茲に於て密に、後來皇帝教主を兼ぬるの源を此に托せり。これをヴシリ盲公の世に於て特筆す可き要件なりとす。

ルリク家系譜

- ●ルリク 八七九死
  - イゴル 九四五死
    - オルガ
    - スヰアトスラフ 九七二死
  - ヤロポルク 九八〇死、
    - スヰアトポルク一世 一〇一九死、
    - ウラヂミル 一〇一五死、
      - イシアスラフ ロクネダの出、ポロツク家の祖、一〇〇一死
        - ヤロスラフ 一〇五四死
          - ウラヂミル 一〇五二死、
            - ロスチスラフ 一〇六五死、
          - ヤロスラフ一世 一〇七八死、
            - スヰアトポルク二世
          - スヰアトスラフ 一〇七八死、
          - ヴセヲロト一世 一〇九三死、
          - イゴル 一〇六〇死、
            - ダヰト
        - ヴセヲロド ヂリーニア家の祖、
        - スヰアトラフ ドレヴリの君、
        - ムスチスラフ トムートラカンの君、
        - ポリス ロストフの君、
        - グレブ ムーロンの君、
    - オレグ 九七五死、

- ウラヂミル・モノマルコス 一一二五死
  - ムスチスラフ 一一三二死
    - オレグ チェルニゴフ家の祖、一一二五死
    - ヤロスラフ リアザン、ムーロム、プロンスク家の祖、一一二九死
  - エウフェミア 匈牙利のコロマン夫人
  - マリア 希臘公子レオの妃
- エウフラシア
- イシアスラフ二世 デリーニア家の祖、一一五四死
  - ムスチスラフ二世 一一七〇死
    - ワシルコ 一一二四死
    - ヂロダル ガリチ家の祖、一一二四死
    - ダニエロ ガリチ王 一二六六死
  - ロマン 一二〇五死
  - ムスチスラフ(勇公) 一一七九死
    - ムスチスラフ 一二二八死、
    - ダヂテ
    - ウラヂミル プスコフの——、
  - ロスチスラフ スモレンスク家の祖、一一六八死、
  - アンドラス ボゴリウブスキ 一一七四死
  - ミハイル 一一七六死
  - ヴセヂロド(大巣公)三世 一二一二死
    - コンスタンチン ロストフ家の祖、一二一九死、
    - イゴル二世 一二三七死
      - フェオドル 一二三三死
      - アレキサンデル・ネヴスキ 一二六三死
      - アンドラス スズダル家の祖、一二六四死
      - ミハイル 莫斯科の——、
    - イワン スタロヴープ家の祖、
    - ヤロスラフ 一二四七死
    - コンスタンチン ガリチの——、一二五五死
    - ヤロスラフ トヱル家の祖、一二七二死
    - ワシリ コストロマの君
- トヱル
- ミハイル聖公 一三一八死
  - ドミトリ 一三二五死
  - アレキサンデル 一三三九死
    - ミハイル
  - ボリス
    - ミハイル トヱル家の末主、
  - コンスタンチン 一三四六死
  - ワシリ 一三六八死
    - ミハイル シメオン傲公の女婿、一三七三死
- アンドラス 一三〇四死
  - イゴル 一三二九死
  - シメオン(傲公) 一三五三死
  - ワシリ 一二七一死
  - イワン・カリタ 一三四一死
    - イワン(優公) 一三五九死
    - アンドラス 一三五三死
  - ドミトリ 一二九四死
  - アレキサンデル 一三〇九死
  - 莫斯科公 ダニエロ 一三〇三死
  - アタナシウス 一三二二死





- ボリス 一三二〇死、
  - ウラヂミル（勇公）＝ヘレナ リトヮニア王オルゲルトの女
- ドミトリ ドンスコイ 一三八九死
  - ワシリ 一四二五死
    - ソフィア リトヮニア太公ギトヴトの女
      - ワシリ（盲公）
        - アンナ 希臘皇子マヌエロの妃、
      - イゴル ルーサ、ツヱニゴロドの君、
        - ワシリ
        - ケミアカ
- イワン 一三六五死
- イワン三世（太公）一五〇五死
  - イワン＝ヘレナ
    - ドミトリ
    - イワン四世 一五八四死
      - イゴル
    - ワシリ 一五三二死
      - イゴル
    - イゴリ
    - ドミトリ
    - シメオン
- イゴル
- アンドラス
- ボリス
- アンドラス
- アンドラス
  - ウラヂミル イワン四世に殺さる、
    - エウフロシネ
- ドミトリ
- イワン 一五八一、父に殺さる、
- フェオドル一世 一五九八死
- ドミトリ 一五九一、殺さる、

第貳編　復興の露西亞

第四章　イワン三世

一、北方經營

一四六三年(英明、宗、天順六、わが後花園寛正三)歳二十二にして莫斯科の公位に即きしイワン三世が四十三年の治世は實に露西亞の統一復興の世にしてまた、專制君主政の範を示せし者、之に繼ぐ三世は其遺志を紹き其遺圖を經營せしに過ぎず。否、古今形勢大小の比倫と書圖多少の差異とを控除すれば、近世の露西亞もなほイワンの行路を追ふに似たり。イワンは戰に勇にして敵を戎馬の間に制せんよりは、謀に長じて勝を帷幄の中に制する愼密巧緻なる術數の資、冷靜の質、純乎たるスラヴ、莫斯科君公の模表たり。モルダヴィアのステファノ之を評して曰く『孤は馬上に馳騁してなほ國を衛る能はざるに、イワンは宮を出でずして敵を制す、洵に異と爲す可し』と。蓋しイワン即位の時勢は歐洲諸國崛起の日なり。佛蘭西にシャルル七世、ルイ十一世、西班牙にフェルナンド、イサベル、英吉利にヂュドル諸王、墺地利にフリードリヒ三世、マクシミリアン諸帝ありて、各競ふて封建瓦制の遺墟に鞏固なる國家を興さんとに力む。況んや露西亞は東に莫斯科公家の漸く興るあるも、蒙古の跳梁尚已まずして南に金帳の餘強あり。西はリトワニアの盛時終りしと雖も波蘭の後援ありてなほ莫斯科の邊を壓するに足る。ノヴゴロド、プスコフ、ヰアトカ衰へたりと雖も亦尚自主の氣を存し動もすればリトワニアに通同し、北に瑞典、敎門武士の在るあり。露西亞の起る誠に一人傑の力に恃たざる可からず。此時に方りてイワン三世出づ。相傳ふ、一四四〇年(明、英宗、正統五、わが永享一二)イワンの生るゝや、ノヴゴロドの一老僧至りて大事に白すらく『太公の捷利を收むる實に今日に在り。神は太公に一嗣を授けぬ。此子光榮の蹟を立て諸侯を服し蒼民を撫づ可し。嗚ノヴゴロドの爲に不幸なる哉。ノヴゴロドは此子の足下に落ちて復決して起たじ』と。俄語信す可きや否、予知らずと雖も、よくイワンの業を明にするものたり。實にイワンは專制君主なり。されば其敵は唯外に在らずして、其憂は亦內に在りき。然れども術數謀略に富めるイワンは巧に此間に處し、まづ衆敵

を合併して一敵を膺ち、一敵仆るれば、また一敵を整つ。例之ば内は中南露西亜の諸豪臣従を以て北敵を破り、然る後自己の臣隷を以て露亜西の諸豪を屈し、外は遠く波斯、瑞典匈牙利、瑣地利等と連り、近くワラキア、哥里米諸族に結びて金帳を降し、リトワニアを壓す。外羈扼を排脱し内專制を布き主權を確立するに愼重巧慧の謀を以てし、毫も情に任じ妄に動くの破綻を示さず。四十餘年の間一日の如く、迂餘曲折の進路實くに一定の目圖を以てす。詢に露西亜振興の祖たるに於て遺憾なしと謂つ可し。

イヴンの四方經略は征伐を後にして權謀を先にし、昨の友は今の敵、或は北を征し或は南に連なり、出沒曲折最も多端なり。故に南征の間に北伐あり、東に爭ふ中に西を壓す。今之を叙するに必ずしも年序を追ひ難きを以て項を分ちて陳せむ。

イワン即位の後夙に爭端を發せしは喀山汗國なれども、まづ屈せしものはノヴゴロドなり。ノヴゴロド共和府は夙に朋黨爭鬪の地たりしか、此頃に至りては貴族政治の弊百出し、縉紳、士流、民人相乖離し幾多の朋黨並び起り、爭鬪排擠の因果經綿解く可からず、紛錯の狀殆んど條理を探り難し。しかもなほ莫斯科太公の命を奉ずるを快とせず、イワン三世の約束を蔑にす。イワン乃之を伐たんと欲して衆をプスコフに召す。プスコフの民は脣破れて齒寒きを知れば命に應ずるを欲せずと雖も、勢已むを得ず。ノヴゴロドにては大卑渉テオフィロス數次莫斯科に招かれ太公の商議に與りて黨與勘からずと雖も、反對黨の盛大に及ばず。反對黨の領袖は故府長（ポサドニク）の寡婦マルファ母子にして、辯才財力ともに府中を傾け、リトワニア人を情郎とし、國を擧げて波蘭王カシミル四世に是し、大卑渉はキエフ本山の任命を仰がしめて莫斯科と絶たんと欲す。是に於て兩黨府會に爭ひしが、露西亜黨破れて共和國は波蘭王に歸せり。イワン使を遣はして府民を說くと再三、みな効なきを見て將を遣りて之を討たしむ。時に金帳分崩して諸豪汗位を爭ひしかば、蒙古亦多く太公の軍に從へり。斯くて莫斯科の兵はドキナ河畔を攻略し、コロスチネに戰ひ五千の兵は三萬の大敵をレーロナ河に破り、マルファの一子を始め幾多の將士をルーサに斬り、一四七〇年ノヴゴロドを降す。されど太公は直に共和府を滅ぼさず償金を輸せしめ、施政裁斷の權を收め、府領を剽略し、後屢玆に巡行して富庶を奪へり。故にノヴゴロドは尚數年の餘して獻遣に勞れしめ其名を存して其實を

命を保ちしも實力は已に茲に盡きたりしなり。

是より後イヴンはノヴゴロドの自滅を謀り、幾多の黨派を樹え、故にマルファ等を困迫せず、却りて寛待して禍根を養はしめ、府民をして漸く古來自主の氣を銷せしめ、民官吏の不正を訴ふれば則古法の不備に歸して法を改め、上下の間を離隔して實力の削殺に力む。則一四七五年下民の請を納れて、親らノヴゴロドに赴きて事を視、四方の民衆競ひ至るを以て自家權勢の普きを看取し、府長（ポサドニク）たるマルファの一子及諸官吏を捕へて莫斯科に歸りしも、復一人の抗議するなし。たま〳〵府の使節、太公に至り誤りてノヴゴロドの主（ゴスポダ）といはずして君（ゴスダリ）といひしかば、イヴン直にうけて自稱し、共和府をして太公を君と仰き其將吏の治を受くるを誓はしむ。事實上の君はかくて名義上にも君主となり、數年の假面忽落しかば、ノヴゴロドの巨鐘鳴りて民驚き覺め、『イヴンは事實吾曹の主なるも決して君たる可からず、ノヴゴロドは現當ともに自主たる可し』と憤怒し、貴族を殺し使節を誅し太公の黨を除き、復リトワニアに後援を求めて起つ。而も是イヴンの策に中れるなり。變に接せしイヴンは故意に嘆ずらく、『われを君と爲しゝは彼の使節なり、然るに今やまた之を殲しわれを欺き弄び、外兵を導きて同胞の血を流さんとす、已ぬる哉、伐たざる可からず』と。之を以て僧侶に謀り貴族に告げ國民に宣し、プスコフ、トヴエル以下悉く露西亞の兵衆を會して進んでノヴゴロドを圍む。ノヴゴロドの民はなほ『吾曹をして自由の爲に、聖ソフィアの爲に死せしめよ』と古き軍歌を誦せしも、府中の貴族は多く敵に通じ、國中の衆は糧道を斷たれ、一四七八年一月遂にイヴンに降る。イヴン乃府民の生命財產を釋し、古法を存し莫斯科に仕ふるを免せしも、府會を停め府長を罷め望樓を毀ちマルファ以下の敵黨若干を虜にしてかへる。噫『誰か能く神とノヴゴロドの敵たり得可き』と自負せし共和府は『此子の足下に落ちて復決して再起つ能はざるなり。』

イヴンはノヴゴロドを壓迫する間に蒙古汗國を謀り、此年遂に之と絶つに至りしが、そは次節に讓りて、茲にはノヴゴロドの末路を見む。

北露の強たるノヴゴロドを降しゝイヴンは早晩其餘類を殲くさずんば已まず。ボアトカはノヴゴロド殖民の建てし共和國たりしが、此頃に至りて喀山汗國に屈せり。一四七二年ペルミアを降し、次で喀山を亡ぼしゝイヴン太公は、一四八九

年ギアトカを滅して共和制を停め、翌年ウスチウーゲ、ドギナ、ギアトカの士はペチョラ河邊を征略し、風雪を冒してウラルの谷をすぎ馬札兒種の同族ヲグール、ウーグルの地を徇ふ。而してノヴゴロドは一び莫斯科に屈して後五十年、負擔年と與に重く其自由の民は移されて奴婢と爲りしも、なほ商業の昌盛を殺ぐに至らざりしに、イワンの失計一びノヴゴロドに於けるハンサ同盟諸市の商賈を逮捕せしより通商の信用地を拂ひ、北歐の商路斷え、嘗て四萬の兵勇を出し得たる四十萬口の大都は、終に見る影もなくなりゆきぬ。是大ノヴゴロドの末路なり。

二、蒙古諸汗經畧

蒙古金帳の威衰ふるや久しく、喀山、哥里米、アストラカン(薩萊)ノガイ帳庭各割據して雄を爭へり。喀山は莫斯科のワシリ盲公の世、嘗て一び昌隆を誇りしブルガルの故地に據りしムハメットが建てし一汗國にして、其民は蒙古ブルガル相雜り、其地通商の要衝を占め、文化亦見る可し。哥里米汗國も亦喀山汗國と前後して、青吉斯汗の後裔アヂの興すところなり。蓋し蒙古の半島に入る頃、其地タウル、希臘、ゴート諸族の後、アルメニア、猶太人ありしが、蒙古至るに及びて半島南部に退きたり。

斯くて諸汗國爭鬩を事として殆んど寧歲なく、喀山、薩萊、哥里米の諸汗、莫斯科太公に應援を求むるあり。イワン三世立つに及び蒙古の衰亂に乘じ二百年來の羈扼を脫せんとし、しば〳〵喀山汗と爭へば(一四六七、一四六九年等)、金帳汗亦兵を發して莫斯科を來り攻めき。その征戰の事蹟詳ならざるも、汗の第二征には、莫斯科の師『恰も太陽の光に輝く太洋の波濤の如くなりき』といへり。既に說きしが如く、イワンは寧ろ權術の資なれば、蒙古と鋒を交ゆるよりも、謀を以て其勢を削ぐに長ぜり。則進んで之を擊たず、守りて其寇を退け、貢賦を納れざるも尙贈遺を缺かず、使を蒙古の敵たる波斯王ウースム・ハッサンに遣はして好を修め、哥里米汗メングリ・ギエリと交を訂し之をしてリトワニアを防ぎて金帳汗を肘制せしむ。そは此間に北方の大共和國を屈するに力めたればなり。然るにノヴゴロドの實權掌裡に歸し北顧の患なきに及びて、一四七八年イワンは遂に斷然汗と絕てり。金帳汗アクメド使者を遣はして貢賦を徵すや、イワン使者を斬りて叛き、征師北上すと聞きて大兵を興してオカ河の堅壘を守りしが戰を決せずして莫斯科に歸る。莫斯科の民曰く『公租賦を徵して、貢を汗に納れず、汗を怒らしめて戰を決せざるは何ぞや』と。

公の母將士、卑渉、皆曰く『人間孰か死なからむ、宜しく進み戰ふ可し』と。公子曰く『兄は蒙古の來るを待たん耳、爺に從つて退かんや』と。イワンなほオカ、ヴーグラの流を隔てゝ蒙古と相對し、矢石相應ずるのみ、敢て進まず。軍中憤慨し、イゴル、スギアトスラフ、ウラヂミル・モノマルコス、ドミトリ・ドンスコイ等の事例を引きて太公を勵ますあり、汗は使を遣はして、公自至るか、宗室の一人を遣はして汗の鐙に接吻せば赦るさんと放言せり。しかもイワンなほ決する能はざる二週日。天寒く河水凝結するを見て、敵軍大に至らんを恐れて弊りかへりしが、天數は最奇にして、一部の衆は却りて進んで蒙古軍に迫り、且偶哥里米汗の兵蒙古の本據を衝きて太公に應ずとの報至りしかば、汗の衆亦潰走して、途上、哥薩克、ノガイの衆に掠略せらる。時に一四八〇年にして、莫斯科は最怯懦なる退軍を以て蒙古の覇扼を脫するを得たるは、イワンの權謀の人にして戰士にあらざるを見るよりは寧ろ天の奇機を想見せずんばあらず。此後金帳汗は哥里米の侵略に益衰へ、アクメトは其下に弑せられて部衆遂に崩散せり。

若し常識を以て論せん乎、イワンの退軍は民心背離の因たる可かりしに、蒙古の衰相を見て露西亞興復の日到れりと爲し、ルリク家の正嫡を以て統一の覇主とたのむこと深き莫斯科の民は以爲く、太公の退軍は智能く敵の崩散を圖り、わが武を用ひず、蒙古をして蒙古を制せしむ、神機妙算洵に神に近しと。イワンの權術亦幸あるる哉。是より後七年莫斯科の軍は喀山を攻め、之を圍むと五旬にして陷れ、その主アレガムを擒にしてかへる。イワン乃自ブルガリア公の稱號を加へしもイスラム敎の市邑直に治め難きを知り哥里米汗の姪を其地に封じて主と爲す。之を見て昔班ノガイ諸汗は使を莫斯科に遣はしアレガムを放釋せんと請ひしも、イワン聽かず、酬を卑うして使者を慰めかへせしが、なほ親ら此等の使者を引見せず、廷臣をして應接折衝せしめ、以て時勢の既に一轉するを示せり。

三、中露諸領の併呑、リトワニア征器

次にイワンの策に中りしものは實に中央露西亞の諸公なり。北ノヴゴロドの共和政府を仆し、南蒙古の諸汗に當るや、中央露西亞の諸公はイワン太公の腹心たり、股肱たりしが狡兎死して走狗烹らるゝの日は至りぬ。リアザンの幼主はワシリ太公の世、莫斯科に廢と爲りしが、イワンは之を廢せず、一四六四年妹を以て配し

以て他日併呑の地歩を作れり。ワシリはトエルの公主を娶りてイワンの夫人とし、夫人一子を擧げしが一四八五年に逝き、次で公子も亡せしかば、莫斯科トエル公ミハイルの新縁絶えて舊怨復起る。一四八二年莫斯科の威逼に恐れしトエル公ミハイルは救をリトワニアに求めんとせしかば、イワンは兵を發して親征し、ミハイルを外に逐ひ刃に饑らずして四萬衆の領土を併呑せり。ミハイルは遁れてリトワニアにかくれ、のち其地に逝きぬ。是に於て諸豪また太公の前に立つ者なく、ロストフヤロスラヴルの君は主權を奪はれて、太公の奉行と爲り、ゼレイアの君は太公の怒に觸れてその地を失へり。イワンの父は諸公子を分封して宗室と對峙せしめしが、イワンの併呑は遂に連枝に及べり。公の弟イウリの逝くや、太公深く哀悼の意を表せしも、直ちにその邑ドミトロフ、モジャイスク、セルプーコフを奪ひぬ。次で他の一弟アンドラスがリトワニアに通ぜしを罪して獄に投じ、一四九三年その獄裡に死するや、イワンは涕を垂れて己の酷過を悔ゆと稱しながら、その遺領を公收し、且アンドラスに先ちて逝きし季弟ボリスの地をも沒しぬ。是に於てイワンは悉く諸弟の地を併せ、祖先の領土を有し、中露西亞に於ける公家の根底を固めぬ。

乃轉じて西の方、始終莫斯科の諸敵の後援たりしリトワニアに向へり。これイワンが統一の業の最終の一擧なり。

蒙古の馬蹄に蹂躙せられし露西亞の野に、東に莫斯科興り、西にリトワニア起りて交も附近を經略して新生面を拓きたれば、勢相撞着せざるを得ず。小侯小君彼に壓せられ此に附隨し、莫斯科とリトワニアと互に小君侯を指嗾し煽搖して他を削殺するに用うる既に久し。一四三〇年キトヴト太公王位を得んとして得ず、憂去して後はリトワニア振はず、波闌王家に賴りて露西亞に臨む。波闌はヤゲイロ王の後ウラヂスラス三世（一四三四乃至一四四五年在位）を經て、カシミル大王（四世）に至り波闌、リトワニアに君臨して露西亞を壓し、蒙古の汗國と衡を爭ひ莫斯科太公の覇權を爭ふに力む。故に露西亞に在りて、苟も莫斯科と敵峙せんとする侯伯君主波闌リトワニアを後援と爲さざるは莫し。イワン三世莫斯科に君たるに及び土耳古の撥里丹バヤシト二世モルダキア公ステファン、匈牙利王マチアス・コルヴヌス、墺地利のマクシミリアン等と結びて波闌を制肘せしめ、殊に哥里米汗メンギリ・ギーレイをしてリトワニアを防がしむ。メンギリ乃キエフを襲ひカタコムの

寺刹を掠奪す。一四九二年カシミル大王狃落し、長子アルベルトは王位を繼ぎ、次子アレキサンダーはリトワニアを承けて領土分離し、加ふるにアレキサンダーは庸弱父王の英偉なるに肖ず。イワン視て時到れりと爲し、在莫斯科の波蘭人に太公毒殺の陰謀あるを發見し、リトワニアは、露西亞の援亂に乘じその西陲を奪ひしものなりと揚言し、兵を出して之を伐ちしも、敢て多く武力を以て爭はず、一四九四年和を講じ境を拓きてデスナ河に至り公女ヘレナを以てアレキサンダーに嫁す。而もこれイワンの謀にして、ヘレナをして固く希臘正教を奉ぜしめ、加特力派の寺院に入らしめず、習俗旅裝みな故國のものなりと揚言し、兵を出して之を伐ちしも、敢て多く武力を以て爭はず、一四九四年和を講じ境を拓きてデスナ河に至り公女ヘレナを以てアレキサンダーに嫁す。而もこれイワンの謀にして、ヘレナをして固く希臘正教を奉ぜしめ、加特力派の寺院に入らしめず、習俗旅裝みな故國の舊を守りて、以て、リトワニアの民に臨ましむ。よりてリトワニア領の希臘教徒漸く分離を懼ふ。既にしてイワンは聲言すらく、ヘレナは逼まられて波蘭の俗に歸し正教を棄てゝ加特力の教を強ねられ、希臘正教の徒は虐遇迫害を受くゝリトワニアの罪問はざる可からずと。希臘正教を奉ぜるリトワニア領忽動搖しデスナ、ソヤ河間の地爭ひ起つて莫斯科を向ふ。アレキサンダー之を防ぎしも軍ゴドロカに敗績せしがリヲニア教士團、蒙古帳廷と結びリトワニアの衆はギテブスク、ポロツク、オルカ、スモレンスクを死守す。哥里米汗は莫斯科に應じガリキアを掠め、ヲリーニアを剽かし、莫斯科太公の軍はナルヴに防ぎノヴゴロドのハンサ貨物を奪ふ。一五〇一年リトワニアの後援たるブランテンベルグのヘルマンは露軍四萬をイヴボルスクの附近シリトサに破れば、翌年露軍はプスコフに克ちて之に酬ゐ、哥里米汗は一五〇二年を以て蒙古の大帳汗シグ・アクメトを滅ぼし、巴圖の雄圖茲に空しく、薩萊の金帳變じて荒野と化せり。斯くて莫斯科、リトワニアの爭衡は引きて東北歐羅巴一面の兵禍を致せしが、一五〇一年リトワニア太公アレキサンダーは新に宗家に入りて波蘭王位を繼承せしかば、復莫斯科と爭ふを欲せず。羅馬法王アレッサンドロ六世は向牙利王と與に莫斯科、リトニアの間を調停せんとせしが、兩敵なほ侵地の要求を固守して相讓らず、置に六年の休戰を約して一び兵を解きしが、其間ソヤ河は莫斯科公國の境として存せりき。而して休戰の約成りし後も、イワンは哥里米汗よりリトワニア侵略繼續の約を得て甘心し居たりしに、休戰の期未滿たずして、イワンは世を辭しぬ。權謀術數を以て攻城野戰に代へしイワン太公が四十年來の併呑統一の業茲に局を結びて、遺圖を子孫に殘せり。然れどもイワンは啻に新に露西亞興隆の實を創め

し而已ならずまた露西亞興隆の名を正せり。何ぞや、莫斯科公國を以てビザンチオン帝國の後と爲しゝと是なり。請ふその事情を一言してイワンの史を閉ぢむ。

四、ビザンチオン帝室の繼承

願れば四十年來、ノヴゴロドを屈し、喀山を取り、金帳汗國を滅ぼし、リトワニアを屈して西方の地を拓き、繼承の始に比して莫斯科公國の地積を倍せしはイワン太公統一の業、露西亞新興の運を開きしものなり。されどキエフ太公の正名夙に亡び、ウラヂミル家の由緒空しく、莫斯科は寧ろ新興の地、假令ルリクの系統を承くとも雖も公家は簒奪の主、併呑の實ありて君臨の名未正しからず、興隆の勢ありて繼承の命尚重からず。統一の名に於て稍憾なき能はず。然るに幸なる哉、權略に富めるイワンをして居ながらにしてビザンチオン帝室の繼承を冒稱し得る好機に會せしめは土耳古のコンスタンチノポリス陷落なりき。

東羅馬帝國の滅亡するや、皇弟トーマス、バレオロゴスは西に奔りて羅馬に入り、其地に客死す。公主ありて、名をソフィアといふ。羅馬法王パオロ二世ために婚を四方に求めんとするや、君牧師ベッサリオン法王に說きて公主を莫斯科太公イワンに降嫁せしむ。乃希臘人イウリはフリアチニ家の二人と與に莫斯科に使し、イワン君臣は擧て希臘正教の帝國に君臨せし皇室の金枝玉葉を得んは殆に神意なりとして悅び諾し、異端土耳古を排し、羅馬希臘兩教派を合一せんと欲するに最切なる羅馬法王は公主の爲に粧資を辦じ、公主ソフィアは羅馬を出でゝリューベクに至り、それより海に浮びてレヱルに着し、プスコフ、ノヴゴロドを經て莫斯科に入れり。時に一四七二年なり。

コンスタンチノポリスは露西亞國教の傳來せし靈域にして、古來露西亞の教主はその皇帝の任ずるところ、露西亞の文字、風俗、習慣また多く此地に出でたり。露西亞の民コンスタンチノポリスを視る、まことに深重なりき。然るにその宗教の靈域、文明の表都は外敵の手に落ち羅馬の繼嗣たりしビザンチオン帝室の尊は蒙塵の禍を蒙り、基督正教の靈刹一朝化して廻謁末教の觀宇と爲りぬ。今や此帝室の公主莫斯科に入る。露西亞の民が赫々たる勢威を仰ぎて太公に朝するの意想見するに餘あらむ哉。太公の宮裡に東皇帝の尊を加へ帝王神權の主義を鼓吹し、蒙古傳來の專制主權說と相抱和して、主權の鞏固を致せしは、ソフィア公主なり。蒙

古汗の羈扼を屑とせず、その排脱を勸めて口を絶たざりしもソフィアなり。聖イゴルが龍を斬る露西亞の古徽號に代へし兩頭鷲の表章も亦ソフィアの齎らしところ、ザーの尊稱も亦その嫁婚に由りて莫新科太公に加へしところなり。世人多くは以爲く、ザーはカエザルの轉訛なりと。實は然らず。露人がスラブ譯の聖典に得し東洋の尊稱にして、はじめは以て、東羅馬帝を稱し、のちには蒙古の諸汗を呼びしもの、かのアシリア、バビロニアの古、ファルラサル、ナポポラザル等の語尾と同じきならむ。これカラムジンの說なり。よしやザーの尊稱が東洋に發源するも、西洋より轉訛するも深く問ふを要せず。唯夫れ莫新科太公はこの尊稱を繼承するとともに、實に東羅馬の後たるの名實を得たりしなり。若し太公の東皇帝の後を稱する莫んば、希臘正敎の徒は元首なくして適歸するところを失はむ。今や太公は婚姻に因りて、希臘正敎の元首と爲り唯に一時君主權の根帶を確立し得しのみならで、後來ながく、東歐正敎徒の疵護を唱へて拓地侵蠶の辭柄を得たり。また唯にこれのみならず由りて以て西歐との通交をはじめ、殆んど三百年間歐羅巴文明の外に立ち來りし露西亞は復新に、希臘文明を移植して、伊太利亞以下西南歐羅巴の文

明と接觸するの端を啓けり。

東帝國の滅亡するや學藝技術の士、典籍技能を抱きて多く西に奔り、また野にひそむ。西歐中世の文藝復興はその恩惠を負ふところなりしが、露西亞もソフィア公主の緣に由りて此文明の餘澤を得たり。ソフィアの露西亞に入るやイワン文明を慕ひ、技工學者を求むると切に、羅馬に奔り遁れし希臘學藝の徒、コンスタンチノポリス、希臘地方の人士、莫新科に移る者多く、伊太利亞人亦風を望みて露西亞に至る者尠からず。デメトリオス・ラロ、テオドレ・ラスカリス、デメトリオス・トラカニオテス等は希臘人士の秀英にして、クレムリンを建營し大砲を鑄造せしポロニャのアリストテレ・フィオラヱンチ、波斯に使節たりしマルコ・ルフォ、皇宮を造りしピエトロ・アントニオ、金屬發掘者パオロ・バシオの如きは伊太利亞人中の粹なり。イワンはまたしきりに通交を西歐諸國に求め、蒙古の金帳に使せし、ヱネチア共和國の使節トレギサニを囚へ、よりてシメオン・トルボウヂネをヱネチアに遣はして交を求め、一四九九年デメトリオス・ラロ、ゴロクヴストフ等の巧匠を獲てかへり、波蘭と對敵せんために匈牙利、墺地利、羅馬法王等と修交し、瑞典と顏頏せんためには嗹馬と結

び、ブレチェーフをコンスタンチノポリスに遣りて樓里丹に使せしめ、東はグルージア、察合臺汗國と通交せり。蓋し歐羅巴の外に逐はれて東方蠻野の君を以て目せらるゝを厭ふとともに、露西亞が漸く歐羅巴列國と政治的關係を生ずるはイワンより始まれり。然れどもイワンは頗意を國交に用ひ、自居ること甚高く、そのバーデン鎭守將軍と通婚せるを慚ぢ、マクシミリアン帝が王位を授けんとするや、われ天より位を得て、人より位を得ずと放言して之を退けて受けず、『全露西亞の主權は至尊三位の授くるところ』と爲せり。プスコフが對等の交際を求めて太公の怒に觸れしも實にこれに因れり。國民乃以爲く、太公は天授、また人間の匹儔にあらずと爲しイワン大王と稱せり。以て天授君權の當世の狀を想ふ可し。

一四九一年太公はペチ"ラの鑛を發して、始めて金銀錢を鑄、一四九七年新法(スデブニク)を布けり。スデブニクを以て、かのルスカイア・プラヴダに比せん歟、蒙古、ビザンチオンの習俗の影響と時世の推移に生ずる變化を認め得可し。此法にては農民の移轉を許可せしが、のちボリス・ゴヅノフの時此特典を廢せられき。罰金過料多く行はれ、決鬪にて裁斷する法は稍面目を改めき。イワンの世より露西亞の

ボヤールは古來の特權を失ひてその主を擇ぶ能はず。

イワンの前三世、莫斯科の公位は父子相傳へしが繼承の法は未定まらず。イワンの長子イワンは父公に先ちて薨せしかば、孫ドミトリ・イワノヴヂは公の次子ワシリと繼嗣を爭へり。イヴンはしめはドミトリを以て後とせしが、次て意變じワシリを嗣位に立て、ドミトリを獄に下す。一五〇五年イワン三世薨ず。壽六十又七。四十三年の治世、新に露西亞の非を開く。今やオレグ、ヴラヂミル、ヤロスラフの露西亞は片影を遺さず。存するところは、實にこのイワンが創めて、後に彼得大帝が振興せし露西亞なり。若し人之を以て露西亞の建創と爲すありとも、敢て不當に在らずと爲す可し。

第五章　ワシリ、イワン父子

一、ワシリ

莫斯科の郊外は森林圍繞し、林中には雀及び宮廷の爲に育せる麋鹿優遊せり。然れども嚴冬寒酷く食盡くるや、熊穴を出で狼林を出でゝ市中を徘徊し戶に入り

て食を求むるあり。夏天暑酷しきや、城外の野草殺種自焼けて煙塵地を捲きしこ
とあり。城中の家屋は木造多く、寺院殿舎石造稀なり。街衢橋梁多く警卒時を戒
めて一定刻の後は通行を禁ず。ヤウサの水濟には市川の水車を設け、また一所に
は製錬、熔鑛鍛冶の店あり、各區に寺院あり。家居は一般に高大にして各苑囿あり。
これ神聖羅馬皇帝の命を奉じてワシリの延に使せしシギスムンド・ヘルベルスタ
インが所見なり。キエフの盛は夢と爲りて、ウラヂミルの世亦過ぎぬ。イワン三
世によりて新に興りし莫斯科を都とせる露西亞は一五〇五年その次子ワシリの
繼承するところと爲る。ワシリの父をイワンといひ、ワシリの子をイワンといひ、
ともに新露西亞の英主たり。兩イワンの間をつなぐワシリが二十八年の史は父
イワンの業を承けて、子イワンに傳ふる挿句に似たり。然も地方の併呑と主權の
擴張に於て毫も前後二代のそれに譲らざるなり。蓋しイワンの業は征服にあら
ずして經略に在り。機動かざれば隱忍發せず、故に壽終るに及びてなほ內にプス
コフ、リアザン、ノヴゴロド・セヴルスキの餘喘を保つあり、外はリトワニアとの抗對
未一決せざるありき。ワシリ・イワノヰチは乃此剩殘の業を成して父公の志を遂

げしなり。

黄金帳廷滅びて蒙古の威令復見る可からずと雖も、なほその枝葉として殘りし
諸汗ありて、ワシリの世、餘燼再燃えたり。嚮にイワン三世に興してリトワニアを
制肘したる哥里米汗メンリ・キレイは、今やリトワニアに通じてワシリに反抗し、そ
の諸子部將稍もすれば露西亞の邊陲を擾り、マハメト・キレイ後を嗣ぐに及びて、露
西亞の一勁敵と爲る。時にカザンの民亦起ちて露西亞太守を殺しゝかば、一五〇
八年ワシリの弟ドミトリ之を討ちて敗績す。マハメト・キレイ乃カザンの衆を援ゝ
けて露西亞を攻め、莫斯科に逼る。ワシリ重價を輸し、貢賦を約して和を請ふ。蒙
古軍よりて露人三十萬を捕へてかへり、哥里米のカファにて土耳古人に賣りて奴婢
と爲したりとぞ。これワシリ即位後の第一辱なりと雖も、ワシリはまたプスコフ
以下の征服に急に、且外は事を波蘭に構へしかば、直に此屈辱を雪むる能はざりき。

プスコフ共和府は莫斯科の威令に服すと雖も、なほ全くその獨立を失はず、その
民奉行（ナイストニク）と爭へり。ワシリ、ノヴゴロドにゆき、プスコフの吏員を召して之を執へた
り。プスコフの民憤怨して起たんとせしが、老成の徒之を抑へ、ワシリの使至り迫

るに及び、涙を呑みてその命を奉じ、諸市邑にワシリ所任の奉行を惹き、プスコフの末路を啄ばすらく、民會を解き、その獨立の表識たる警鐘を撤す。史家プスコフの末路を啄ばすらく、

『獅子の爪ある翼多き鷲は翔り下りて、レバノンの三檜たる、わが美、わが富、わが見を摑み去れり。わが地荒れ、わが市邑毀れ、わが商業頽れぬ。わが同胞は、父も、祖父も、曾祖父も未曾て住まざりし地に取り去られぬ。泣かじとすれど得ず、歎かじとすれど能はず』と。時に一五一〇年なり。

アレキサンダー王の殂するや波蘭王シキスムント一世はリトワニアの君を兼ねて、露西亞と爭ひしが、一五〇六年ワシリはキエフ、スモレンスクの要求を拋ちて和を約したり。されど和は匿に三年にして破れぬ。ワシリはシキスムントが悉く捕囚を還へさず、莫斯科の商賈を掠め、アレキサンダーの寡婦たる公妹（即ちワシリ三世の女）を薄遇し、弟シメオンを煽搖して波蘭に奔らしめんとし、哥里米汗を刺嗾して露西亞を犯さしむと爲す。乃揚言して曰く、『馬前まず劍折るゝにあらざれば、またリトワニアと和せじ』と。進みてスモレンスクを拔きしは一五一四年なり。

ーシャスムントの露西亞を圖るや、哥里米汗を與黨と爲せば、ワシリは之に對して

アストラ汗を用ひ、かれ瑞典を後援と爲せば、嘯馬と相呼應し、波蘭王がドニエペル河畔の哥薩克族を懷柔して莫斯科の後を伺はしむれば、露西亞はテウトニ敎門武士をして波蘭の腹をつかしめ、埃地利のマクシミリアンと波蘭の分割を約し、土耳古櫻里丹セリムを援きて助と爲さんとす。見る可し、露西亞對波蘭の爭は東北歐列國外交の向背と連關せるを。然るにコンスタンチン・オストロヅスキがオボツカに敗績してより和議起り、マクシミリアン帝調停の勞を取り、その使者はワシリをしてスモレンスクを拋たしめんといひ、羅馬法王レオ十世はワシリをしてリトワニアを棄てしめんとす。一五二二年に議開け、四年を經て休戰の約成り、ために ワシリは法王、皇帝、埃地利太公等と好を修め交を結びしが、スモレンスクは遂に拋たざりき。ワシリはリトワニアと爭ふの間また哥里米汗と抗敵して下らず。一五二一年リヤザンの君イワンが汗に通ぜしを罪し、之を莫斯科に召して幽禁し、其地を併せ、また一麻哈未敎徒シグアレイを擁して汗とカザンを爭ふ。汗之を廢し、代ふるに宗族を以てし、此年大擧して露西亞を攻め、その一軍をオカ河畔に擊破し、領内を蹂躙し、黃雀岡に上りて莫斯科を望み、將に之を屠らんとす。ワシリ已むを

得ず、厚く汗に贈遺して都城を救ひ得、翌年大兵をオカ河畔に見て、戰を汗に挑めり。汗亦之に應ぜんとせしが、幾ならずしてアストラカンに捷ちしも、ノガイの君ママイの爲めに弑せられぬ。されど露西亞はこれに乘じて南方を圖ること能はず、たゞカザンに迫り得可し。よりて一五二三年、一五二四年にワシリは再びカザンを征せしも利なく、六年を經て三び之を討ち、夜に乘じて敵營を斫り、一擧して之を下さんとせしが、ワシリの姪ベルスキ、カザンの民の賂を受けて和約を結びき。たゞそれワシリがヂルガ河上のマカリエフに立てし互市場はカザンの利を奪ひ、之を衰亡に陷れたり。のち此互市場はニヅニ・ノヴゴロドに移され、歐亞の賈客麕集するもの十萬に出づるに至りき。

是よりさき、ケミアカの孫ワシリはノヴゴロド・セヱルスキに治せしが、一五二三年ワシリはその波蘭と通ずるを罪して獄に下しゝかば、露西亞はまた莫斯科家の外に一君公をだも留めず。ワシリはまた兄イワンの子ドミトリが莫斯科家の正嫡たるを忌みて之を獄中に死せしめ、弟シメオンが自ら安んぜずして外、波蘭に奔らんとせしを防止し、嘗て一大官が諫を勸むるや、『默れ、野人（モルチ、スメルド）』と罵倒し、妹婿の不敬を怒りて獄に下し、ひとへに主權を重からしめんと圖る。當時露西亞に使せしマクシミリアン帝の使節ヘルベルスタインも、見て臣民の畏服する、歐羅巴諸帝王の及ぶところにあらずと爲せり。またワシリが修交せし列強の君王には、羅馬法王にレオ十世、クレメンテ七世、皇帝にマクシミリアン一世、カール五世、瑞典にはグスタウ・ウサ、土耳古の樓里丹セリム、スレイマン等あり、また東方には印度の莫臥兒帝バーベルもワシリの交を求めたり。されば露西亞の主權年と與に強く、莫斯科の盛亦觀る可く、ワシリの招聘を受けしアルバニアのアルタの人、アトス山の僧マクシムスの如きは、クレムリンの典籍は伊太利亞、希臘にだもなきところなりと賞歎したり。マクシムスは希臘の典籍をスラブ語に飜せし者にて南歐に於けるルネサンスを遙に露西亞に傳へし使徒と謂ふ可し。

一五三三年ワシリ逝き、子イワン四世つぎ、母ヘレナの攝政はじまる。祖父イワンの業を大成したるイワン大王是なり。

二、イワン四世の前半世、

イワンの前、莫斯科の患は外に在りしが、イワンの世に至り憂は內に在り。莫斯

科の將に起らんとするに當り、露西亞の曠野林澤の間幾多の列侯君公ありて爭闘を事とせしに、莫斯科興りてこゝに至り悉く其地を統一せしかば、此等の君王侯伯は外に奔るにあらざれば皆莫斯科に集まりぬ。此等の徒、國亡び地を失ひしも、皆名門閥族を以て相誇り、臣を莫斯科家に稱すと雖も、之を仰ぎ視て君と爲さず、稍もすれば異心を抱き、又互に排擠す。乃戰場に干戈を把らずして、宮府に謀略を弄して鬪ひ、邦家の雌雄決せしいま、明黨の勝敗に因りて權勢の得喪を爭はんとせり。蓋し君主專制獨裁に對する反動抗抵なり。之に加ふるに幾多の邦家を亡ぼし、莫斯科家は、更に幾多の宗室の支庶流を封じ、叔姪昆弟を樹立し、之に領土を頒ち之にボヤール、チエチ・ボヤルスキ（武士）を附隨せしむ。是に於て宗室と廢家亡國の貴種門閥と結托排擠して黨同伐異、以て君主獨裁と貴族寡頭政治と相衝突するに至れり。イワンの世、朋黨の憂繁く、慘禍相踵ぎしもの洵にゆへあるなり。

ワシリ・イワノヰチの後妃ヘレナ・グリンスキはシキスムンドの爲に亡ぼされしボドル貴族の女、才色兼備、西歐婦人の風ありて、ワシリの信寵を得たり。さればワシリの逝くや古のオルガ攝政の例にならひ二子イワン、イウリの爲に國政を攝し、

貴族寡頭主義を排して君家獨裁の實を擧ぐるに力む。故ワシリの弟イウリが謀反の罪を得て獄に下りしも、他の一弟アンドラスが波蘭に遁れんとして執へられしも、一時妃の信任を得しその叔父ミハイル・グリンスキが幽死せしもみなこれが爲なり。さればリトワニア、カザン哥里米の諸汗虜に乘じ變に應じて露西亞を圖らんとせしも、皆志を遂げず。ヘレナはボヤルドに信頼する能はず、諸公に依る能はず、血族をも恃む能はず。唯世人の爲に己が情郎と目されし一典厩テレプネフを重用して萬機を之に諮り內諸強を壓するとともにカタイ・ブロド壘を築きて外に備へ、威力を逞ふする數年、一五三八年に至りて暴に殂落せり。ボヤール乃起ちて政權を握り、典厩を死に處し、イワンの乳母たる其妹を幽し攝政の廉とともにシュイスキ、ベルスキ黨爭の幕は開けたり。

此時イワンは年甫めて八歲、聰慧と雖も爲すなく、殊に弟イウリは尙幼弱なればともに僅に自保つのみ、また廷臣強族の跋扈を制す可くもあらず。露亞西は殆んど元首なきが如く、政令職封、黨人の爭奪に任じ、府庫の財寶はその濫費するところと爲り、故ザーの玉座はシュイスキの汚すところとなり、民は苛稅重斂に虐げられ、地

は浮浪外寇に削平せらる。後日イワン當時の狀を自記して曰く、『予等弟イウリとは恰も外人の如く、乞丐兒の如く遇せられ、疎衣厲食、饑寒に泣けり。渠等の黨與は市邑村落到處を横行し重歛強奪蒼生を虐ぐるに惡として爲さざる莫く、予が臣民を以て自家の奴僕と爲し、自家の奴僕を以て國家の貴族に列せり』と。乳母は幽せられぬ。典厩は殺されぬ。一ぴベルスキ黨の爲に勢を失ひしシュイスキ黨は一五四二年の春莫斯科を襲ひ、ザーの宮に入りてイワンを脅かし、立に莫斯科敎長を廢し、ベルスキを獄に下し、イワンの愛臣フェオドル・ヂロンゾフを黜け、一日イヴンを鞭ち、敎長の衣を足下に蹂躙するに至る。されば宮廷の中幼主兄弟を憐む者なきにあらざれど、皆黨人の禍を畏れて敢て動かず。斯る擾亂紛爭の間に人と爲りしイワンは素より師傅なく、敎訓なく、唯自讀み自師とし自修養し、君王の何たるを知り、臣從の何たるを知れり。而してその漸く長ずるを待ち、これを擁して權勢を張らんと欲せるは外戚グリンスキ一家なり。一五四三年基督降誕祭の後、イワン卒にボヤドルを徵し、稠人の中にシュイスキ黨の領袖アンドラスを誅し、その餘黨を配謫して、一擧に黨禍を斷つ。時にイワン歳十三。母后攝政の世につぎし朋黨紛爭の期茲に終り、寵人(ウレミア)の世始まれり。

黨爭は已みしも、イワンは尙幼し。その後に立てるグリンスキの一族は年少の君を擁して數年の怨を黨人に酬うるに殘虐を極めて苟くも寛假せず、イワンを勸めて州縣に巡幸せしめ妄罰濫賞を擅にせしめ、屢暴戾の行を慫慂せり。一五四七年イワンは敎長マカリウスより冠を受けて莫斯科太公の位に即くとともに、ザーの號を稱せり。露西亞は默示錄の第六帝國、イワンは或意義に於て、ネブカドネザル、ファラオ、アハスエルス、さてはダギテ等の諸ザーの嗣と謂ふ可く、その祖母ソファアは希臘皇室の玉葉たれば、コンスタンチノポリスが第二の羅馬たりきとせば、莫斯科は實に第三の羅馬と稱す可きなり。戴冠の後幾ならず、イワンはロマノフ家の女アナスタシアを納れて妃と爲す。從つて妃の族外戚の親宮廷に夤緣し、後世ロマノフ家隆興の緒は夙に此に解けたり。斯くてグリンスキ、ロマノフの兩外戚は寵遇を恃みて黨人の排擠に力めたりしが黨人また報復なくして已まず。一五四七年火を都中に縱つ者ありて、死者千七百。イワン愕きて事因を査するに及び、ボヤールは罪をグリンスキに歸し、民衆怒り蜂起してグリンスキ家を襲ひ、ヂロビー

フに進み、イワンの叔父グリンスキを求めて甘心せんとす。イワン時に年十七、四圍の慘禍を見て恐惧の色あり。宮中に在ると九年、德望最高き僧シルエステル之を諭して行を改めしむ。イワン之を以て教界の主と爲し、小貴族アレキセイ・アダシェフを擧げて軍國の事を攝せしめしかば、二人力を盡くして、細徒貴族等とイワンを輔佐し、妃アナスタシア亦內助に盡瘁し新法を布き、會議を開きて教會改革の百ケ條(ストグラフ)を布きぬ。此百ケ條は實に珍奇の書にて、當世社會の狀態、僧侶の地位、民間の迷信等を見る可く、條目中特記す可きは國民學校設定の項にて、教會に於て、兒童に讀書書法唱歌を授け聖書を修めしむるに在り。然れども露西亞の僧徒はなほながく無學なりき。之を要するに此前後十三年はイワンが五十年に亘る治世中、最康安の期にして、內治のみならず、外交の經また見る可く、カザン、アストラカンは實に此間に降伏したりき。

イワン父を亡ひてより艱苦の間に處し、莫斯科家の基礎、强族群小の掌裡に動搖すること十數年、こゝに及びて百事漸く緒に就けり。中にも軍制は頗る釐革せられ、ストレリツ(熊皮帽を蒙りたる常備輕步兵)を置き、七千の獨逸兵を傭聘し、軍稅兵賦の法を正し、穀種の重サ三百磅を要する領主は精甲裝騎一人、若くば之に相應する金額を收む可く、兵勇の支給を一定し、或は其勇を鼓すろ爲に額を倍せり。是に於て露西亞の兵力增加し、爾後三十萬の大衆を擧げ得るに到りき。之よりさきカザンには莫斯科黨と哥里米黨と相軋り、哥里米汗の後援に賴れるカザン汗サファ・ギレイは露西亞の邊を犯し、哥里汗米之に應じて兵をオカ河に出せり。然るにサファ・ギレイ殂して遺子幼弱なるや、莫斯科黨勢を得てシグ・アレイを擁し、次で之を廢して直ちに莫斯科の治をうけんとを乞ふ。イワン乃シグ・アレイを召還し大守ミクリンスキを遣る。忽流說ありて、ミクリンスキ大兵を率て至り悉くカザンの民を屠らんとすと聞えしかば、その民蜂起して莫斯科と斷ち、ノガイの落胤を求めエヂゲル・マハメトを立てゝ主と爲す。一五五二年六月イワンカザンを伐たんとせしに、哥里米汗がカザンを救ひて莫斯科の虛を擣かんとすと聞き、汗の兵をオカ河に遊ふ。然るに汗の兵はツラを取らんとして能はず、急に退きしかば、イワンは步卒十五萬を船に載せてヲルガ河を下り、九月カザンを圍む。カザンの兵は蒙古三萬、ノガイの衆二千五百、決死して戰ひ、イワンが屢降を勸むるに聽かず、『基督敎徒の不淨

の手に死なんよりは、寧ろ國人の渇き手に死せん』と揚言せり。時に露西亞の輜重輸船は、風浪の難に會ひ、霖雨久しく水莫斯科軍の陣營を浸し、城堅くして下らざれば、諸將みな圍を解かんといひしも、イワン聽かず、日耳曼の技師を用ひて城壁の下を穿たしめ、壁壘の破るゝに乘じて城に入る。城中奮鬪して死し、適走らんとせしものも多く露西亞の輕騎に獲らる。イワン視て泫然として曰く、『此罪は基督敎徒ならずも男子たるに耻ぢず』と。悉くクレムリンなる蒙古の遺物を破殘し、伐ふるに敎會寺刹を以てし、因虜を賣りて奴婢と爲し、露西亞の民を移し居らしむ。カザンの一捷は實に露西亞蒙古抗衡の局を決せしものにて、露西亞が始めて攻圍により て敵を屈せしものなれば、今に至るまでなほ國人の喧傳するところたり。

アストラカンはもとアジァタルカンといひ、アストロカンといふ。また雨黨の札櫟ありて一五五四年莫斯科公子イワリ・ブロンスキは兵三萬を以てヲルガ河を下り、デルビチを擁立して其地の主と爲せり。然るにデルビチは哥里米汗と通ぜしかば、露西亞再征して其地を併せ、附近のステップに居るノガイの遺衆を撫づ。東方通商の孔道たりしヲルガ河はまた諸強のよりて興りし地にて、可薩部の都イチル、ブルガル部の首邑ボルガリ、黄金帳の都邑薩萊等みな此河流に在りしが、今や悉く變じて白砂黄草の地と爲り、此河流の通ずるところ盡くザーの領土に歸しぬ。

かくて露西亞はカスピ海によりて門戸を波斯方面に開き、カウス嶺下に相鬩げる小君公に後援を與へ、タウリド廷と連る爲に、哥里米の附近の一共和國を保護し、ドニエプル河の可薩克は波蘭に歸せしも、ドンの可薩克は莫斯科の臣從と爲りき。これ實に後來露西亞南下東侵の門戸を開きしものと謂ふ可し。

三、恐怖の世

イワン幼にして父を失ひ、僅に統一せる邦家を繼ぎしを以て、その前半世は母后の攝政、朋黨の跳梁、孤人の跋扈相つぎ、のち並にカザン、アストラカンの征服ありしのみ。然るに後半世に至りては專制獨裁の君權を擅にし臣宰と爭ひて殺虐を逞うし、西はリヴニア、波蘭、瑞典と戰ひ、英吉利と交り、東は蒙古族、西部利亞を征し、内外の事最多端なりき。

今を以て古を推すも、古を以て今に斷ずるも、露西亞が北歐の曠野に興りしものから、四方に外交の門戸を求むるや切なり。乃まつ黒海に出でしものは希臘帝國

に益を得んがために、して、裏海に達せんとせしは亞細亞に歩を着くるの端緒なりしが、直に西歐羅巴の文明の接觸せんには、勢バルト海に出でざるを得ず。然るに莫斯科とバルト海との間には瑞典領あり、リヴニア武士あり、リトワニア波蘭あり、みな露西亞の敵たり。一五五四年瑞典王家の祖グスタウ・ワサとイワンと領土の境堺を爭ひて干戈を交へしは、イワンが此方面經營の初歩なりき。戰塵は通商條約に收まり、瑞典は露西亞を通じて東方通商の利を收め、露西亞は瑞典によりて西の方、フランドル、佛蘭西、英吉利に通ずる益を得たりと雖も、敵國を中間に介して露西亞の意尙滿つる能はず、リヴニア敎門武士團の領有せるナルヴの諸港、レゴル、リガを渴望して已まず。一五四七年イワンはサクセンのシュリテを獨逸に遣はして技工の徒を求めしめ、シュリテはその百餘人を得しに、獨逸はよりて露西亞の强大ならんを恐れ、リヴニア武士も亦カールル六世帝に說きて之を途に抑留せしかば、その徒終に莫斯科に達せず。イワン時にカザンを攻めしかば報復に遑なかりしも事已みて後、一五五四年リヴニア武士團の使來りて隣交を修むるに及び故に貢賦を追りて戰を宣し、四年の後ナルヴ、ノイハウゼン、ドルパト其他十七邑を奪へり。

開長ケトラー救を隣國に求めしに、獨り波蘭之に應じ、その主シギスムンド・アウガスト二世はリヴニアと攻守同盟を約したり。

斯く外交の事切迫せるに當り、イワンが前半世に於ける莫斯科君臣の乖離玆に復發せり。貴族の殊權を削り、細徒の領土を割き、民間の積弊を除き、法令を正して露西亞の內治見る可きに至りしは、シルベスタルとアダシェフの功勳に負ふところなり。然れども其權勢を挾みて國事を所決する、殆んどイワンをして木偶に過ぎざらしむ。乃シルベスタルはイワンが忌めるボヤールと交り、イワンの愛子を失ふや冷語を放ち、妃アナスタシアの薨を排し、妃はクリンスキ、ロマノフの族を敵視せり。イワンは幼きより臣僚黨爭の間に人と爲り幾多の危境を經て、厚く自主の念を養ひ、深く他の跳梁跋扈を惡めり。嘗てワシリ四世の當任を得しコロムナの前卑涉ワシアンはボヤールの爲めに職を遞はれ、深く之を恨みしかば、イワンに告げて曰く、『殿下眞に獨裁の君主たらば決して他に諮るを須ひず、決して他の言を聽くを要せず。宜しく命ず可く、必ず從ふ可からず。これを眞の君主と謂ふ可し。賢明なる君主

の顧問は終にその指揮者たらんとするなりと知られよ』と。斯くの如くにして君臣の間相睦む可うもあらず。一五五三年イワン病を獲て殆んど危きや、ボヤールは幼子ドミトリを奉戴するを肯んせず、外戚ロマノフ家に從ふ能はずと公言し、イワンの從弟ウラジミルを奉ぜんと謀り、シルヱストル、アダシェフその首謀たり。少數忠君の士みな窃にイワンの身を危む。イワン病床に告げて曰く、『卿等若し忠誠の誓詞を忘れずは我が兒をしてボヤールの手に落ちしむる勿れ。之を奉じて外に奔れ。ロマノフ家の衆。卿等はボヤールの寛假するところたらじ。若し死を免れずは、わが兒と其母との爲に死せ。わが婦をして敵の毒手に陷らしむる勿れ』と。然るにイワンの病癒えしが、是よりのち復シルヱストル等に信任せず、その晩年誅殺を擅にし殘忍を敢てしたるもの、實に當時の苦境に胚胎せしを疑はず。こゝに於てか外征に對する君臣の意見は衝突したり。

イワンのリヲニアを討ちてバルト海に出でんとするや、シルヱストル、アダシェフはまづ哥里米を定めて南方の憂を絶つに加かずと爲せり。蓋し哥里米を定めなはイスラム教の餘孽を殲くして露西亞の南門を安んずるの利ありと雖も、リヲニアに克たば露西亞諸公の故領を復し直ちに西歐文明國と交通の便を得るの益あり。南方の汗國も今衰亡に頻せりと雖も、リヲニアの武士團も加特力、抗抵教派の爭に瓦解せんとす。その間に乘じ得可きの利は彼此相似たり。若しリヲニアを伐たんか、露西亞は更に瑞典、嗹馬、波蘭、獨逸と接觸せざるを得ずして新に外交の繁を招くに似たりと雖も、哥里米を下せばこゝに新興の隆勢當り難き土耳古と對抗せざる可からず。その難きやまた一なり。而して波蘭、リヲニアは哥里米と相呼應してともに露西亞に逼らんとせるなり。されば君臣の爭議孰か是なりと斷し難きも、此爭議に由りて從來親任によりて威福を逞うせし二人は其地位を失へり。シルヱストルは罷められて聖キリル寺に隱れ、ソロボツキに謫せられ、アダシェフ亦黜けられてリヲニアなるフェリンの守に貶せられ、次でドルパトに徙さる。しかも二人は久しく政令兵馬の事を執りしかば、宮府の樞要は殆んど皆その黨與にして機を親て首魁の爲に怨を復せんとするや必せり。アダシェフ黜けられて後幾ならず、妃アナスタシア暴に亡せしかば、イワンは以て敵黨の毒に中れりと爲し兩者の軋轢ます〳〵迫れり。時に一五六〇年なり。史家或は以てイワンの推托と爲す

もザビエリンの『露西亞后妃外傳』出でゝまた疑を挿むの地なし。然れどもこれに由りてイワン苛酷の肆行を爲しゝと爲すは未だし。イワンの記するところに、『アレキセイ・アグシェフの隱謀は發覺せしも、予等は怒情をなだむるに仁慈を以てし、その與黨を市邑に配謫せしも、一人をだも死に處せず』といへるは實なり。イワンの誅殺を逞うするは親任せしアンドラス・クルブスキの謀叛よりはじまれり。

世にイワンを稱して可恐王（ツリブル）と爲すに至りし二十餘年の殘忍の世は六大變の一たるクルブスキの變にはじまる。クルブスキはルリク家の支流に出で、オカ、カザンの軍に從ひて名を博せしが、アダシェフ、シルエストルと友とし善く、深く其失墜を怨みしが、リヴニア征討の總督に任ぜらるゝや、衆を以て寡に敗れ、大にイワンの怒に觸れんとを恐る。よりて波蘭王より其失に同じき地と利權とを得んことを議せしが、遂に妻子を捨てゝ、エンデンより波蘭の陣に奔り、使を遣はして一書をイワンに呈す。蓋し文を舞はし言を極めてイワンの暴戾を誹り、廷臣の不法を罪し、終に所謂『臣を愛顧し、臣の不幸を慰藉す可き』シギスムンド・オーガストの臣たるを聲

明して、離叛の意を明にせり。さなきだにイワンはアダシェフの黨與に快からず猜忌疑惑の情欝結せるに、今此叛臣の聲言に接せしかば、欝情忽決し、誅殺の殘虐此より滋し。イワンは文を能くするを以て自任すれば、クルブスキの書に對して回牒を發し、叛臣と贈答すること數回なりしが、此回牒よりも畏る可き回牒は與黨の誅殺なり。クルブスキにして波蘭の衆を導きて露西亞に入らば、アダシェフ、クルブスキの黨類たる政府は直ちに之に呼應す可しと思ひしイワンは、國都に安んずる能はず、一五六四年十二月、親任せる臣屬若干を率て莫斯科を出でゝアレキサンドロフスキに去り二書を莫斯科に與ふ。其一は大卑渉に與へて、貴族の異圖を暴き、緇徒が勸解の權によりて君主の有罪者を罪するを妨ぐるを責め、他は府民に與へて府民の罪なきを宣言せる書なり。此に於て莫斯科の民はまた寡頭貴族政治の專虐に遇はんを畏怖し、ボヤールは民衆の蜂起せんを恐れ、請ふてイワンをアレキサンドロフスキに迎ふ。イワン乃條案を具して莫斯科に歸り、ボヤールの議會（ゲーマ）をして統治會（チエムシユチカ）を組織して國中大部分の政治を司らしめ、イワンは唯其行政の監督と叛逆の征討とに任じ、別に自己の直轄領を定めて自之に君臨し、新舊の政府、議會を並存

し、また新選の親衛を置きて、名けてオプリチュニキといひ狗頭を徽號とし帷章を佩びしめ、以て叛逆の追捕に任ず。狗頭は叛臣を獵り、帷章は賊徒を掃ふの義なり。斯る奇異なる組織の下に、七年(一五六五年乃至一五七二年)の間イワンは叛賊追捕の權を濫用し、苟くも疑はしき者は追捕誅殺して毫も寛假せず。故に誅殺の事蹟は傳はりてイワンの暴逆は後世史家の筆に殘りしも、その罪責の事由は明ならず。イワンの敵にして、その逆を鳴らす者の記するところすら人によりて同じからず。後世終に之を明にし難し。

斯くて暴戾殘逆なるイワンの恐怖時代は始まれり。當時の蹟を傳ふる正確なる記錄太乏しく、加ふるに敵黨の手になりし記事はイワンの滔天の逆を傳ふるに力めしなる可ければ悉く信じ難きも、尙慘禍の甚しきものありしは前後必至の事情より推してその實たるを知る可し。莫斯科の大卑涉聖フィリプがオプリチュニキと有罪者とを和解せんとせし爲に廢せられたり、否殺されたりしと、イワンの弟イウリの夫人アレキサンドラ、ウラヂミル公その母エウフロシネが叛逆罪に問はれて死せしと、ノヴゴロドの貴族黨勢を得て門戸を開きて波蘭王を迎ふるの恐あり

しに由り、其民千五百餘の誅殺されしと、一五七一年莫斯科の紅場(クラスナイア・プロスチャド)にて莫斯科、ノヴゴロドの人士多く誅せられ、新にイワンの寵任を得たりしボアチェムスキ、さてはパスマイフ家の一族も亦免れ得ざりしと等は、イワンが盾行中の大事變として數へらるゝものなり。パスマイフは父を斬らざるを得ず、プロゾロフスキは其同胞を誅せざるを得ざりき。八百人の婦女は溺らされ、死者遺族は財を藏する地を指示せざるを得ず。斯くて誅殺せられし數は、イワンが爲に罪キリル寺に祈禱を命ぜし記錄に由るも三千四百七十、中に就きて名の傳はる者九百八十七。その名の下に、及び其妻子、其女若しくは其男と附記せるを見れば、當時の露西亞家族的關係の重きを見る可く、所謂全族夷滅(ゲンオロド)の禍ありしを證す可し。但ウラヂミル公子の誅せられしとき、其罪諸子に及ばざりしは瞭あり。此他カザリン及及其二子、之を救はんとせし十人、コルメンスキ村の二十人など記せるは、かのノヴゴロドの千五百五人とともに、團隊緣故の併せ誅せられし例なりとす。古來慘虐を過するは畏怖の心に出て怯懦の情に由る。イワンも亦然り。居常自安んずる能はず、毫も他に信賴するところ無く、或は軍に望みて部下の衆の

己を害せんを恐れ之を捨てゝ走り、或は誅殺せし貴族の亡靈を見る。故にそのアレキサンドロスキに在るや、常に寺院に參籠し、朝に鈴を鳴らし、夜は終夜侍者を覺まして祈禱を爲し、自正教を誇りて聖典の全部を暗誦すと稱せらるゝも、震寫の聖典ありといふも、皆此畏怖の心に出づ。一五八一年ヂリヤニアのオストログにて刊行せしイワン手寫の聖典は、今現に英吉利博物館に存して、ホルセー其上に署して曰く、「此スラブ語の聖典は帝室の圖書館に得たり」と。三千五百に及んとせる誅死者の爲に聖キリル寺に祈禱を命ぜしも、ホルセーの日記に、ブスコフ、ノヴゴロドを屠らんとして巫者ミクラの咒嚇に畏れしも、皆イワンが內心自安んぜざるに出て、一五七〇年、國中若し畔かば英吉利に奔りて希臘正教を奉ずるを得んとの約を、英吉利女王エリザベスに結びしも、さては翌年遺命して死後の事を諸子に命ぜしも、ともに畏怖の情に馳られて、安慰なかりしを證せり。然りと雖も、前にいへる如く、正確の記錄缺け、誅殺の因明ならず、敵黨の弄筆多きこの暗黑なる恐怖時代の所傳は、悉く信ず可からず。後世の史家言を極めてイワンの橫逆殘忍の罪を鳴らすと雖も、イワンをして自辨ぜしめば事此に出でざれば己む能はざりしなり。故に罪ひとりイワンに在らずして之を助けて虐を爲しゝマリウタ・スクラトフ一輩の上にも、貴族の上に、反對者の上にも在り。假令イワンの命を以て誅殺は行れしも、その間に居りて排擠陷構を逞うせし貴族はその責を分たざるを得ず。イワンの貴族を虐殺せし如く、下民を虐殺せし貴族の罪亦論せざるを得ず。而して蒙古以來誅殺の風俗を爲したりとは西洋史家の排東主義のみと貶す可からざるか。故にイワンをのみ責むるは史家の正見に非らず、斯る虐主をして虐を行はしめしは、露西亞の禍のみ。

四、イワンと波蘭、哥里米

イワンの宰臣と離れしはリヂニア征討の議に決し、復報の虐を斷ぜしは、叛臣の波蘭に奔りしに始まる。故に國中に恐怖時代を呈するに當り、國外にてはリヂニア及び其後援たる波蘭と戰へり。リヂニア武士は波蘭王の後援ありながら連りに敗れて城地を失ひ、有名なる北歐の教門武士團は殆んど瓦解し、エセル島は自嗹馬に賣り、レヱルは瑞典に歸し、リヂニアは波蘭の有と爲り、團長ケットラーは自クルランド、セミガリアを保有して、のちに世襲公領と爲せり。故に波蘭の外、リヂニア

の爭をつぎて露西亞と爭ふ者なし。露西亞乃之を討ち、一五六三年イワンは大兵を發してリガの商路を扼するドキナ河上のポロックを陷れ、その民數萬を擄にす。波蘭王之を救ひ、露軍をオルカに破りしも、一五六六年休戰を求む。イワン乃僧徒、リトワニア邊陲の貴族、莫斯科、スモレンスクの賈客等三百三十九員を會して和戰を議し、その決議に由りて波蘭の請を斥け、更に戰を繼ぎ、四年を經てはじめて休戰を約したり。史家此會議を以て、獨裁戻虐なるイワンの業に似ずとして奇異の感を記するあり、また是イワンが兵と資とを得んための謀略なりと爲す者あり。しかもイワンはリヴニアの直ちに併す可からざるを知り、嗤馬公マグヌスをリヂニア王に封じ、さきに誅せしウラヂミル公の女を以てこれに嫁し、以て附庸と爲す。マグヌス王名ありて王權なきを悅ばず、イワンを謀らんとせしかば、廢せられ、エンデンはイワンの手に陷り、マグヌスが置きし成兵は盡殺せられたり。

此間に波蘭王シギスムンドは哥里米汗と通じて露西亞を圖るを忘れず、汗も亦波蘭と始終す可きを知る。イワンは汗を屈してキエフを取りドニエプル河上に市邑を置く。既に蒙古の三國を亡ぼし、イワンが將に哥里米に臨まんとするの意見る可く、嚮にカザン、アストラカンを救はんとせしスタンブール(コンスタンチノープル)のセリム二世が如何に此際に處すべきや亦明なり。一五六九年土耳古のカシム・パシア兵一萬六千を以て哥里米汗の五萬を助けてアストラカンを圖みしが拔けず、長圍、冬陣を張らんとせしも、軍中變あり、圍を解きて歸り、途上に殆んど其衆を失ふ。のち二年、哥里米汗デウレト・ギレイ兵二萬を以て來り侵し、恰かも無人の境を橫るが若く、オカ河を渡りて直ちに莫斯科城下に迫る。キルス・フレッチルの傳ふるところに據れば、「露帝イワン・ウシロヰチは汗を邀擊せんため軍を率て行きしも途異りて相遇はず。想ふに帝は汗と戰ふを欲せず、寧ろ之をして都中の貴族を屠せしめんと欲せしに似たり。汗は火を都府の外廓に縱つ。慘狀推して知る可し」と。史家或は想へらく、露西亞の貴族內應する者ありて汗の入寇を致しならむかと。英使ホルセーの日記は汗の莫斯科來襲を記する明快なり。曰く。

「敵は大都莫斯科に迫り、露帝は二皇子と財寶、家族、臣從、兵二萬を從へて六十哩を隔てしトロエツ(トロイツァ)に遁る。敵乃火を聖汝寺に縱ちしに、大風興り、悉く府中の寺院宮殿屋舍を燒き、焰燒六時間、多くは檜柏の材にて構へし府中、府外三十哩の都城

一炬に烏有と化し、數千の男女老幼之に死し、石造の寺院に難を遁れし者太少く、莫斯科の河流壕塹は什器貨財を以て埋められ、水中に禍を免れんとせし者も溺れて死す。のち附近の民衆四方より集まり生存者と與に貨財を收むる者相踵ぎて絶えず。府中の大道陋巷死屍の惡臭鼻を衝く者久し。然るに暴惡なる皇帝は其兵を擁し、府中の火を傍觀して、府外四哩なるシモン寺に在りて救はず、却りて火を遁れし府民の資財貨物を奪へり』と。當時莫斯科の死者八十萬といひ汗の爲に擒へ去られし者十萬に上るといふ外人の記錄は舖張に失したりとするも、其數決して少からず。實に『慘狀推して知る可きなり』。汗の去るや、書をイワンに與へて曰く、『予はカザン、アストラカンのために所在を燒き、到る所を奪へり。予は來りて莫斯科を燒きたり。予は卿の冠と頭とを獲んと欲せしに、卿隱れて出でず。卿は戰を避けて、なほ莫斯科のザーと稱す。卿、予と和せんと欲するか、則ちカザン、アストラカンを致す可し。若し唯償金を輸せんとならば、全世界の富を致とすとも、予に用なし。予が要するところはカザンとアストラカンなり。予は卿の國に入るや、之を見、之を知れり』と。翌一五七二年汗の南にかへるや、ミハイル・ヴロチンスキはこれにロバスニア河岸にあひて、全く之を破れり。

哥里米汗の露西亞と爭へる間に、一五六九年ルブリン合同條約成りて波蘭とリトワニアとは茲に全く合一し、波蘭の王威は內に衰へたるも、國力は外に張れり。此年王シギスムンド・アウグスト二世殂したるに、ワルシァワの貴族は、波蘭、露西亞がともにスラブの國にして、抗戰遂に絶えざるを視、イワンの子を迎立して二國を合せんと謀る。然るにイワンは此機に乘じて自波蘭王を兼ねんと欲し、甘言を以て波蘭の使節ヴロバイに說き、己を王とせば能く其法令を監し、其自由獨立を保護し擴張せんといへり。されどワルシアワに於ける佛蘭西使節は能く君命を辱しめずしてアンジュ公ヴロアのアンリは波蘭王位に即きぬ。しかもアンリは久しく波蘭に留まる能はずして西に歸り、新國會はまた兩黨の爭鬪場と爲れり。こゝに於て波蘭の王位を得しはトランシルワニアのステフェン・バトリなり。バトリは年少にして氣銳、また老境にあるイワンを恐れず、リヴニアを爭ふのみならず、嘗て露西亞に陷りし市邑をも克復せんとす。乃急に攻めてまづポロックを奪ひ、翌年に亘りてしきりに露西亞の諸市を取る。瑞典のデ・ラ・ガルヂ之に應じてカレリアのゲ

ソルムを取り、エストニアを征す。一五八一年バトリはプスコフを圍み、デ・ラ・ガルヂはサルヴ、イヴァンゴロド、イアム、コポリを取りしが、イワン・シウイスキ、プスコフに據りて固守してバトリをして一歩を出でしめず。されどイワン春秋既に高きを以て調停を羅馬に求め、法王グレゴリオ十三世は耶蘇會士アントニオ・ポセヴノを使者として莫斯科に遣り、二國の間を和解し、かねて希臘羅甸敎會の勸解を試みしむ。使者宗敎上の和を爲し得ざりしも、兩國の爭を停め、これによりてイワンはポロック以下悉くリヴニアの地を波蘭にかへせり。時に一五八二年にして、三十年來の征圖空しく、バルト海上に出づるの壯擧は更に、彼得大帝の力を待つに及べり。

善し西の方バルト海に出でんとするは、のち一百五十年を經て、彼得の智勇を以てするも尙二十五年の苦心焦慮を要せり。イワンが國內の紛糾せる事情を以て此擧に破れしを見て、その前半世にカザン、アストラカンを取りしに比し、後半世の失敗と爲すは正論にあらず。カザン、アストラカンは衰亡の餘喘を保つ蒙古の餘孽にして、その兵器、武略、訓練等もとより波蘭瑞典、リヴニア等のそれと同日の談に在らず。若し前半世と對比す可きを求めん歟、なほ西に英吉利と白海の交通あり、東

に哥薩克の西伯利亞征服あり。後半世の業亦全く失敗せりと謂ふを得ざるなり。否、その晩年東西に端緒を解きし二事は後來露西亞の膨脹に至大の關係あるを以て、最も意を注ぐ可き要事と謂ふ可し。

五、露英の交通、西伯利亞の征服

百年の果は自百年の因あり、自然の運は輕々に動かず、來由する徑絡自明劃なるあり。露英の爭抗は近世世界史上の大事變なり。露西亞の東方侵略も亦世界史上の一大事變にして、わが邦との關係今日の如きに至れる、實にその東侵の結果と謂はざるを得ず。而して此二大事變は十六世紀に於てイワンの世、夙にその緒を解きしなり。

露西亞は今や支那帝國を壓して極東に跳梁す。西伯利亞の征服がこの東侵の先途を開きしは言を待たずと雖ども、西の方英吉利との關係が、なほ英吉利東征の畢に繫りしは寧ろ奇ならずや。昔、タキッスの世界の地理を述ぶるや、大地の四周に不動靜止の海洋ありて、此洋上に人は朝陽の昇る天音を聽き得可しといへり。十五世紀の末葉以來、西歐羅巴の諸國爭つて東洋航路を探り、葡萄牙は東し、西班牙

は西する、共に東洋に達するを希ふに出づ。英吉利亦此風尚に後れず、一面には西北の海路を探るとともに、他面にはサー・ヒュー・ウィルービー、リチャード・チャンセラーをして三船を率ゐて東北の航途を求め、ダキッスの説きし海洋を經て東方に出でしむ。一行、東北に航してスカンヂナヴィア半島に至るや、ヴルデアース附近にて颶風に遭ひて相失し、キルービーの率ひし二船は白海の一灣に破れ、人死せしも、チャンセラーはエドワルド・ボナエンツラ號を以てドヰナ河口に漂着せり。時に一五五三年にして、チャンセラーは直に上陸して莫斯科に至り、イワン三世に見え、國王エドワルド六世が天涯過るところの君王將吏に與ふるの書を呈す。イワン悦び見て、之を黄金宮に宴し、答書を與へてドヰナ河口に通商を許可せり、此の如くにして後世南北の兩對敵たる英、露兩國ははしなく交通を開きそめき。

チャンセラー一び英吉利に歸り、此時女王メリー・チュドル位に在りて西班牙王フェリペス二世を夫とせしかば、その特許をうけて一五五六年再び露西亞に至り、イワンよりコルモゴリデログダにて通商の特許をうけ、露西亞の使節デログダ大守オシプネペアを伴ひてかへる。途上風浪の難に遇ひ、チャンセラー父子を始とし海員殆

んどみな死し、露西亞使節の贈遺貨物は地方土人に奪はれしも、使節ネペアは身を免うして一五五五年三月の末倫敦に入りたり。此の間にステフェンブルローは東方に航し、サモイの沿海よりノヴゼムブラ、ヴイガツ諸島に達しぬ。時に豪膽なる英人アントニー・ジェンキンソンといふ者、英吉利が地中海上に弱をエネチアと爭ふ能はざるを慨し、露西亞を經て東方に通ぜんと志し、一五五七年至りてイワンに謁し、宴を賜たり、その東方諸公に與ふるの書を得、一五五八年四月アストラカンに之き、ヴルガ河を下りて裏海に出で、辛慘を嘗めて不花剌に達し、次て一五六二年裏海を渡り波斯に着し、シェー・タマスに國書を呈す。然るに波斯王は土耳古、エネチアと善かりしかば、その言を納れてジェンキンソンを遇すること頗冷なり。翌年ジェンキンソンは英斯科に歸り、シルワン、グルジア等が莫斯科朝に歸向せんとする意あるを奉答せり。しかも英吉利は此一行によりて東方の安からざるを知り、東征の念を斷ちて、唯露西亞と通商交易せんことを請ひしに、イワンはジェンキンソンの功を多とし、許すにドヰナ河よりオビ河に至る北方諸河川の地に通商し、プスコフ、ノヴゴロド、ニジニノヴゴロド、カザン、アストラカン、ナルワ等諸市府に來往することを以てす。斯く

て英吉利人は露西亞の通商を獨占せしが、のち荷蘭人の之に變るに及び、英吉利女王エリザベスはイワンに抗議して、蘭人の通商を禁ぜんとを求めたり。英、露の交通こゝに到りしものはジェンキンソンの功多きに居る。ジェンキンソンの旅行見聞記は當時露西亞の狀態を描きて最貴重なる記事多し。

イワンは既に英吉利と通商の約を結びしも、以て足れりと爲さず。內臣僚貴族と相札り、外北歐諸國と爭へるものから、エリザベスに使を遣はして、共敵たる波蘭、瑞典に對して攻守同盟を結ばんとを求め、兵衆軍資を以て相助け、若し一朝危急あれば互に庇護す可く、叛離の臣は執へ致さんとを約さんとす。然れどもエリザベスは『天祐によりて國內斯る憂なければ』とて此約を拒み、たゞイワンにして國を失はゞ來投を許るさんとの祕約を爲せり。イワン憤り、一び英吉利商賈の貨財を沒せしが、のち意解けて之を過ぐる素の如し。エリザベスも亦つねに露西亞に好意を表し、その使節として露西亞に駐まりしジル・フレチャーが歸國の後『露西亞共和政』（一五九一）を公にして露西亞の弊を說くや、之を禁じて行はしめず。イワンはまた英吉利に娶らんとせしとあり。イワンの第一妃アナスタシア・ロマノフの

逝くや、一五六一年イワンはチェルケスの君テムグルクの女マリアを立て、八年を經てマリア逝きて子なきやノヴゴロドの商賈の女マルファ・サバキナを納る。マルファ年を出でずして逝く。イワン乃アンナ・コルトヴスカイアを立てしも、數年にして廢して尼寺に入らしめ、アンナ・ウシリチコヴ、ワシリサ・メレンチエワ、フェオドル・ソガイの女マリア等を立てゝ妃と爲せり。此に及びマリア・ノガイも長逝せしかば、イワンは婚を英吉利に求め、ハンチンドン伯の女メリー撰に中りしが、メリーは之を厭ひエリザベス女王に乞ひて婚を拒み、時に露西亞に使節たりしジェローム・ボーエが、イワンの親任篤かりしかば婚姻の成り難きを云ひて事僅に已めり。英、露兩國の關係漸く密なるを見て、佛蘭西の商賈も國王アンリ三世の書を得て來りイワンに見え、莫斯科に居留し、荷蘭、西班牙、伊太利亞諸國の使者亦至りしが、遂に英吉利のまづ至りて最親しく最利權を得しに對抗し得ざりき。バルト海に出てゝ西歐羅巴諸國と交はらんとして失敗せしイワンが、斯く偶然に英、佛諸國の交通を得しは想外のことに屬するも、斯く修交の始に親善なりし露、英の兩國は後來東方に雌雄を爭ふの勁敵たる可しとは、互に夢想だも爲さゞりしならむ。

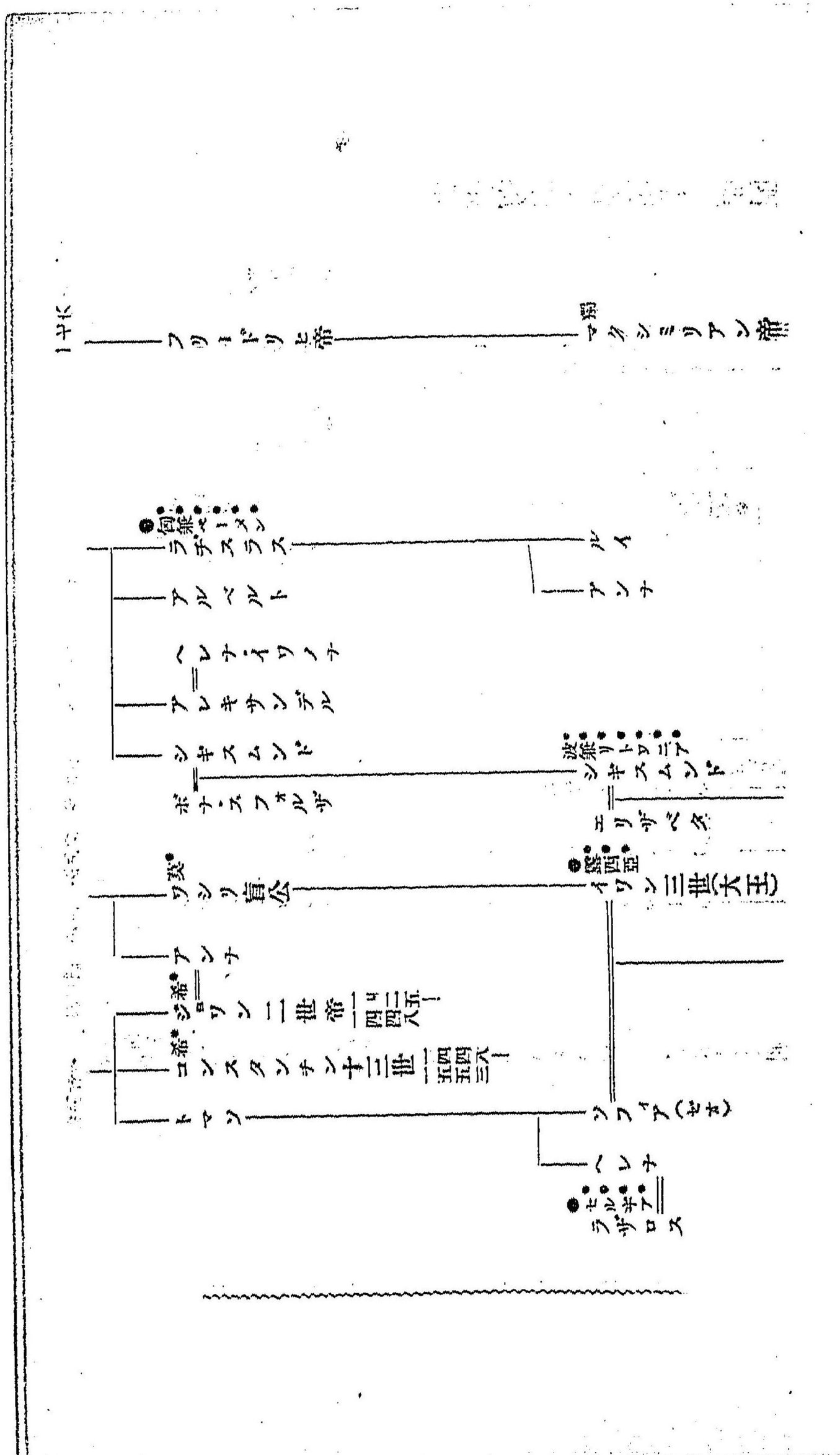
西は英吉利との通交開くるに方り、露西亞は東は西伯利亞の征服に着手せり。一五五八年ノヴゴロドの名族グレゴリ・ストロゴノフはイワンよりカマ河岸の曠地九十二哩を得て、一族と與に聚落を爲し、ウラル嶺下に採鑛の業をはじめ、漸く悉畢利汗國の境に至る。悉畢利汗國は東北はウラル嶺オビ河に至り、南はノガイ領に及ぶ蒙古の小汗國にして、今のトボルスク附近の悉畢利府に都す。ストロゴノフ家乃其地を併呑せんと欲す。時にドンの哥薩克はしば〳〵オルガ來往の行旅を剽めて罪を獲しが、是に於て賊首の一、エルマク・チモフェヰチはイワンの赦免をうけ、ストロゴノフを助けて悉畢利を經略せんとす。『われこそ、ドンの賊魁なれ。カスピアの青海原こえて往來に船を荒らしゝわれ、今わが正教の君（ザー）にわが元を捧げむ、元とともに悉畢利の國土を捧げむそ望なる。正教の君（ザー）宣はく、恐ろしのイワン・ワシリヰチ宣はく。噫、汝、ドンの勇士の主魁、チモフェイの子のエルマクか。咲汝を赦す、汝の夥を赦さむ。汝が忠義の爲に汝を赦して、汝にながく光榮あるドンを賜はむ』と。これ露西亞の古謠に歌はれしエルマクなり。露西亞、哥薩克、蒙古、獨逸、波蘭の俘囚合せて八百五十を率て、エルマクはウラルの嶺を超え、火器を以て土民を

威嚇し、前人未踏破せざるトボルの深林を横り、迹りに悉畢利汗クチュームを破りその都城を陷れ、その從弟マメトクールを虜にし、イルチシュ・オビ兩河の地を定め、以てイワンに献ぜり。イワン乃卑渉僧侶を遣りて教法を傳へしめ、また不花剌と通交をはじむ。一五八四年エルマクはイルチシュ河に溺れ死せしも、その身は永く英雄として崇められ、教會に於ては聖徒に列せられ、名は詩篇に遺りぬ。さばれ更にその名を不朽ならしめしは、其經略せし地は露西亞東侵の門戸と爲り、悉畢利の名はのち遂に北亞細亞一帶の總稱と爲りて西伯利亞と稱せられし事是なり。後來露西亞がながく亞細亞北邊の警たる、實に此に胚胎せり。

エルマクの溺死せし年、イワン四世亦逝きぬ。外征に於けるイワンは祖父イワンの如き赫々の勳なかりき。而も西は英吉利と通じ、東は西伯利亞の征服をはじめて史上の大事を治世に繫けたり。內政に於けるイワンは、前半世は攝世、朋黨、寵人、外戚の爭奪に苦しみ、後半世は君臣の乖離、殘忍の誅殺に鮮血腥く、露西亞のネロなる醜名を青史に殘せり。而もなほ露西亞史上に記載す可き績なきにあらず。國防の爲にストレリツ（またストレルチ）を置き、險要に邊塞を配せしはイワンなり。

英吉利と通商をはじめ外人を招聘し、兵士醫人を用ひしもイワンなり。一五五四年カザン征服の紀念として建設せし聖バシリの伽藍をはじめ、莫斯科に幾多の寺院宮殿を造營せしも亦イワンなり。新に法令を布き教會の規定百ヶ條を布きしイワンは、また始めて印刷處を開きたりき。一五五三年、イワンは莫斯科に印刷術を採用し、イワン・フェドロフ、ペテル・ムスチスラゴトを用ひて之に當らしめ、はじめてアポストルと題する書を印行せり。然るに書寫を業とする者、迷信を利用して之に反抗し、之を保護せし莫斯科教長マカリウス、一五六四年に示寂してのちは、フェドロフ等露西亞を去りて波蘭に入り、露西亞の印刷術中絶せしは惜む可し。かのイワン震寫の聖典がオストルグにて印行されしも此故なり。一五五一年アダシェフはじめて府民商賈をして貴族僧侶と與に國事の議決に參せしめしはイワンなり。シルエスの時、始まりし教會の改革は一五七三年の會議に於て完く、富有なる寺院の土地兼併を禁じ、一五八〇年の會議にては悉く寺院の兼併を停めたり。十六世紀の露西亞に紛爭の絶えざりしは、家族的關係、社會の重大要素を爲し、一貴族の盛衰は一門一家の汚隆と爲り、祖先子孫の榮辱を別つ所以なりしに因る。筌銃鼎鑊を以て之に臨むも相爭ふて已まざるはこれが爲のみ。稱して祖先爭(ミスニチエストヴ)といふ。イワン乃一門の長者にあらざる者の位地を爭ふを禁じて此弊を拯へり。イワンはまたカルギン、ルーテル派の教會を莫斯科に建つるを許せし人なり。之れをその迹より論じて殘虐の暴主といふも、イワンはなほ一偉器たるを失はず。見よ、十六世紀の歐羅巴諸國の君王を。ヘンリ八世、フェルナンド加特力王、メヂチのカタリン等、孰かイワンに比して大に優れたりとせむ。況んや露西亞は此等に比すれば後進新興の國、文化未開の治世なるをや。しかも殘暴の主は殘暴を以て終れるなり。イワンつねに鐵鞭を以て意に滿たざる者を打つ。一日長子其旨に忤ふや、また之を打ちて死に致す。イワン恨悔して已まず、憂愁して病み、一五八四年に殂落せり。詩謠あり。イワンの最期を咏ず。曰く『明月何ぞ照らすと古の如くならざる。神聖なる露西亞に照らしゝが如く。石造の莫斯科に。黄金のクレムリンに。ウスペンスキの伽藍に。鯨音殷々天地に轟き、侯伯悉く來り會し勇士悉く集る。ウスペンスキの伽藍に神に謝らんがため。見よ、扁柏の新棺に、正敎の君、恐る可きイワン・ウシリキチ横

棺の周囲には恐れ慄く。
下には永訣を冠、脚下には恐れ慄く。
し、ともに永訣の讃唱を為
に劍に怖く。
ともに永訣の讃唱を為
金の冠、脚下には恐れ慄く。


ヘラクレイオス
ヘラクレイオス・コンスタンティノス
ヘラクレイオス・ニューストリアヌス
ヒラクレオナス
ヘラクレイオナス
ヘラクレオナス
ヘラクレオス
ヘラクレス
ヘラクレス・ニューストリアヌス
ヘラクレス・ムスタファ
ヘラクレス・ムスタファ・ニューストリアヌス
ヘラクレス・ムスタファ・ニューストリアヌス・ヘラクレス
ヘラクレス・ムスタファ・ニューストリアヌス・ヘラクレス・コンスタンティノス
ヘラクレス・ムスタファ・ニューストリアヌス・ヘラクレス・コンスタンティノス・ヘラクレイオス
ヘラクレス・ムスタファ・ニューストリアヌス・ヘラクレス・コンスタンティノス・ヘラクレイオス・コンスタンティノス
ヘラクレス・ムスタファ・ニューストリアヌス・ヘラクレス・コンスタンティノス・ヘラクレイオス・コンスタンティノス・ヘラクレイオス
ヘラクレス・ムスタファ・ニューストリアヌス・ヘラクレス・コンスタンティノス・ヘラクレイオス・コンスタンティノス・ヘラクレイオス・コンスタンティノス
ヘラクレス・ムスタファ・ニューストリアヌス・ヘラクレス・コンスタンティノス・ヘラクレイオス・コンスタンティノス・ヘラクレイオス・コンスタンティノス・ヘラクレイオス
ヘラクレス・ムスタファ・ニューストリアヌス・ヘラクレス・コンスタンティノス・ヘラクレイオス・コンスタンティノス・ヘラクレイオス・コンスタンティノス・ヘラクレイオス・コンスタンティノス
ヘラクレス・ムスタファ・ニューストリアヌス・ヘラクレス・コンスタンティノス・ヘラクレイオス・コンスタンティノス・ヘラクレイオス・コンスタンティノス・ヘラクレイオス・コンスタンティノス・ヘラクレイオス
ヘラクレス・ムスタファ・ニューストリアヌス・ヘラクレス・コンスタンティノス・ヘラクレイオス・コンスタンティノス・ヘラクレイオス・コンスタンティノス・ヘラクレイオス・コンスタンティノス・ヘラクレイオス・コンスタンティノス
ヘラクレス・ムスタファ・ニューストリアヌス・ヘラクレス・コンスタンティノス・ヘラクレイオス・コンスタンティノス・ヘラクレイオス・コンスタンティノス・ヘラクレイオス・コンスタンティノス・ヘラクレイオス・コンスタンティノス・ヘラクレイオス
ヘラクレス・ムスタファ・ニューストリアヌス・ヘラクレス・コンスタンティノス・ヘラクレイオス・コンスタンティノス・ヘラクレイオス・コンスタンティノス・ヘラクレイオス・コンスタンティノス・ヘラクレイオス・コンスタンティノス・ヘラクレイオス・コンスタンティノス
ヘラクレス・ムスタファ・ニューストリアヌス・ヘラクレス・コンスタンティノス・ヘラクレイオス・コンスタンティノス・ヘラクレイオス・コンスタンティノス・ヘラクレイオス・コンスタンティノス・ヘラクレイオス・コンスタンティノス・ヘラクレイオス・コンスタンティノス・ヘラクレイオス
ヘラクレス・ムスタファ・ニューストリアヌス・ヘラクレス・コンスタンティノス・ヘラクレイオス・コンスタンティノス・ヘラクレイオス・コンスタンティノス・ヘラクレイオス・コンスタンティノス・ヘラクレイオス・コンスタンティノス・ヘラクレイオス・コンスタンティノス・ヘラクレイオス・コンスタンティノス
ヘラクレス・ムスタファ・ニューストリアヌス・ヘラクレス・コンスタンティノス・ヘラクレイオス・コンスタンティノス・ヘラクレイオス・コンスタンティノス・ヘラクレイオス・コンスタンティノス・ヘラクレイオス・コンスタンティノス・ヘラクレイオス・コンスタンティノス・ヘラクレイオス・コンスタンティノス・ヘラクレイオ

第六章　莫斯科時代の社會、風俗、文物

一、

古今の事變一として利弊表裏せざるなく、趨勢稍もすれば一極より他極に奔る。能くその中を得て止まる莫し。盛極まりて衰其間に胚し、利を得しところ過れば害因を托す。莫斯科時代の露西亞專制の極に達せしも此理に外ならず。例之ば西班牙の民は固く基督教を奉じて痲哥末教徒を攘ひ得しが、その餘弊は敎熱に狂せり。露西亞の割據鬪爭は蒙古侵略の禍を招きしかば、之に懲りて地方の權を莫斯科に集めしに、能く蒙古を攘ひ得しもその餘習は抜く可からざる專制君治を致せり。當時露西亞の民は地方に散じて交通開けず、文物熾ならず、未野習を脫せず。以て君權に抗す可からず。加ふるにその強を憚れるリヲニア、波蘭、瑞典、哩馬等は、此民にして西歐の文明に接し、利器を用ひなば、益隣境の患たる可きを慮り、力めて文物宣傳の門戸を壅弊せんとせり。されば敎養なき貴族僧侶を藏き、見聞の智進まず、合同の力乏しき未開の民を制御せる莫斯科の政令は專制ならざるを得ず。

且十六世紀の此民はながく蒙古の專制に屈して未新文明を得ず、歐羅巴諸國と雖もなほ君王神權の風尚已まざる日に在りて、專制の治下に屈せしは惟しむに足らざるなり。

されば帝（ツァーリ）は一國の父にして蒼生の主、臣從も資財もみな帝の有、大小の侯伯吏員はみな帝の僕隷にして、其專權の威は蒙古の汗に超え、スタンプールの櫻里丹にも過ぎたり。故に臣從の帝に見ゆる戰々兢々として唯その怒に觸れんとを恐れ、叩頭（ビタ）して事を奏し、まづ罪を謝して辭を發す。滿朝の人一語を爲さず、一たび眼を閉づれば身は寂として曠野に在るの感ありとは、當時莫斯科朝に使せし外人の言なり。帝の國土を視る一私領に異ならず、家人を以てその政を執らしむ。侯伯の子の仕途を求むる、或は內侍（スツルニキ）として或は記室（ストルニキ）として仕へ、漸く進みて侍從（オコルニシエ）と爲る。ボヤールより成る議政會（ドゥーマ）は君主の室に會して君主の裁決を仰ぎ、國家の大事あれば上下諸階級の委員を徵して總會（ソボル）を開く。總會は稍國會の體を具すと雖も、露西亞の貴族側なるを許るさず。帝の妃を冊する遍く州縣市邑の守令に令して、一國の美を抜き、貴種を采らしめ、中に就きて簡抜す。ワシリ・イワ

ノキチの妃を立つるや、國中の美女集まるもの千五百、その五百を抜きて莫斯科に送りしに、太公選して三百を抜き、百を抜き、十を抜き、醫と裘をして最美にして最健なるものを採らしめて妃と定む。外戚は帝の至親として、利福權勢帝室に亞ぎ、能く國事を左右し政治に參畫し得るを以て、不利の地に立つ者は或は新主を弑して妃に及び、以て權勢を爭奪したり。君王の郎從は征戰、裁斷の外は與らず、文筆のことは舉げて外記に任ず。外記は概ね僧侶商賈の子弟にして、そのはじめ書皁しきも、のちには大事を左右するに至る。國中の行政は二三十の掌司ありて其數と職掌とは時によりて異なり。大膳職、造酒司、金銀杯司、衣裳司、馬寮、鷹司、主獵司、遊戲司等あり。また君王の專權せる錦繡絹紬、さては貴重なる西伯利亞毛皮を掌るブリカヅ・カゼンニイあり。大藏司、主稅司、飲料稅司等は財政を掌り、また皇室の事を掌り、秘密の事件、請願の事件、郵便、警務、造營、奴僕、寺刹、城堡、使節接待等各みな掌司あり。ウスチウグー、カヅン、ガリチ、コストロマ、小露西亞、西伯利亞等は特にその掌司ありて地方の行政事務を掌れり。されば一國の政府は君王一家の治に過ぎず、職官の制之を明にせり。

當時國家の財源は數種あり。卅六城市、その附近采邑の收入は其一なり。此等采邑の民は金穀物資を以て賦稅を納るゝなり。タグラと稱し穀物の每六十俵に年每に課する所得稅はその二なり。ボグテと名くる戶稅はその三なり。關稅はその四、公混堂の稅はその五、公館の出租はその六、裁判所の罰金、官沒の物資は其七なり。後來ボリス・ゴヅノフの世、露西亞に使せしフレチァの言に據れば歲入の金額は百二十二萬三千留に上りしといふ。年每に悉畢里、ペルミア、ペトコラ地方より貢する毛皮其他の土宜は此外にして、之を土耳、古、波斯、アルメニア、不花剌等の商賈に沽却して帝室の收入と爲す。帝はまた其種の商益を擁し、使を四方に派し毛皮蠟綿等を强て低廉に買ひ上げ、アルカンゲルの英商若しくは亞細亞の商賈に賣りて利を射、外國の物貨を民間に專賣して益を圖る。是みな財源の一方便たり。

裁判には地方の百人組合裁判、所各州首都の裁判、莫斯科の高等裁判の三階あり。法律はイワン第三、同第四等の法あるも、紛糾錯綜、殆んど、露西亞に成文律なしといふに至れり。裁判の手續は恰もカロリンガ朝の西歐の俗に似て、目證若しくば文書の證據なきときは神誓を爲さしむ。神誓は多く比武によりて決す。然るにそ

ノキチの妃を立つるや、國中の美女集まるもの千五百、その五百を抜きて莫斯科に送りしに、太公選して三百を抜き、二百を抜き、百を抜き、十を抜き、醫と婆をして最美にして最健なるものを採らしめて妃と定む。妃定まれば名を改め、男も亦名を改む。外戚は帝の至親として、利福權勢帝室に亞ぎ、能く國事を左右し政治に參畫し得るを以て、不利の地に立つ者は或は新主を弑して妃に及び、以て權勢を爭奪したり。君王の郎從は征戰、裁斷の外は與らず、文筆のとは擧げて外記に任ず。外記は概ね僧侶商賈の子弟にして、そのはじめ甚卑しきも、のちには大事を左右するに至る。國中の行政は二三十の掌司ありて其數と職掌とは時により異なり。大膳職、造酒司、金銀杯司、衣裳司、馬寮、鷹司、主獵司、遊戲司等あり。また君王の專權せる錦繡絹紬、さては貴重なる西伯利亞毛皮を掌るプリカズ、カゼンニイあり。大藏司、主稅司、飲料稅司等は財政を掌り、また皇室の事を掌り秘密の事件、請願の事件、郵便、警務、造營、奴僕、寺刹、城堡、使節接待等各みな掌司あり。ウスチウグー、カザン、ガリチ、コストロマ、小露西亞、西伯利亞等は特にその掌司ありて地方の行政事務を掌れり。されば一國の政府は君王一家の治に過ぎず、職官の制之を明にせり。

當時國家の財源は數種あり。卅六城市、その附近采邑の收入は其一なり。此等采邑の民は金穀物資を以て賦稅を納るゝなり。タグラと稱し、穀物の毎六十俵に年毎に課する所得稅はその二なり。ボダテと名くる戶稅はその三なり。關稅はその四、公混堂の稅はその五、公館の出租はその六、裁判所の罰金、官沒の物資は其七なり。後來ボリス、ゴツノフの世、露西亞に使せしフレチアの言に據れば歲入の金額は百二十二萬三千留に上りしといふ。年毎に悉畢里、ペルミア、ペトコラ地方より貢する毛皮其他の土宜は此外にして、之を土耳古、波斯、アルメニア、不花剌等の商賈に沽却して帝室の收入と爲す。帝はまた其種の商益を擅し、使を四方に派し毛皮蠟密等を强て低廉に買ひ上げ、アルカンゲルの英商若しくは亞細亞の商賈に賣りて利を射、外國の物貨を民間に專賣して益を圖る。是みな財源の一方便たり。

裁判には地方の百人組合裁判、所各州首都の裁判、莫斯科の高等裁判の三階あり。法律はイワン第三、同第四等の法あるも、紛糾錯綜、殆んど、露西亞に成文律なしといふに至れり。裁判の手續は恰もカロリンガ朝の西歐の俗に似て、目證若しくは文書の證據なきときは、神誓を爲さしむ。神誓は多く比武によりて決す。然るにそ

の武を比ぶるや、甲冑重きため往々外人の爲に敗るゝことあり。或は代人を依頼するを以て徒らに傭兵の利と爲ることすらあり。負債の法は十二銅表時代の羅馬の法に似て酷に過ぐ。乃債務を怠る者は半裸體となり公場に繋せられ、一日に三度宛、三、四十日間笞たる。若し行人見て之を憐み代償せんといふ者あらば乃之に賣らる。妻子あれば之を傭用す、若しなければ身を以て債權者の奴と爲る。盜賊、殺人、反逆等の事あれば、嫌疑者は恰も西班牙に行はれし異端檢司の如き、重き拷問に遭ひ極刑に處せらる。その死に數等あり。絞殺、斬首、車裂、串殺(肛門より串に貫きて死に處す)或は氷下に溺らしめ、或は死に至るまで笞つ。夫を殺せし妻は生ながら埋められ、異端を信ずる者は火刑に處せられ、妖幻魔術を使ふ者は鐵匣中に閉殺され、貨幣僞造者は熱鐵を飲まさる。刑の極慘なるものは萬片と稱し、生ながら皮を削られ肉を削らる。然るに農民を殺せし貴族はたゞ課科笞杖の刑のみ。奴隷を殺せし貴族は罪の限にあらず。以て專制の意を見る可し。

露西亞に法敎司主(パトリアルケート)の制未行はれざるや、敎界の首班は莫斯科敎長にして、其下にノヴゴロド、ロストフ、スモレンスク、カザン、プスコフ、ヲロクダの六大卑涉あり。更

にその下にリアザン、トヱル、コロメンスケ、ウラヂミル、スズダル、クルチスキさては薩來の六卑涉あり。希臘敎會がビザンチオン帝室に隷せしが如く、露西亞の敎會も帝の保護の下に在れば、帝は意に任じて新に法使を置き寺領を定むるを得可し。露西亞にては清淨不汚の宣誓を爲し僧を黑僧といひ然らざるを白僧といふ、卑涉は黑僧中より撰ばる。その收入は巨大にして、その儀式は强制的なりと雖も、その敎養なき神の語をすら知らずと評せらる。白僧はたゞ結婚の權あるのみならず、また必ず結婚するを義務となし、その風俗敎養毫も常人と分つなし。その寺庵は甚多く、僧多く、產富む。例之ばトロイツァの聖セルギウス寺の如きは數萬の僧ありと稱す。然もこれたゞの農民に過ぎず。無賴の民縉流に投じて多く寺庵にかくると雖も、地方を荒廢する漂泊の僧は嚴戒を受くかくて寺庵はしば〳〵不良なる貴族の幽閉處と爲り、貴族はこゝに快樂の生活を送りき。イワン四世が嘗て白湖の聖キリル寺の僧に與へし書に曰く、『孤幼くして聖キリル寺に宿するや、食後るゝ時監察に魚類を乞へば答ふらく、予は此種の命をうけず、予は唯命ぜられし物を調へたり、今や夜なり、何物をも與ふる能はず、予は君主を恐る、然れども神を恐るゝを

更に甚しと、見よ何ぞ戒律の厳なるや。渠徒は、誠を語るに君前を憚らずといへる預言者の言を行ふ者なり。今や孤が臣カバロフ僧と與に之を訪ふや孤が臣メチェフは帝(ザー)の如くこの宣に在り、孤これ洗禮か。捕囚の身珍菓を咏ひ佳肴を食ふ。寺前食を啻ふるの屋あり。或は曰く強き飲料はシェレミチエフの室に密置せらると。外國の酒を蓄ふるは寺法の禁なり。想ふ、是何如の強水か』と。諷罵し得て痛快なりと謂ふ可し。

希臘正教は自由の刺戟なく訓養の激作なき爲殆んど空儀虚式に陥らんとす。酒度を求むる者はたゞながく供養禮拜の誦を聽聞し、多くスラブ流の禮拜をうけ、跪坐拜禮の度を重ね、しばし念珠を弄し、しまりに廟龕に詣するのみ。此徒が最神聖なる靈域と爲せるは、諸聖の不壞の五體を藏め、その繼嗣陽光を見ずして常住せりと爲す莫斯科の聖廟、さては白湖聖キリル寺、トロイツァの聖セルギウス寺、ノヴゴロドの聖ソフィアの伽藍等にして、莫斯科に在る聖彼得、聖アレキシスの墳、ウラヂミル、スモレンスク、チシンキン、ブスコフの不思議術ある處女等も世人の崇拜敬畏するところなり。また最信仰の念篤き信徒は、土耳古の征略以來殆んど荒殘に瞰したりと雖も、なほ神靈の蹟を遺せるアトス山、コンスタンチノポリス寺に巡詣するあり。否此に留まらず。更に遠く基督の聖墳を拜し、ゴルゴタを弔し、シナイ山に登る篤志の信者すらあり。

莫斯科の軍隊は主として騎兵なり。帝(ザー)室の禁衛は約八千にして、ストルニキスキの類はみな騎乘にして、その領邑の收入は郎徒(スルヂリイ・リウヂ)の費資に供するものなり。この上世のポメスチ(則フィフ)とヴォチニ(則クリー・アロテド)の別は今や廢れて殆んど見る可からず。而して此騎兵の數は約八萬、農兵を合して、全國の士衆は約三十萬に上る。之に加ふるに、ドン、レテク地方の哥薩克、蒙古、バシキルの騎兵等を以てす可し。國民歩兵は一に寺領采邑の民兵あり、ダトチュニ・リウヂといふ。二にイワン四世の時、新に置きしストレルチと稱する射手、莫斯科のみにても一萬二千人あり。之に亞ぐに砲兵あり。歩城(グリアイゴロド)木造の陣堡にて、動かし得可きもの)の兵あり。十五世紀以後、はじめて備兵を用ひ、波蘭、匈牙利、希臘、土耳古、蘇格蘭、スカシヂナビア等諸國の歐州式訓練をうけし兵衆、リッテルと稱して、露西亞の用を爲せ

り。日耳曼人ロゼン、佛蘭西人マルゲレトの如きは此の傭兵の首師にて、露西亞史上に名を留めし者とす。當時露西亞の武裝は全然東洋の風あり。長衣、高鞍、短鐙、立派なる馬甲、鎖鐶の甲冑これなり。帝（ザー）と雖も自ら刀槍を執りて軍に臨みしは當世風なり。その軍を行るや、分ちて前鋒、中軍、左右翼後殿の五軍と爲し、各軍に三奉行を置き、各部に千人長（チサツキ）、百人長、五十人長、十人長（ヂキアツキ）等あり、すべて奉行の約束によりて進退す。軍兵はみな各四ヶ月の糧を裹み、帝は殆んど兵士に給與するところなく、唯時に穀類を與ふる而已。

露西亞が外國と國際の交を修むるは十六世紀に、はじまれり。その外交は兵式と同じく亦東洋風の流を汲み、そのはじめて國外に大使なりしは、波斯に使せし希臘人ドミトリ・トラカニオラス、伊太利亞人マルコ・ルフォなりき。露西亞は國の大小と勢の强弱とを問はず、近隣を重んじ遠國を輕んぜり。則獨逸皇帝、佛蘭西、英吉利西班牙諸王には唯一廷臣（ボヂト）を使者とせしのみなるも、壤を接し境を隣れる瑞典、嗹馬、波蘭等へはボヤールにヂアスクを從へて使節と爲す。善隣修交の事務を司れる外使司には五十の譯官、七十の通辯ありて君命を辱しめず。その外より歸するや君前に召されて使命を復し、且途上に目睹耳聞せしところを奏して遺さず。外國の使節到るや、露西亞の朝廷は禮遇を怠らず、使節境に入るや宿舍を給し、馬車を供し、陽に好待すと雖も、また直に一監察を附し、使節をして苟くも國人と會談し、國情を外に報告する能はざらしむ。其莫斯科に入るや、帝（ザー）の一宮殿を宿舍に宛て、これを小面殿（グラナボヴイアパヴイア）に引見し、その國事を問ひ、其君王の起居を問ふ。前後厚遇を極むと雖も、若し使節にして一たび帝（ザー）の意にさからはば、宮殿は忽囚獄と變じ、また外に出づるを得ざるに到る可し。

二、

莫斯科帝國の民は三級よりなる。一は自由の農民、二は土着の農民、三は奴隷なり。自由の農民は他國の普通の民と異なるなきも、土着の農民は特に此國に見る可きものにて、恰も羅馬帝國のコロヌス・アドスクリプチウスと均しく、法律上一身の自由を有するも、實は貴族地主の田國に土着して、擅に他に移轉するを得ず、他の主に歸するを得ず。而して自由の農民ものち漸く實力を失ひて、幾くならずして土着農民と異るなき悲境に沈淪したり。奴隷（コーロフ）は乃羅馬のマンシピユウムにて、戰役

の捕虜、若しくは自身を賣りしものにあらざれば、則奴隷の子孫なりとす。三者の中、地方人民の大部分を占むるは土着農民なり。上世に於て地方の農民は自地主を以て居り、唯有事の日、軍資を補給するために貴族に附隷せしのみ。故に土地を有するものは個人にあらずして團體君王に租賦を納むるもの、領主に義務を負ふものは團體なり。團體の個人に對する權力はやがて團體を代表するスタロスト(吏員)の掌中にあり。乃見る、帝(ザー)は全國の主權を握り、スタロストは地方の主權を掌にし、而して家長は一家の主權を採るを。上世スラブ族の間に行はれし、雅風野俗とり〳〵に、なほ此恐なる民人の間に行はれ、嫁婚の歌に新婦賣奪の意尙存し、葬送の辭には基督敎の旨未入らず。之を要するに古朴の俗未亡びずして、三百年間殆んど人文進步の跡を認めず。上流社會獨進步して農民の負擔益重く地方漸く悲境に陷れり。

露西亞の市邑は仕官の屯戍せる壘砦(クレムル)にして、市邑の場末(ポサド)には市人(ポサドスキー)住めり。市邑の治者は地方君主の任命せし守官若しくは住民の撰びしスタロストにして、市邑附近の地亦其治下に在り。府人は重稅を負擔するを以て他に移住するを禁ぜられ、太しきは禁を破る者は死に該てらる。莫斯科帝國には所產尠からず、牛皮、黑狐皮、青狐皮、海狸、黃鼬の革皮、蠟蜜、麻、脂油、乾魚等所產多く、支那、不花刺、波斯より絹、茶、香料を輸入し、其民勤勉にして業に務むと雖も、なほ通商貿易の途開けざる、商賈を呼びてゴスチ(稱客の義)と做すにて知る可し。英人フレチェル、此原因を以て、上に在る壓制にして下民堵に安んぜず、誅求の下に營々たらんよりは、寧ろ蓄財を爲さゞるを得たりと爲すに歸せり。曰く、『此等の民は太くその賣買せしものをボヤルドに知られんことを畏怖し、寧ろ利得を濫費し去るを得策と思惟す。若し其故を問はゞ必ずや答へむ、貴族、若しくはボヤルドの子弟來りて、暴力を以てわが商品を奪ふを恐ると』と。ルロア・ボリユー氏は更に商業不振の說を爲して曰く、『此土に於て商賈市人の有力ならざるは、リトワニア、テウトニ武士團、タルタル等に接壤して、歐羅巴諸國と接壤せず、海に濱せず、諸通商の要路に當らざるに由る』と。二家の言ともに存す可し。要するに當時の市人は殆んど農民と異るなく、イワンが商賈は商業を爲す農民なりと、曰ひしは實情を鑿てる言なりき。

露西亞の貴族は家に男女多數の奴隷を養ひ、其多きを以て誇る。そのクレムリ

ンに朝するや海兎盛大、車馬を連ね兵士を從へ、後に夥多の奴を從ふ。此奴隷は或は外より購ひ、或は家内奴隷の産むところなり。此國、家長の權重大なるより婦人は閉居せらる。但この俗は蒙古征服にはじまりしにあらず、古俗自然るのみ。すべて露西亞社會の俗習はカザンの風化勘きにあらざるも、ビザンチオンの風化は遙に之にすぎたり。僧侶が婦人の爲に譯せし心得草に『婦の夫に仕ふるは奴の主に仕ふるが如くす可し』といひ、『決して自視るに主婦を以てす可からず、夫を視ること君主の如くせよ』といひ、家長は婦人を懲戒すること猶子女奴隷を懲罰するに等しく、シルエストルの著せしドモストロイにも、たゞ婦人を打つに太き棒若しくは鐵棒を用う可からず、また家人の前に於て鞭つ可からず、物に且穩に之を罰す可しといふのみ。而して婦人の此懲罰に反抗する者なく、頑婦と雖も甘んじて夫の鞭を受く。但聖に『予は女を愛する予が心の如く、予は女の塵を拂ふこと予が衣の如し』と。されば外人に嫁せる莫斯科の婦人は夫の、己を鞭たざるを以て己を愛せずと爲す者なりきといへり。かくて此土中に隱れ、外に出れば轎子の帷中に隱れ、面には被帛を懸く。貴族の夫人后妃の前に在りては眼を擧ぐるも禮にあらず、后妃の面を見るは大不敬と爲す。其嚴寃然スタンブール、若しくはイスパハンに於けるに異ならず。されば婦人は寺に詣づるさへ禁じられ、自家を以て寺院と爲し、家中に在りて、祈禱讀經、禮拜、施與を爲すを常とす。婦人の粉粧は最密に、面のみならず、眼も頸も手も五彩を以て描く。例之ば睫毛の黛と雖も黑きは白く、白きは黑く彩り、其彩法甚拙にして何人にも覩破し易し。有名なる一ボヤルドの夫人は國色たりしも、色彩を厭ひしを以て他の婦人の輕侮するところと爲り、是國風を輕んずる者なりと難ぜられ、遂に事天聽に達し、色彩を施す可き聖旨降れりといへり。土耳古、蒙古の風尚、強剛を美と爲せば露西亞にても亦力めて輕快の姿を排け、男子は多鬚長衣を好み、イワンのごときは鬚髯を剃るを以て造物の眞を害し天神の意に背くものと爲せり。

希臘教の影響はまた日常の遊樂にまで及べり。骨牌、將棊、歌舞、音樂の類に至るまて禁ぜらる。かのドモストロイに曰く、『卓上にて卑陋の談を爲し絲竹を弄し舞躍し拍手すれば、天使走り遁れ、惡魔代り來るべし。惡魔の歌(露西亞の古英雄の事蹟などを歌ひしものを謠ひし者、絲竹を弄びし者、犬鷹の遊を爲しゝ者、圍碁を爲せ

し者は皆地獄に墜す可し』と。既に此種の娯樂を奪ふ。而して一般人文の進歩なければ、從つて智學的生活存せず、婦人を幽閉すれば、こゝに愉快なる社會なし。國民の求むるところ唯痛飲放食の快を貪るに在るのみ。貧富を問はず、老弱を論ぜず、男女の別なく、街頭に醉臥するも、人視て怪しまず。宴遊の快は酣醉の快に過ぎず、敎を說く者曰く、『同胞よ、何の惡か飮酒に若かむや。醉者は記憶を失ひ、理性を失ひ、自家の行動を知覺せず。此快樂は神の法神の榮光に從ふものか。飮酒は無意義なり。醉者は尸に均し。人之に語るも答へず、たゞ獸のごとく泡吹き、惡臭を放ち、唸るのみ。飮酒は天使を逐ひ、惡魔を悅ばしむ。是則サタンに貢獻する者のみ。此時惡魔悅んで曰はむ、異端の徒の犧牲は一基督敎徒の飮酒の半だも我を悅ばすに足らずと。爾同胞よ、酣醉を呪へ。神は人をして愉快ならしむるために酒を與ふ。之を飮むは神の法に合し榮光に從ふものなれば、師父は決して酒を禁ぜずと雖も、たゞ愼んで酣醉する勿れ』と。說敎者の言斯の如し。以て實情を推知す可きのみ。

されどもドモストロイの禁は悉く守らる可くもあらず、滑稽諧謔の徒は宮中に

召され、寺院にすら容れ、犬鷹の狩、闘熊の技あり、之を演ずるに音樂を用ひ、醫者古露西亞の歌謠を唱ひ、富豪は必ず講談師を養ひ、イヴンの寢室には三個の講師あり、アレキシス・ミカイロヰチの世には既に歐羅巴風の演劇に類するものを見き。また西方諸國に行はるゝ迷信は一も行はれざる莫く、天元、星占、運氣、觀相、呪術を信じ、靈草の効驗、方術の利益、敵の足跡を痕ふの法、魔劍、媚藥、化狐、幽鬼、吸血鬼等の奇事怪譚を傳へて怪しまず。殊に星占觀相者を恐るゝこと太しく、明君良主尙且免れず、ボリス・ゴツノフすら其下をして、男女の占相者と交らしめず、后嬪子女の足跡車轍を痕ふことなしと雖はしむ。また醫を見ること猶巫のごとく、醫藥よりは寧ろ靈水の効を信じ、醫にして病を視て治するを得ざれば不能の魔術者、不靈の呪師として刑死を免れざりき。

以上は十六、七世紀の間、露西亞に來往せし墺地利の使節ヘルベルスタイン、マイエルベルグ、コベンツェル、英吉利の使節チャンセラー、ジェンキンソン、フレチェル、ヱネチア人コンタリニ、羅馬の商賈バルベリニ、嗹客ウルフェルド、瑞典人ペトレイ、日耳曼のハイデンスタイン、エリクラッタ、オレアリウス、耶蘇會士バッセキ